

全体研究

【研究主題】

未来の創り手に求められる資質・能力を育成する授業に関する研究Ⅱ
ー学びの価値を見いだす授業デザインー

目 次

はじめに	1
第1章 各教科等の研究の基本となる研究	
1 研究の目的	2
2 研究の内容（学びの価値を見いだす授業デザインの基本的な考え方）	5
第2章 国語科における研究	
1 国語科の授業で目指す児童生徒像及び授業像	10
2 国語科における児童生徒に「学びに向かう力」をより涵養するための視点	11
3 国語科における学びの価値を見いだす授業デザイン	15
4 小学校における研究実践例	16
5 中学校における研究実践例	18
6 高等学校における研究実践例	20
第3章 社会・地理歴史・公民科における研究	
1 社会・地理歴史・公民科の授業で目指す児童生徒像及び授業像	22
2 社会・地理歴史・公民科における児童生徒に「学びに向かう力」をより涵養するための視点	22
3 社会・地理歴史・公民科における学びの価値を見いだす授業デザイン	26
4 小学校における研究実践例	28
5 中学校における研究実践例	30
6 高等学校における研究実践例	32
第4章 算数・数学科における研究	
1 算数・数学科の授業で目指す児童生徒像及び授業像	34
2 算数・数学科における児童生徒に「学びに向かう力」をより涵養するための視点	34
3 算数・数学科における学びの価値を見いだす授業デザイン	38
4 小学校における研究実践例	40
5 中学校における研究実践例	42
6 高等学校における研究実践例	44
第5章 理科における研究	
1 理科の授業で目指す児童生徒像及び授業像	46
2 理科における児童生徒に「学びに向かう力」をより涵養するための視点	47
3 理科における学びの価値を見いだす授業デザイン	49
4 小学校における研究実践例	52
5 中学校における研究実践例	54
6 高等学校における研究実践例①	56
7 高等学校における研究実践例②	58
第6章 外国語活動、外国語科における研究	
1 外国語活動、外国語科の授業で目指す児童生徒像及び授業像	60
2 外国語活動、外国語科における児童生徒に「学びに向かう力」をより涵養するための視点	60
3 外国語活動、外国語科における学びの価値を見いだす授業デザイン	64
4 小学校における研究実践例	66
5 中学校における研究実践例	68
6 高等学校における研究実践例	70
おわりに	72
主な引用・参考文献	72

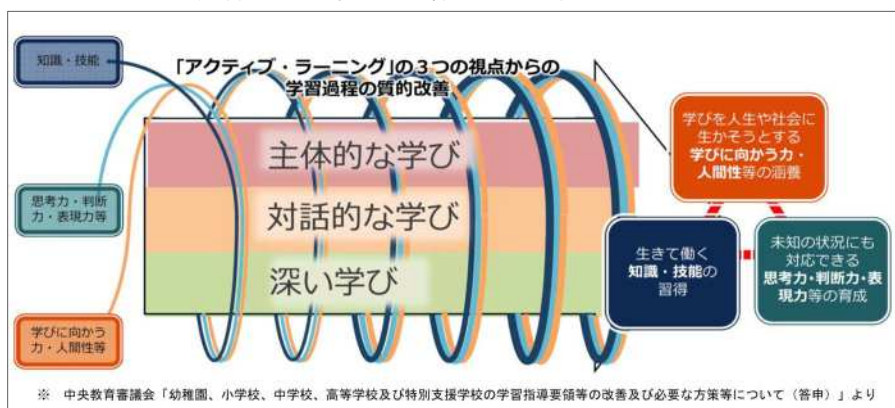
はじめに

これからの社会を生きていく児童生徒が直面する時代は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展、絶え間ない技術革新等により、社会構造が急激に変化する予測困難な時代であり、一人一人が持続可能な社会の担い手として、個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されている。そのため、新学習指導要領（小・中学校は平成 29 年告示，高等学校は平成 30 年告示）では，そのような時代に児童生徒が対応できるよう，社会の変化に主体的に関わり，生きる目的を自ら考え，よりよい社会と幸福な人生の創

り手に求められる資質・能力を育成するという基本的な考え方が踏まえられている。

資料 1-1 は，中央教育審議会で示されたアクティブ・ラーニング，いわゆる主体的・対話的で深い学び（以下「三つの学び」）のイメージであり，新学習指導要領において私たち教師が目指すべき授業の姿を表している。

資料 1-1 主体的・対話的で深い学びのイメージ



このことから，私たち教師は，資質・能力の三つの柱をバランスよく育成するために，主体的・対話的で深い学びをバランスよく授業に位置付ける必要がある。

この研究は，新学習指導要領や国の教育振興基本計画並びに鹿児島県教育振興基本計画を踏まえ，児童生徒の資質・能力の育成を目指すものであり，平成 29 年度から令和 2 年度の 4 年間を，基礎研究と本研究の 2 年間ずつに分けて計画して取り組んできた。平成 29 年度及び 30 年度は，研究サブテーマを「主体的・対話的で深い学びの実現を通して」とし，育成を目指す資質・能力を未来の創り手に求められる資質・能力であると捉え，その育成の仕組みを解明するとともに，授業で扱う学習内容や学習方法の在り方を明らかにするなど，新学習指導要領の考え方を咀嚼し，県下へ周知・啓発することを中心とした研究に取り組んできた。

2 年間の研究を通して明らかになったのは，未来の創り手に求められる資質・能力を育成する上で，知識の理解の質を高めることが重要であり，児童生徒が既得の知識と新たな知識をつなぎ，汎用的な生きて働く知識に高めていくことが大切であるということである。そのためには，児童生徒が個別の知識を習得することにとどまらず，知識同士をつないで概念的な知識を獲得したり，学んだことを社会生活に生かしたりすることができるよう，授業における学習内容の扱い方や学習方法について工夫する必要がある（資料 1-2）。

資料 1-2 平成 29 年度及び 30 年度研究の概要

知識の理解の質を高めるために

学習内容の質

- 知識を文脈や状況とともに扱う。
- 知識を相互に関連付ける。

学習方法の質

- 「主体的・対話的で深い学び」を実現する。
 - ・ 学びや変容の自覚
 - ・ 考えなどの広がり，深まり
 - ・ 「見方・考え方」を働かせる学び

さらに，授業のねらいを達成させるためには，「三つの学び」が実現できる授業像を明確にして，各教科等の見方・考え方を働かせることができるように，学習内容や学習方法の側面から授業改善を図ることが大切である。これらの基礎研究を土台に，令和元年度及び 2 年度は，鹿児島県の児童生徒の学力の課題を踏まえた研究に焦点化することにした。

第1章 各教科等の研究の基本となる研究

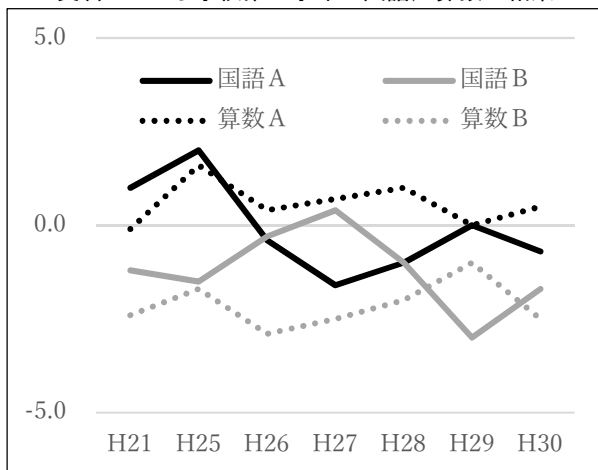
1 研究の目的

(1) 研究の背景

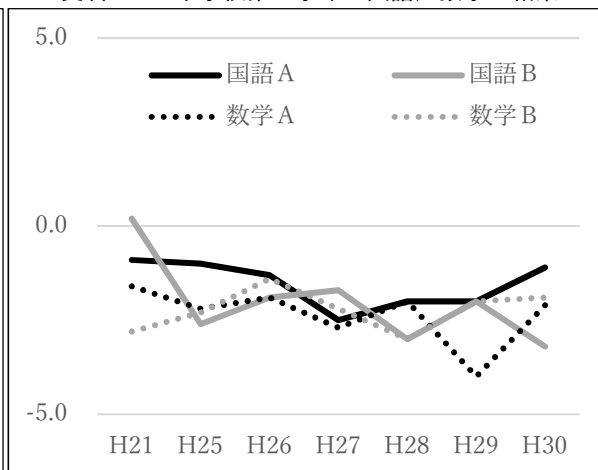
ア 全国学力・学習状況調査等の結果から

資料1-3, 1-4は、平成21年度から30年度までの全国の小学校第6学年と中学校第3学年児童生徒の国語科、算数・数学科の平均正答率と鹿児島県の平均正答率との差を表したものである。

資料1-3 小学校第6学年の国語、算数の結果



資料1-4 中学校第3学年の国語、数学の結果



このような調査等で測定できるのは児童生徒の学力の一部分に過ぎないが、この結果から鹿児島県の児童生徒の平均正答率は全国の平均正答率と比べて決して高いとは言えず、鹿児島県の児童生徒の学力に関する結果が厳しい状況であることは確かである。また、鹿児島県公立高等学校入学者選抜学力検査において目安点（いわゆる、小学校で履修した内容を含む基礎的内容の設問の合計点）未満の教科を1教科以上持つ生徒の人数は年々増えてきており、ここ数年は、10人中1～2人は目安点未満の教科があるという状況が続いている。しかも、無解答が多い。

一方、全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙（平成30年度）の結果においては、「学校の授業時間以外に、1日当たりどれくらいの時間、勉強しますか」、「授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」などの項目が全国平均よりも高い数値であった。このことから、鹿児島県の児童生徒は、学ぶことの大切さを理解しており、学習に対して前向きに取り組んでいると考えられる。

さらに、同調査の学校質問紙（平成30年度）の結果においても、鹿児島県の教師は「習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか」、「数学の指導として、生徒に与えた家庭学習の課題について、評価・指導しましたか」、「補充的な学習の指導を行いましたか」、「言語活動について、学校全体として取り組んでいますか」などの指導方法の改善、補充指導など、授業改善に関する項目が全国平均よりも高い数値であった。このことから、鹿児島県の教師も、授業改善を図るために前向きに取り組んでいると考えられる。

イ 鹿児島県総合教育センター教科教育研修課調査研究に係る調査結果から

(ア) 調査の目的

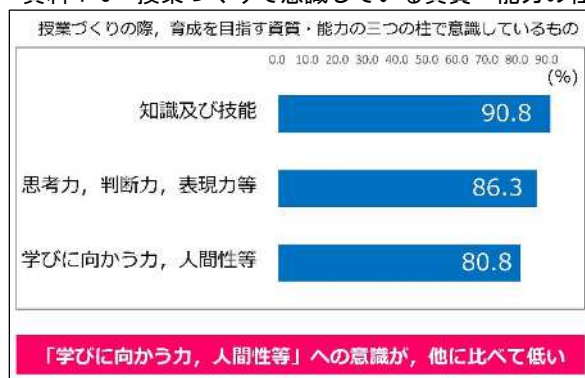
研究主題に関する諸事象についての教師の意識等の実態を把握する。

(イ) 調査の概要

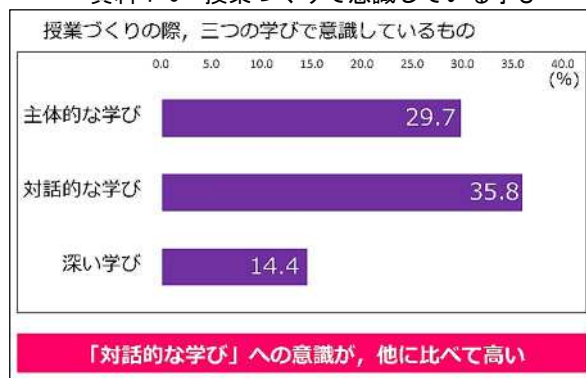
内 容	育成を目指す資質・能力の三つの柱や、「主体的・対話的で深い学び」等に関する意識調査
対 象	1,064 人（小学校 656 人，中学校 370 人，高等学校 38 人） ※ 短期研修講座受講者，研究提携校（山下小，鹿屋小，宇宿小，吉田南中，鹿屋中，松陽高）の教師
期間及び方法	令和元年 8 月～11 月，令和 2 年 6 月～10 月 質問紙調査（選択式，一部記述）にて実施

(ウ) 調査の結果

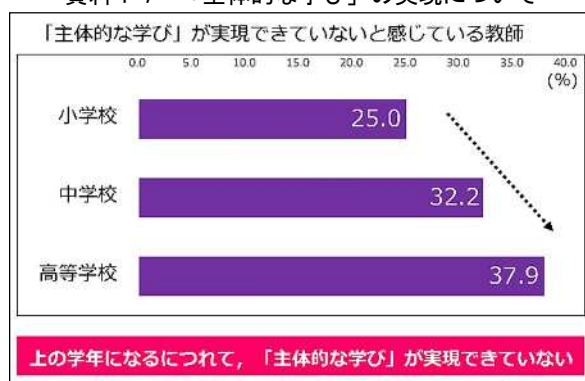
資料 1-5 授業づくりで意識している資質・能力の柱



資料 1-6 授業づくりで意識している学び



資料 1-7 「主体的な学び」の実現について



授業づくりを行う際に，他の二つの資質・能力よりも，「学びに向かう力，人間性等」の育成を意識する教師が少ないということが分かる（資料 1-5）。

「主体的・対話的で深い学び」について，授業づくりの際，「対話的な学び」，「主体的な学び」，「深い学び」の順に意識しているという回答が多いことが分かる（資料 1-6）。

校種別に児童生徒の「主体的な学び」の実現についてまとめると，学年の進行に伴って実現できていないと感じる教師が多いということが分かる（資料 1-7）。

ウ 調査結果等からの考察

本課の調査結果から次のようなことが考えられる。

- ・ 児童生徒は学年の進行に伴って，「主体的な学び」が実現されにくく，学習意欲の低下につながっていきと考えられる。
- ・ 教師は他の二つの資質・能力の柱に比べ，「学びに向かう力」の涵養を意識した授業づくりを心がける必要がある。

さらに，全国学力・学習状況調査の結果等を加えて考察すると，鹿児島県内の学校における授業では，「対話的な学び」を設定する際，グループ活動や学び合いを，学習の目的や学習に対する児童生徒の必要感を踏まえず，形式的に入れ込んでいる状況が少なくないということが考えられる。そのため，児童生徒の学習への興味・関心と，教師が学習させたい内容とが

資料 1-8 調査結果から考えられる学びの様相



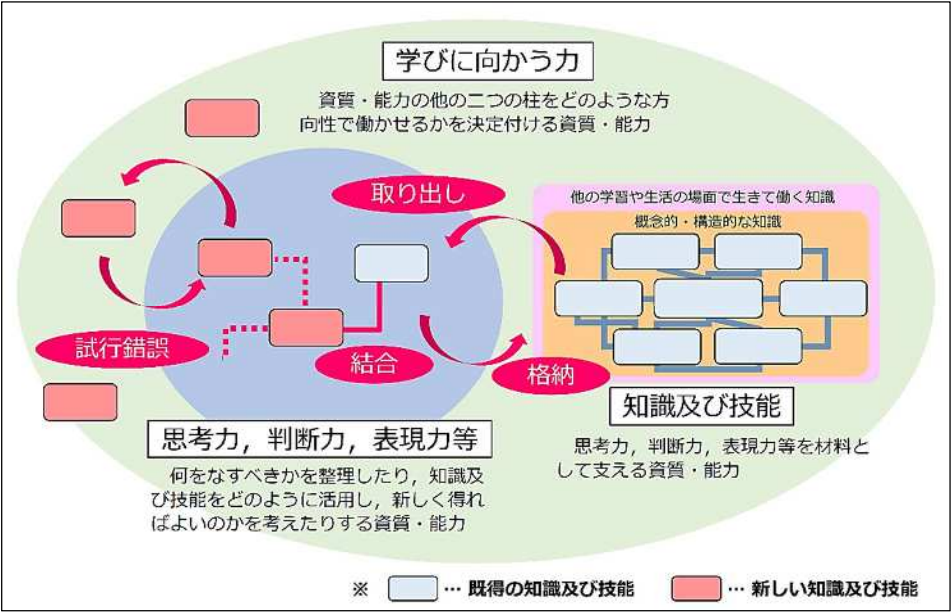
噛み合わず、いわゆる教師主導の授業となる傾向となり、児童生徒の「主体的な学び」が十分実現できていないと考えられる。その結果、児童生徒は学習に対しての興味・関心を十分もてず、学びの質は高まらない。よって「深い学び」の実現に至りにくく、資質・能力の三つの柱は互いに絡み合わずにバランスよく育成されていないのではないかと考えられる（資料 1-8）。

(2) 研究の方向

これらのことから、鹿児島県の児童生徒の実態を踏まえた授業改善を図るためには、「学びに向かう力」の涵養を特にねらい、「三つの学び」をバランスよく配した授業を行うことが必要であると考ええる。

資料 1-9 資質・能力の三つの柱と知識及び技能の関係

私たちは、考えた
り、判断したり、表
現したりする際、資
料 1-9 のように、既
得の知識及び技能
を取り出したり、新
しい知識及び技能
を外部から取り込
んだりして、考え、
判断し、表現するた
めの材料を集める。
そして、それら個別
の知識及び技能同



士の組合せを試行錯誤し、結合させ、他の学習や生活の場面においても活用できるような確かな知識及び技能や概念を生成する。生成した知識及び技能や概念は、既得の知識及び技能として、いつでも使えるように格納する。

つまり、育成を目指す資質・能力の三つの柱の「思考力、判断力、表現力等」とは、自分を取り巻く状況と自分との関わりを見つめて具体的に何をなすべきかを整理したり、知識及び技能をどのように活用し、新しく得ればよいのかを考えたりするなどの資質・能力、「知識及び技能」とは、「思考力、判断力、表現力等」を材料として支える資質・能力と言える。そして、「学びに向かう力」とは、資質・能力の他の二つの柱をどのような方向性で働かせるかを決定付ける資質・能力であり、言い換えれば、「思考力、判断力、表現力等」を活性化する資質・能力であり、児童生徒が学ぶ上での原動力であると言っても過言ではないと考える。その原動力と言える「学びに向かう力」の涵養に対して教師の意識が低いということは、児童生徒の学ぶ目的意識や必要感の低下、ひいては、児童生徒が学びの価値を十分感じることができないということにつながっていると考えられる。

そこで、本研究で目指す児童生徒像、授業像を次のように設定した。

目指す児童生徒像	学びの価値を見だし、学びに自ら向かう児童生徒
目指す授業像	「学びに向かう力」の涵養を強く意識した授業

このような授業を工夫して継続的に行うことで、目指す児童生徒の姿により迫ることができると考え、研究主題を次のように設定した。

未来の創り手に求められる資質・能力を育成する授業に関する研究Ⅱ — 学びの価値を見いだす授業デザイン —
--

2 研究の内容（学びの価値を見いだす授業デザインの基本的な考え方）

(1) 学びの価値を見いだす授業

ア 学びの価値

児童生徒に「学びに向かう力」を涵養するためには、学習へのモチベーション（動機付け）を一層高める必要がある。動機付けには外発的動機付けと内発的動機付けがあり、外発的動機付けによる学習は報酬や賞罰のための手段になってしまうが、内発的動機付けによる学習は知的好奇心を満たすという目的となり得ることが広く知られている。なお、児童生徒が学びに対して知的好奇心を抱く際、次のような感情が有機的に絡み合い、複合的に働くと考えられる。

・ 学びへの興味・関心	・ 学びの目的意識の実感	・ 学びの必要感
・ 学びの達成感	・ 学びの成功感	・ 学びのよさの実感 など

児童生徒はこれらの感情を重ねたり、繰り返し実感したりすることで、向き合った学びに対する価値を強く実感していくと考える。つまり、学びの価値とは、上記のような感情によって形成される価値であると考えられる。

イ 学びの価値を見いだす授業

学びの価値を見いだす授業を実現するためには、前述のような感情を実感させることが必要となる。そのため、そのような感情を抱かせるために「学びに向かう力」の涵養を強く意識した授業が望まれる。

そこで、「学びに向かう力」を涵養できるように、「主体的な学び」を軸に「三つの学び」を組み合わせることで、児童生徒に学びの価値をより実感させることができると考える。

具体的には、授業における様々な手立てを、児童生徒が主体的に関われるような手立て、いわゆる内発的動機付けが促される手立てとし、積極的に授業に配するようにする。内発的動機付けに関しては、その心的要因やそれを意識した指導方法等についてこれまで様々な研究がなされている。

これらの考え方を参考に、資料 1-10 のように、児童生徒に「学びに向かう力」を涵養するための四つの視点「必要性」、「自律性」、「関係性」、「有用性」を見いだし、資料 1-11 のように整理した。

これらのことから、学びの価値を見いだす授業とは、児童生徒に「学びに向かう力」を涵養するために、これらの四つの視点を踏まえた手立てを位置付けた授業であると言える。

ただし、設定する手立ては、教師の指導観やこれまで培ってきた授業技術、児童生徒の実態等に左右されるため、設定する教師によって変化し得る。また、四つの視点に基づいた手

資料 1-10 先行研究と児童生徒に「学びに向かう力」を涵養するための四つの視点

	発動的	創造的 努力的		歓喜的
自律的学習の要件 (木下竹次, 1923)				
内発的動機付けを 促す欲求 (デシ, 1985)		自律性	関係性	有用性
モチベーション3.0の 三つの要素 (ダニエル・ピンク, 2010)	目的	自律性		マスタリー (熟達)
ARCSモデル (ケーラー, 2010)	注意		関連性	自信 満足感
児童生徒に 「学びに向かう力」を 涵養するための 四つの視点	必要性	自律性	関係性	有用性

立てを，単元や1単位時間に必ずしも全て入れ込む必要はなく，扱う順序や軽重も設定する教師によって変化して当然であると考える。

資料 1-11 児童生徒に「学びに向かう力」を涵養するための四つの視点

	各視点の基本的な捉え	児童生徒の姿（例）
必要性	学習に動機を与え，必然をもたせる視点	「～のためにしている。」 「～する必要がある。」
自律性	学習内容・方法を自分の意志で決められる視点	「自分で～している。」
関係性	知識及び技能同士を結び付け，自分の考えを広げたり深めたりする視点	「～が参考になる。」 ・「やっぱり～だ(強固)。」 ・「～もいいな(付加)。」 ・「～の方がいいな(修正)。」
有用性	学習に意味を見だし，自分の資質・能力に自信がもてる視点	「なるほど～なのか。」 「～できた。」

また，資料 1-12 は，小学校国語科の授業において，知識及び技能の習得に重きを置いた，単に新出漢字を機械的に書いて覚えさせていた授業を，「学びに向かう力」を涵養するための四つの視点で，学びの価値を見いださせるようにした手立てを講じた学習の改善例である。

資料 1-12 これまで単に新出漢字を機械的に書いて覚えさせていた学習の改善例（小学校国語科）



(2) 「学びに向かう力」を涵養するための四つの視点

ア 必要性

基本的な捉え	児童生徒の姿（例）
学習に動機を与え，必然をもたせる視点	「～のためにしている。」 「～する必要がある。」

「欲求が満たされない」，「自分は未完成だ」，「自分の力が及ばない」などと感じ，解決したい問いができたとき，児童生徒はこれまでの自分を突き破るべく，新しい学びに挑もうとする。そして，解決したい問いを追究しようとしたとき，自分自身にとって新しい学びが発動する。このとき，学びに動機を与えるものが必要性を感じさせる手立てとなり得ると考える。

必要性を感じさせる手立ては，例えば次の二つが考えられる。

○ 実用的な必要性を感じさせる手立て

児童生徒に学ぶ必要性を見いださせるのに有効なのは，学ぶことで自分の日常生活がより豊かになったり，自分自身の資質・能力がこれまで以上に向上したりすると感じさせることである。そのため，学びの結果，日常生活における疑問や課題を解消したり，これまで以上に自分自身が向上したりできることが見いだせればよいのだと考える。つまり，児童生徒の日常生活に結び付いた，いわゆる「役に立つ」学びを実現できる手立てが必要となる。

○ 知的好奇心を満たす手立て

学びは、その内容が複雑になるほど日常生活に直接結び付く事象から離れ、より抽象化していく。そのため、児童生徒の学びが高まるほど、学びは何かの役に立つといった日常生活に直結した具体的なもののだけでなく、「分からないことを知りたい、もっと知りたい」といった自身の知的好奇心を満たしたり、そのために考えたりすることに喜びを見いだしたりするものに広がっていくと考える。

そのため、児童生徒が学ぶ過程で見いだした「解決したい」、「もやもやを解消したい」などの児童生徒の内面から湧き上がる、いわゆる欲求を満たす手立てが必要であると考え。

イ 自律性

基本的な捉え	児童生徒の姿（例）
学習内容・方法を自分の意志で決められる視点	「自分で～している。」

私たちは物事を自己決定することで、物事をコントロールしているという自己満足感を味わうことができる。さらに、物事を決めた自分を誇らしく感じることもできるとともに、最後まで遂行しようとする責任感を抱くことができる。学びにおいても、一見教師にとっては些細なことであると感ずることで、児童生徒が自分自身で決めるということに深い意味があると考え。

また、教師は、児童生徒の発達の段階ごとに学習内容が定められた学習指導要領に基づいて授業を行うが、必ずしも児童生徒が学びたいこととは一致しない場合がある。そのため、教師が学ばせたいことと児童生徒が学びたいことを結び付けることが重要である。

これらのことから、自律性を感じさせる手立てとは、児童生徒が学びに対して肯定的に受け止めることができるように、児童生徒に学習内容や学習方法などの自己決定を促す手立てであると言える。

自律性を感じさせる手立ては、例えば次のようなものが考えられる。

○ 「選択させる」手立て

学習経験が少なかったり、解決の糸口を想起しにくかったりする場合、児童生徒は積極的に自ら考え活動することが難しい。また、主体的な学びを実現させようとして、教師が学習内容や方法を細かく規定しないことで、児童生徒はかえって難しく感じ、混乱してしまう場合がある。

そこで、学習内容や方法、考え方などを実態に応じて児童生徒に「選択させる」ことで、ほどよい自律性を感じさせながら学ぶことができ、教師が学ばせたいことにつながりやすくなると考える。

ウ 関係性

基本的な捉え	児童生徒の姿（例）
知識及び技能同士を結び付け、自分の考えを広げたり深めたりする視点	「～が参考になる。」 ・「やっぱり～だ（強固）。」 ・「～もいいな（付加）。」 ・「～の方がいいな（修正）。」

知識及び技能や概念は、何もないところから創られることはない。前述の資料 1-9 のように、私たちは、個別の知識及び技能同士を結び付け、自分にとって新しい知識及び技能や概念を生成している。学びにおいて、児童生徒は個人内に蓄積されている知識及び技能同士を結び付けようと試みるが、個人内の知識及び技能同士を結び付けて新しい知識及び技能や概念を生成していくには限界がある。そこで、個人内だけでなく個人外、いわゆる他者が保有する知識及び技能と結び付けることで、自分にとって新しい知識及び技能や概念を生成することができると考える。この場合の他者とは、一緒に学習している友達、教師、保護者、そして著作物等に内在する知識及び技能を指す。

これらのことを繰り返すことで、児童生徒は学びがつながるよさを感じるようになり、他者と関係をもって学ぶことに対して好意的に、場合によっては居心地のよさを感じるようになる。

つまり、関係性を感じさせる手立てとは、自分にとって新しい知識及び技能や概念が生成され、児童生徒の考えが広がったり深まったり（強固・付加・修正）するように、個人や他者が保有している知識及び技能を結び付ける手立てであると言える。

関係性を感じさせる手立ては、例えば次の二つが考えられる。

○ 個人や他者が保有する知識同士を結び付ける手立て

私たちは様々な知識や概念の保有を必ずしも自覚しているわけではないため、自分にとって新しい知識や概念を生成する際、保有する知識のみでは有効に結び付けられないことがある。そこで、新しい知識や概念の生成に必要な知識や概念を意識できるように、既習事項やそれらを活用した際の考え方などを想起させる手立てが有効となる。

また、児童生徒は教師のもつ知識や書物等に書かれている知識など、いわゆる確定している知識とつながることで、新しい知識や概念を生成していくことが多い。しかし、児童生徒が今後予測困難な時代を生きていくために、確定している知識だけでなく、メディアやSNS、友達同士の意見交換なども含めた現在進行中の生きた情報など、いわゆる確定していない知識も活用させるような手立てを視野に入れる必要がある。

○ 児童生徒一人一人の考えの変容を促す手立て

既得の知識の量や体験の違いなどから、一斉授業における児童生徒一人一人の学びは異なるため、一人一人に最適化された学習が望まれている。そこで、児童生徒一人一人に解決したいことを考えさせたり、「自分の考え」を確実にもたせたりする手立てが必要となる。

また、自分の学びを進めていく際、必要な知識は個人によって異なる。そこで、「自分の考え」の広がりや深まり（強固・付加・修正）を促す手立てが有効となる。

エ 有用性

基本的な捉え	児童生徒の姿（例）
学習に意味を見だし、自分の資質・能力に自信がもてる視点	「なるほど～なのか。」 「～できた。」

児童生徒にとって実のある学びに至る学習過程は、解決したい問いに対して納得のできる結果だけでなく、その途中の価値や達成感、成功感、学びのよさなどの実感をもたらすものである。そのため、そのような学習過程を遂行した児童生徒は、新たな解決したい問いを見だし、学びを連続させていくことになる考える。

さらに、児童生徒にとって実のある学びは、遂行した自分の学習過程に対してだけでなく、学んできた自分自身に対しても有用感を感じさせる。その結果、児童生徒は学ぶことに対して前向きになり、新たな学びに挑もうとする感情が高まる。つまり、次の新たな学びに対して、必要性を感じることができるようになる考える。

有用性を感じさせる手立ては、例えば次のようなものが考えられる。

○ 遂行した学習過程における学びを測る手立て

児童生徒が学びの達成感や成功感、よさを実感するためには、自分自身が遂行した学習過程における学びを測る比較対象が必要である。そのため、単元及び1単位時間の学習を通して、「何が分かったのか、できるようになったのか」、「学びを通して自分の考えがどのように変容したのか」などについて、形成的、総括的に自分自身の学びを評価したり、個人内で絶対的に評価したりする必要がある。

(3) 学びの価値を見いだす授業デザイン

ア 学びの価値を見いだす授業デザインとは

「デザイン」という言葉には「設計」や「意匠」という意味があり、つくられているもののつくられ方を意識している言葉である。授業においては、つくられるものは「学習者の学び」であり、学習者とは児童生徒である。つまり、授業デザインを考えるとときには、その学びを教師としてどのように組み立てるかが重要となり、学習者である児童生徒の立場で考える必要がある。

したがって、授業デザインとは、テキストやプリント等の教材や板書等を使ってどのように教えるのかといった教師の「指導」を設計することだけではなく、資料 1-13 のように、児童生徒が体験したい活動や自分自身で考えるための思考プロセスに必要なことを基にした児童生徒主体の「学習」を設計することであると言える。そのため、「授業デザイン」を画一的なものとして設定することは不可能であり、児童生徒の実態や学習内容等に応じて柔軟に変化させる必要があるため、教師はその都度最適化した手立て等を用いた「学習」方法を検討しなければならない。

これらのことから、学びの価値を見いだす授業デザインとは、児童生徒に「学びに向かう力」を涵養させるための四つの視点を踏まえ、それぞれの状況に応じた学習方法を設定するなど、児童生徒にとって最適な学習を設計することであると言える。

これらのことから、学びの価値を見いだす授業デザインとは、児童生徒に「学びに向かう力」を涵養させるための四つの視点を踏まえ、それぞれの状況に応じた学習方法を設定するなど、児童生徒にとって最適な学習を設計することであると言える。

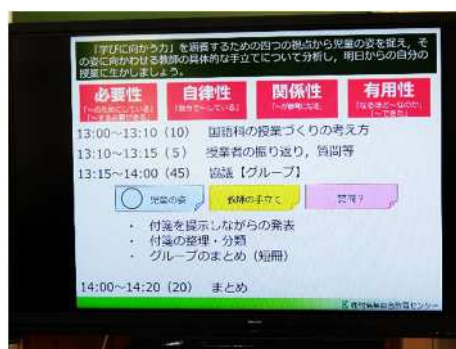
資料 1-13 学びの価値を見いだす授業デザインの要件



イ 学びの価値を見いだす授業をデザインするに当たって

資料 1-14 学びの価値を見いだす授業デザイン例（授業の後）

学びの価値を見いだす授業をデザインする際、授業の前だけでなく、授業中や授業後に、学習内容や児童生徒の実態に応じて吟味することで、より最適化した手立てを講じることにつながる（資料 1-14）。



さらに、授業デザインは児童生徒の実態等に応じて、単元や1単位時間の途中で変化するし得るものである。そのため、児童生徒の実態を具体的に把握し、その都度、「学びに向かう力」を涵養させるための四つの視点を踏まえた手立てを授業に反映させていくことが重要である。そして、これをPDCAサイクルで連続・発展させていくことで、学びの価値を見いだす授業デザインはより高次なものへと変化していくと考える。

大切なのは、授業デザインを画一的に捉えたり、スタンダードなものとして定義したりするのではなく、教師一人一人が教科等の特性や学習内容、児童生徒の実態、そして教師自身の指導観等に応じて、児童生徒に最適化した授業をデザインしていくことである。

第2章 国語科における研究

1 国語科の授業で目指す児童生徒像及び授業像

国語科は、国語で理解し表現する言語能力を育成する教科であり、教師は主に創造的・論理的思考力や感性・情緒、コミュニケーション能力の育成を目指している。

しかし、児童生徒に論理的思考力やコミュニケーション能力が十分身に付いているとは言い難い状況がある。また、近年映像から文字情報を読み取ったり、自分の気持ちを表現する際に言葉以外で表現したりする機会が増えてきたことで、日常生活の中で言葉を中心にして読んだり書いたりすることを通して感性・情緒を育む機会が少なくなっている。

このような背景の下、児童生徒は、国語科の授業に対して積極的に向き合おうとしない傾向がある。そのため、「国語を学習したい。」「授業を通してこんなことができるようになりたい。」など国語を学ぶことに価値を見いだす姿や「分かってうれしい。」「できるようになった。」という成就感や達成感を得て主体的に学ぼうとする「学びに向かう力」が十分涵養されにくい現状である。

国語科では、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成することが求められる。「言葉による見方・考え方を働かせる」とは、言葉の自覚を高めるということであり、日常生活において意識しにくい言葉や文章に着目して、国語の学習を行うことが必要である。どのようにして言葉の自覚を高めさせるかという方法は、身に付けさせたい資質・能力を明確にし、児童生徒の実態に応じて設定した様々な言語活動を通して、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりさせることとなる。教師は、まず児童生徒にどのような国語の資質・能力を身に付けさせたいのか、そのためにどのような言語活動を行えばよいのかを考える必要がある。そして教師のみならず、児童生徒一人一人が「今日の国語科の授業では何のために学ぶのか。」ということをしかりと理解し、自分なりの問い(以下、「自分の問い」)をもって課題解決の見通しをもち、学びたいと思うことが、児童生徒の主体的に学ぶ姿につながる。そのためには、教師が考える児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を、児童生徒にとって興味・関心のあるものへとつなげることが重要である。

以上のことから、国語科では、目指す児童生徒像を、『自分の問い』を立て、課題解決の見通しをもちながら言語活動を通して言語能力を育成し、国語を学ぶ価値を実感できる児童生徒」と捉え、更に児童生徒に「学びに向かう力」を涵養するために、資料 2-1 のような四つの視点で児童生徒像を設定した。そのため、更に国語科で目指す児童生徒の姿の実現を図るために、児童生徒が言葉による見方・考え方を働かせながら、「自分の問い」を解決できる授業を目指す(資料 2-2)。

資料 2-1 目指す児童生徒像

「自分の問い」を立て、課題解決の見通しをもちながら言語活動を通して言語能力を育成し、国語を学ぶ価値を実感できる児童生徒			
			
必要性	自律性	関係性	有用性
単元を通して「自分の問い」を立て、国語の学びに自覚的になっている姿	「自分の問い」を自ら解決する姿	他者との交流、読書により、考えを広げたり深めたりしている姿	国語を学ぶ価値を実感している姿

資料 2-2 目指す授業像と手立て

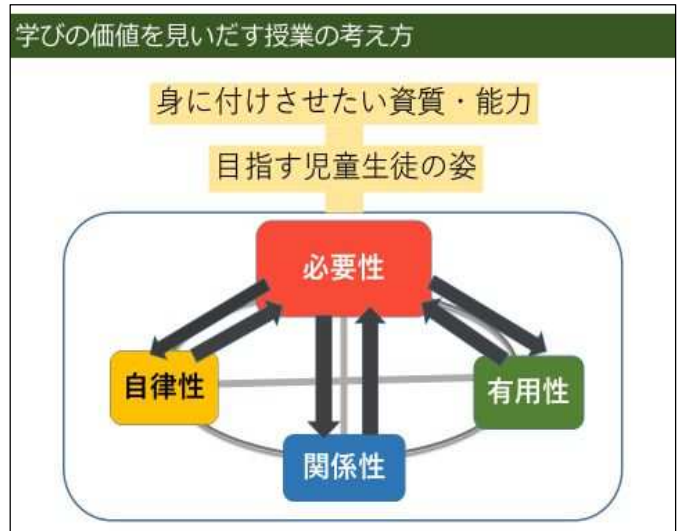
国語の学びの価値を実感させるために、課題解決の見通しをもち、言語活動を通して、言葉による見方・考え方を働かせながら「自分の問い」を解決することができる授業			
			
必要性	自律性	関係性	有用性
「自分の問い」と単元に身に付けさせたい指導事項が重なる手立て	「自分の問い」を自ら解決しようとする児童生徒を支える手立て	自分の考えを広げたり深めたりするために、必要な情報を収集し活用させる手立て	振り返りを通して、次の学びにつなぐ手立て

2 国語科における児童生徒に「学びに向かう力」をより涵養するための視点

(1) 四つの視点の基本的な考え方

国語科では、「学びに向かう力」を涵養するための四つの視点「必要性」、「自律性」、「関係性」、「有用性」のうち、特に「必要性」を重視する。それは、「なぜ国語を学ぶのか。」「この単元を学ぶことで何ができるようになるのか。」という国語を学ぶことの「必要性」を児童生徒に十分に実感させたいからである。そのため、教師は身に付けさせたい資質・能力から目指す児童生徒の姿を明確にして、単元や1単位時間を通して取り組む学習課題を設定し、授業をデザインする必要がある(資料2-3)。

資料 2-3 「必要性」を中心に据えた四つの視点



「必要性」の視点によって生まれた自分の課題を解決したり、自分の好奇心を満たしたりするためには、どのように学習すればよいかという「自律性」の視点が、言語活動への取組を一層充実したものにする。

さらに、「必要性」の視点によって自分が得るべき情報を自覚することにつながり、「関係性」の視点から、個人や他者が保有する知識同士を結び付けることができるようになる。

そして、こうして深められた自分の考えを振り返り、課題が解決し、好奇心が満たされたり、もっと追究したいと感じたりすることで、国語を学ぶことの意義や価値を実感する「有用性」の視点が生かされ、次の国語の学びに対する「必要性」をもつことにつながると考える。

ここで留意したいのが、「必要性」をはじめとする四つの視点による手立ては、1単位時間または単元を通して、常に同じ順序や比重で設定するのではなく、児童生徒の実態や教師の指導観、これまで培ってきた授業技術、身に付けさせたい資質・能力などにより、変化し得るということである。また、この四つの視点は相互に関連しており、それぞれに明確な線引きがあるということではない。

(2) 必要性 「自分の問い」と単元で身に付けさせたい指導事項が重なる手立て

国語科では、児童生徒に必要性をもたせるための手立てを「『自分の問い』と単元で身に付けさせたい指導事項が重なる手立て」とした。国語科の授業において、「なぜわざわざ国語を学ばなければいけないのか。」といった国語科の学習に対する必要性を感じていない児童生徒が少なくないのは、教師が授業を一方的に進めてしまい、国語科を学ぶことの必要性や好奇心をくすぐるような興味・関心を児童生徒に十分もたせられていないことが大きな要因の一つであると考えられる。

そこで、教師は、単元の導入や前単元の振り返りの際に、児童生徒が学習の全体像を捉え、児童生徒に身に付けさせたい力を自分で把握できるように見通しや課題意識をもたせる手立てをとる必要がある。その際、教師は、単元の学習課題と児童生徒一人一人がそれぞれ立てる「自分の問い」をつなぐことを意識し、児童生徒に自ら「解決したい。」という気持ちを芽生えさせるようにすることが大切である。なお、「自分の問い」とは、1単位時間または単元を通して、児童生徒一人一人が解決

したいと考える課題や疑問等である。

学習課題の設定に当たって、四つの要件を提案する(資料2-4)。

1点目は、普段から情報収集等に努め、様々な視点から日常生活や他教科等と関連させ学習課題を設定することである。日常生活や他教科等における課題や疑問を言葉による見方・考え方を働かせて考えることができると、児童生徒に国語を学習する必要感が生まれる。

2点目は、児童生徒が主体的に学習に取り組めるように、前単元や前時との連続性を大切にした言語活動を取り入れることである。連続性を大切にした言語活動を取り入れることで、児童生徒は前単元とのつながりを意識することができ、自身の成長も顕著に実感することができる。

3点目は、児童生徒の「なぜ」という疑問を大切に感動・意外性・矛盾を感じさせることである。「感動したから、もっと考えてみたい。」「思っていたことと違って意外だったからもっと学習したい。」「この矛盾は、どのような考え方にに基づいているのだろう。」などと、児童生徒の興味・関心を喚起することで、国語科の授業に主体的に向かわせることができる。

4点目に、「少し難しいが挑戦したい。」と思える程の難易度や挑戦感をもたせる。「簡単に解決できそうだ。」という学習課題ではなく、今まで学習して身に付けたことを駆使し、そこに新しい要素を加えることで解決できそうだということを児童生徒がイメージできれば、国語科の授業に必要感をもちながら取り組むことができる。

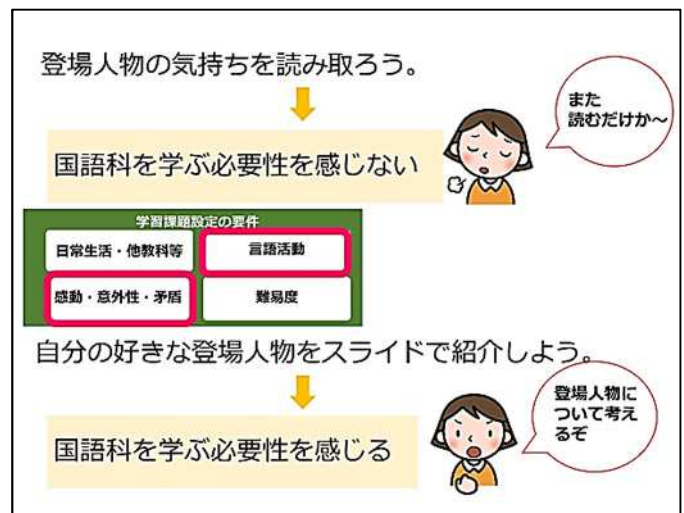
なお、四つの要件は一つだけではなく複数組み合わせることで、より児童生徒が取り組みたくなる学習課題を設定できると考える。

また、必要性をもたせる手立てとして「実用的な必要性を感じさせる手立て」(資料2-5)と「知的好奇心を満たす手立て」(資料2-6)がある。いずれの手立ても児童生徒の実態をよく把握し、学習内容をよく吟味しておくことが大切である。

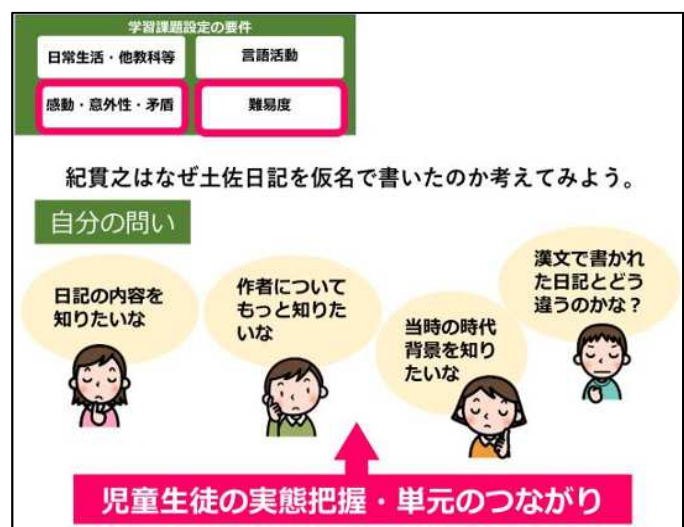
資料2-4 学習課題設定の要件



資料2-5 実用的な必要性を感じさせる手立て



資料2-6 知的好奇心を満たす手立て



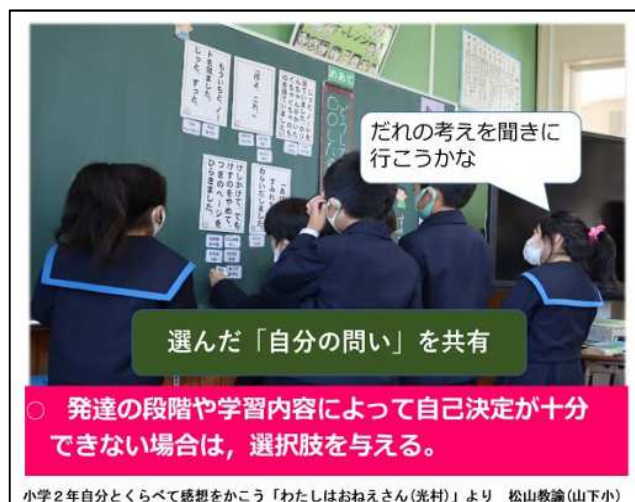
(3) 自律性，関係性，有用性

ア 自律性 「自分の問い」を自ら解決しようとする児童生徒を支える手立て

国語科では，児童生徒に自律性をもたせる手立てを『自分の問い』を自ら解決しようとする児童生徒を支える手立て」とした。

児童生徒の主体的な学びを実現するためには，「自分の問い」を自ら解決するための見通しをもたせ，その解決方法を自己決定させることで，児童生徒にとって課題解決自体が自分事となる必要がある。時間配分，学習形態，学習方法など課題解決のために児童生徒が自己決定することは大切であるが，自己決定が難しい場合には，選択肢を与えたり，教師が助言したりするなど，児童生徒一人一人の実態に即して対応していくことが大切である(資料 2-7)。

資料 2-7 課題解決のために自己決定できること



小学2年自分とくらべて感想をかこう「わたしはおねえさん(光村)」より 松山教諭(山下小)

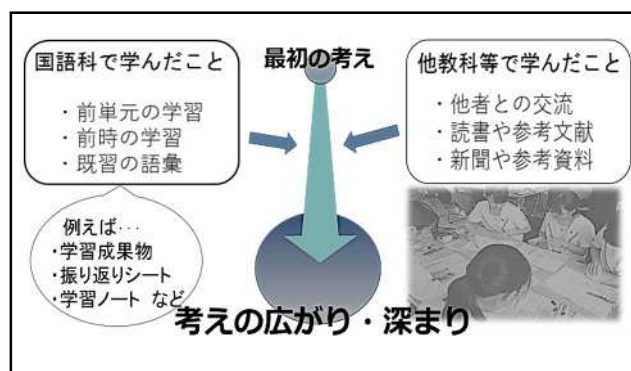
イ 関係性 自分の考えを広げたり深めたりするために，必要な情報を収集し活用させる手立て

国語科では，児童生徒に関係性をもたせる手立てを「自分の考えを広げたり深めたりするために，必要な情報を収集し活用させる手立て」とした。

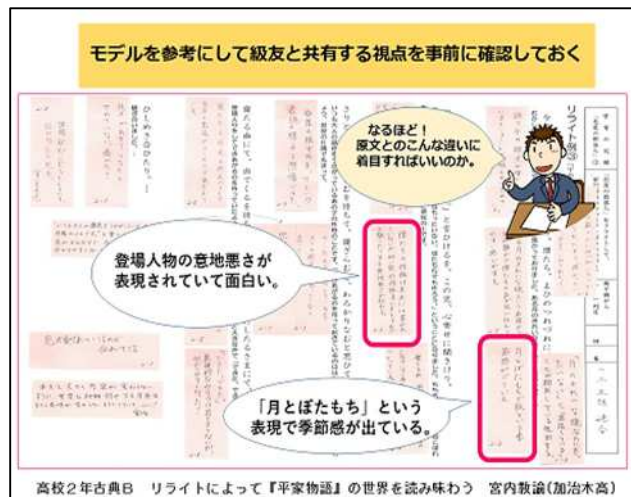
しかし，実際に話し合い活動や調べ学習，読書をして，目的を明確にできずに課題解決まで辿りつかないことがある。

そこで，国語科の授業で学んだことや，他者との交流，読書や参考文献，新聞や参考資料など日常生活や他教科等で学んだことから自分に必要な情報を得て，最初にもった自分の考えを広げたり深めたりできるようにする必要がある(資料 2-8)。そのため教師は，児童生徒に「今，自分に必要な情報は何か。」，「どんな考えが聞いたら課題の解決ができそうか。」という視点から，児童生徒一人一人が必要とする情報を収集し，活用できるように事前に参考となる図書を選定しておいたり，思考の広がり，深まりを促すための思考ツールを用意したりする等，環境を整

資料 2-8 考えの広がり・深まり



資料 2-9 知識同士を結び付ける手立て



高校2年古典B リライトによって『平家物語』の世界を読み味わう 宮内教諭(加治木高)

えることが必要である(資料 2-9)。

また、話し合い活動の際は、他者と双方向の交流がしっかりとなされ、自分の考えが深められるように、①叙述を根拠に理由を伝える、②別の言葉で言い換える、③考えを比較するときは視点を絞るなど、話し合いの仕方を確認することが有効である。

ウ 有用性 振り返りを通して、次の学びにつなぐ手立て

国語科では、児童生徒に有用性を
もたせるために目指す手立てを「振
り返りを通して、次の学びにつなぐ
手立て」とした。

振り返りとは、児童生徒が学習
内容や自分の考えの変容、一般化
した考えを自覚することである。
児童生徒が自分の国語の学習を調
整し、学んだことを次時や自分の
周りの世界とつなげることで、国
語を学ぶ価値を実感することにつ
ながると考える。振り返りの時間
を十分に確保し、「学習内容」の分
かったことや分からなかったこと
と、学ぶ前と学んだ後の自分の考
えの「変容」、学んだことがどのよ
うに生かせるかという「一般化」の
三つの視点で、書いたり話したり
させて言語化し、振り返らせるこ
とで、学んだことを可視化するこ
とが有効である。

また、「そのような振り返りをし
たのはなぜか。」「どこからそのよ
うに考えたか。」など、自分の考え
の根拠や理由を基に振り返らせる
ことで、児童生徒は働かせた言葉

による見方・考え方を意識したり、
自分の国語の学習の仕方を振り返ったりすることにつながり、国語を学ぶ価値をより実感ができ、
国語を学ぶ「必要性」をより強く感じるようになることを考える(資料 2-10)。資料 2-11 は、単元の
ワークシートを活用した振り返りの例である。毎時間の終わりに教師が振り返りの視点を与えて
言語化させることにより、単元の単位時間を積み重ねていくごとに、深い学びが実現しているこ
とが分かる。

資料 2-10 振り返りの視点



資料 2-11 単元のワークシートを活用した振り返り

3 国語科における学びの価値を見いだす授業デザイン

(1) 学びの価値を見いだす授業デザインの基本的な考え

国語科の授業デザインにおいて、まず考えたのは児童生徒にどのような力(資質・能力、指導事項)を身に付けさせるか。」ということである。次に、目指す児童生徒の姿を考える。児童生徒の実態把握を踏まえ、学習課題、言語活動、手立てを考える。その上で、必要性を中心に大まかに四つの視点に分類することで、自分の授業を振り返ったり、新たな手立てに気付いたりすることにつながり、自分の授業を客観視することができる(資料2-12)。

また、主に「授業を計画する」、「授業を振り返る」場面で授業をデザインすることが効果的である。

(2) 「授業を計画する」際の授業デザイン

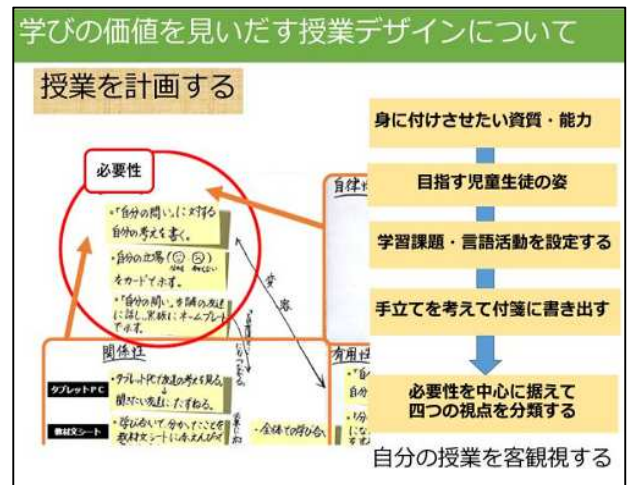
学習指導案を作成する時に、「必要性」を中心に四つの視点で学習過程を見直す(資料2-13)。その際、目指す児童生徒の反応例を吹き出し等を書くなどしてイメージしながら教師の手立てを考える。また、付箋を活用し、アイデアが浮かぶたびに更新しながらデザインする。

(3) 「授業の振り返り」を活用した授業デザイン

授業後、自分の授業を振り返る際に「どこをどのように改善したらよいのか。」と悩むことがある。授業後の振り返りに四つの視点を活用することで、自身の授業を客観的に見つめ、振り返ることができ、次の授業に生かすことができる(資料2-14)。

まず、「必要性」を起点に四つの視点を振り返る。その際、あればよかった手立てを考え、次につなげるヒントにする。また、自身の授業を振り返るだけではなく、授業研究会等においてグループで協議する際にもこの四つの視点を取り入れることで、より具体的な意見交換が期待できると考える。

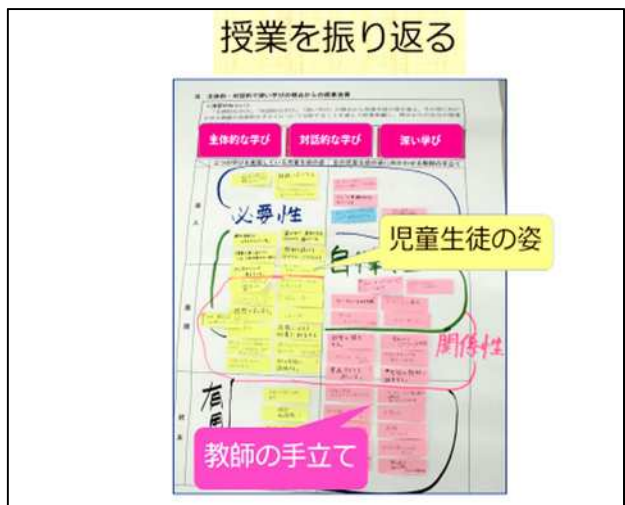
資料2-12 授業デザインの基本的な考え



資料2-13 授業デザインの基本的な考え方

授業を計画する		
四つの視点	目指す児童生徒の反応例	教師の手立て
必要性	表現の工夫をして、作文をもっと分かりやすくしたいな。どんな表現の仕方があるのかな。	・ 情景や心情の描写の仕方や構成の効果を捉えることで作文等での自分の表現に生かすという、単元全体の学習の見通しをもたせる。
自律性	喜怒哀楽を表すのに、こんな言葉があるんだな。使ってみよう。この構成をすることで、後悔が起きていることを表すんだな。	・ 辞書を活用し、自分の作文に役立つような喜怒哀楽に応じたふさわしい感情を表す言葉を調べさせる。
関係性	この比喩を使うと、どれぐらいうれしさが分かるかな。この情景描写は、読んでいく気持ちを表すのにふさわしい言葉かな。	・ 共有する際に、叙述を根拠に自分の考えを述べさせる。必要に応じて、辞書を活用させる。
有用性	比喩で気持ちが分かりやすくなったぞ。次の作文では情景描写も使ってみよう。	・ できるようになったことや、今後に生かしたいことを視点を学習を振り返らせる。

資料2-14 「授業を振り返る」際のデザイン



4 小学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本実践は、登場人物の行動や気持ちを想像し、文章の内容と自分の体験を結び付けながら読むことを通して、自分の考えを広げたりしていくことを意図した実践である。

小学校学習指導要領国語科第2学年の内容（C読むこと）エ「登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること」等に迫るために、「自分の体験と結び付けながら、心に残ったところをビブリオバトルで伝える言語活動」を位置付けた。具体的には、登場人物と自分を比べながら読むために、登場人物のしたことや言ったことに着目して、登場人物の性格や気持ちについて想像を広げて教材文「わたしはおねえさん」を読み、心に残ったところとその理由をまとめさせた。その後、教材文で学習した知識及び技能や働かせた言葉による見方・考え方を生かして、自分が選んだお気に入りの本の心に残ったところの紹介へとつなげていった。

(2) 研究の実践（自分とくらべて、かんそうを書こう『わたしはおねえさん』光村2年下）

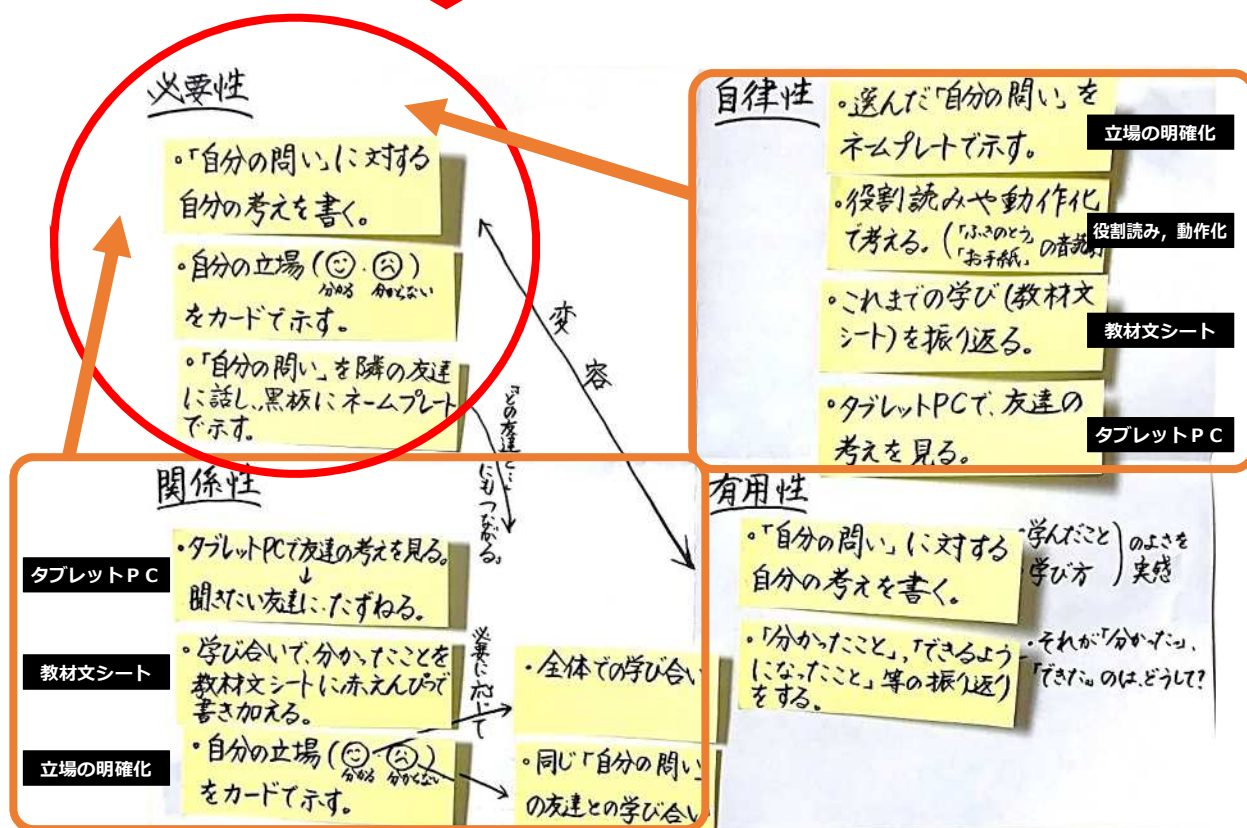
ア 本単元で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
身近なことを表す語句の量を増し、語彙を豊かにすること。	場面の様子に着目しながら登場人物の行動や気持ちを想像し、文章の内容と自分の体験を結び付けながら読むこと。	想像を広げたり、登場人物と自分を比べたりしながら楽しく読み、「自分の問い」に対する考えとその理由を伝え合おうとすること。

イ 授業デザインに当たって

単元名	自分とくらべて、かんそうを書こう
ゴールの言語活動	自分の体験と結び付けながら、心に残ったところをビブリオバトルで伝える活動
本時の目標	前時までに立てた「自分の問い」を解決するために、すみれちゃんのしたことや言ったことに着目し、自分の体験と結び付けながら、その理由や気持ちを想像し、自分だったらどうするかを考えることができる。

※ 四つの視点から、手立ての検討 → 必要性を中心に手立てを検討



ウ 1単位時間における実際（※ 「自律性」と「関係性」について抽出）

(ア) 「自律性」に関する手立てと実際

「自分の問い」を解決するために、どのような言葉による見方・考え方を働かせ、どのように学ぶか考えさせることで、一人一人が見通しをもって解決できるようにする。

立場の明確化	役割読み、動作化	教材文シート	タブレットPC
「自分の問い」をネームプレートで示すことで、どの友達と学び合えばよいか考えることができるようにした。	登場人物になりきることで、場面の様子を想像し、登場人物の気持ちや行動の理由を考えることができるようにした。	すみれちゃんの性格や前時までの学習を振り返らせることで、これまでの学習と関連付けて考えることができるようにした。	全員の教材文シートをタブレットPCで閲覧できるようにすることで、目的をもって学び合うことができるようにした。
			
同じ「自分の問い」を選んだ友達は、どんなことを書いているのかな。	「お手紙」の学習で、実際に演じてみることで、登場人物の気持ちや行動の理由が分かった。	- すみれちゃんは、どんな性格かな。 - 他の場面と比べながら読んでみたい。	〇〇さんは、どうして「登場人物の気持ちが分かる。」と書いているのか聞いてみたいな。

(イ) 「関係性」に関する手立てと実際

タブレットPCや教材文シートを使いながら考えを可視化させたり、根拠を明らかにさせたりしながら、「自分の問い」を追究できるようにする。

タブレットPC	教材文シート	立場の明確化
根拠を尋ねながら「自分の問い」を追究させることで、自分の考えを広げたり深めたりできるようにした。	新たに分かったことや変わったことなどを赤鉛筆で加除修正させ、本時の学びを自覚することができるようにした。	自分の立場のカードを示すことで、学習の状況や自己の変容に気付くことができるようにした。
		
 どうして、すみれちゃんの気持ちが分かったの。  わたしも、弟がわたしのノートに落書きした時に、怒らなかったことがあったんだ。	- すみれちゃんは、かりんちゃんが描いた絵だったから、消さなかったんだ。 - すみれちゃんは、かわいい妹がしたことだったから、怒らなかったんだ。	- まだよく分からないから、同じ「自分の問い」同士で話したいな。 - 他の「自分の問い」を立てた友達は、どんなことが分かったのかな。

5 中学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本実践は、中学校学習指導要領国語科第1学年の内容（Ｃ読むこと）イ「場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて描写を基に捉えること。」、エ「文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えること。」を受け、特に、登場人物の心情の変化を捉え、表現の効果を自分の作品に生かすことをねらいとしたものである。

教材『少年の日の思い出』は、大人になった「ぼく」が少年時代を回想するという構成になっているが、その構成により、少年時代の後悔が大人になった今も続いていることを示す効果がある。そして、その後悔を表すような情景の描写をはじめ、様々な心情を表す描写がある。

本校の生徒は、作文を書く際に行動だけを記す傾向があるが、この教材を通して、様々な情景や心情の描写を学び、その表現の仕方を自分の表現に生かすことができると考えた。指導に当たっては、教材における情景や心情の描写を捉えるとともに、辞書等も活用して心情を表す言葉を集め、これらの表現を自分の表現に生かせるようにさせた。

(2) 研究の実際

（情景や心情の描写を工夫して自分の体験を述べよう『少年の日の思い出』三省堂1年）

ア 本単元で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
行動や心情を表す語彙を増やすとともに、文章の中でどのように使用するかについて考えること。	場面の展開や心情の変化について描写を基に捉えたり、文章の構成や展開、表現の効果について考えたりすること。	情景や心情の描写を捉えたり、構成の効果について考えたりして、自分の表現に生かそうとすること。

イ 授業デザインに当たって

「学びに向かう力」を涵養するための四つの視点を踏まえた単元構想を行った。

四つの視点	目指す生徒の反応例	教師の手立て
生徒が「学びに向かう力」を涵養するための手立て	表現の工夫をして、作文をもっと分かりやすくしたいな。どんな表現の仕方があるのかな。 	情景や心情の描写の仕方や構成の効果を捉えることで作文等での自分の表現に生かすという、単元全体の学習の見通しをもたせる。
	喜怒哀楽を表すのに、こんな言葉があるんだな。使ってみたいな。 この構成をすることで、後悔が続いていることを表すんだな。 	- 辞書を活用し、自分の作文に役立つような喜怒哀楽に応じたふさわしい感情を表す言葉を調べさせる。 - 情景や心情の描写の仕方や構成の効果について理解させる。
	この比喩を使うと、どれぐらいうれしいかが分かるな。 この情景描写は、沈んでいく気持ちを表すのにふさわしい言葉かな。 	共有する際に、叙述を根拠に自分の考えを述べさせる。必要に応じて、辞書を活用させる。
	比喩で気持ちが分かりやすくなったな。次の作文では情景描写も使ってみよう。 	できるようになったことや、今後に生かしたいことを視点に学習を振り返らせる。

(3) 単元の実際 [] 生徒の反応

過程 (時)	主な学習活動	教師の手立て（四つの視点）
導入 (1)	1 単元の学習課題を理解し、学習の見通しをもつ。 『少年の日の思い出』には、どんな描写があるのかな。自分の作文に生かしていきたいな。 嬉しかった思い出を書くために、喜怒哀楽の喜と楽を表す言葉を調べてみたいな。 悔しかった思い出を書くために、怒と哀を表す言葉を調べようかな。	○ 情景や心情の描写の仕方や構成の効果を捉えることで、作文等での自分の表現に生かすという、単元全体の学習の見通しをもたせる。 必要性
展開 (4)	2 喜怒哀楽を表す語彙を調べる。 悲嘆、愉悦とかあるのか。はしゃぐ、不機嫌とか使ってみようかな。 3 情景描写や比喩を基に心情を理解する。 4 作品における情景や心情の描写の仕方の効果について確かめる。 5 作品で用いられた情景描写や、比喩を用いた描写を参考に、自分の「少年の日の思い出」を書く。その際に、事前に調べた心情を表す語彙も活用する。 「夜の暗さがなくなり、だんだん朝になっていく中、僕はワクワクでいっぱいだった。」(情景描写) 「外灯のない夜道を歩いているような気持ちになった。」(比喩) 「ぼくはそのおもちゃをもらってとてもはしゃいでいた。」「そして僕は不機嫌になってしまった。」(心情を表す語彙)	○ 情景や心情の描写の仕方や構成の効果について理解させる。また、辞書を活用し、喜怒哀楽といった心情を表す語彙を集めさせる。 自律性 ○ 情景や心情の描写の仕方や構成の効果を捉えたことで、自分の表現に生かせることを認識させる。 必要性 
終末 (1)	6 互いの作品を交流し、情景や心情の描写の仕方について、根拠となる叙述を示して、考えを述べる。 「外灯のない」って暗いから、悲しい気持ちを表していると思う。  7 単元を振り返る。 表現の工夫をするために、天気や比喩を使ってみるといいと分かった。次は日記などにも生かしていきたい。 情景描写や比喩を使って友だちにアドバイスができるようにしようと思う。	○ 共有する際に、叙述を根拠に自分の考えを述べさせる。必要に応じて、辞書を活用させる。 関係性 ○ できるようになったことや、今後に生かしたいことを視点に単元を振り返らせる。 有用性

6 高等学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本実践では、高等学校学習指導要領古典Bの内容（読むこと）エ「古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること。」を受け、『平家物語』の「忠度の都落ち」をリライトし、級友と交流・共有する活動を通して、巧みな描写、繊細な表現、簡潔な語調などから、登場人物の思想や感情などを読み味わうことをねらいとしている。

これまでの古典の授業は、教師主導で現代語訳に終始することが多く、生徒の主体性を引き出すものとはほど遠いものになってしまいがちであった。しかし、本来は、長年読み継がれてきた作品自体の魅力を生徒それぞれが読み味わい、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすることに意義がある。本教材「忠度の都落ち」は、武人であり、歌人であった忠度の生き様と、それに応える俊成の有様を、語り手が見事に描ききっており、現代を生きる生徒たちの心に響くものがあると考えている。本実践では、本文を踏まえながら自分の想像力や言葉による見方・考え方を働かせながら本文をリライトし、他者と交流することを通して、古文を主体的に読み味わっていくことを意図した実践である。

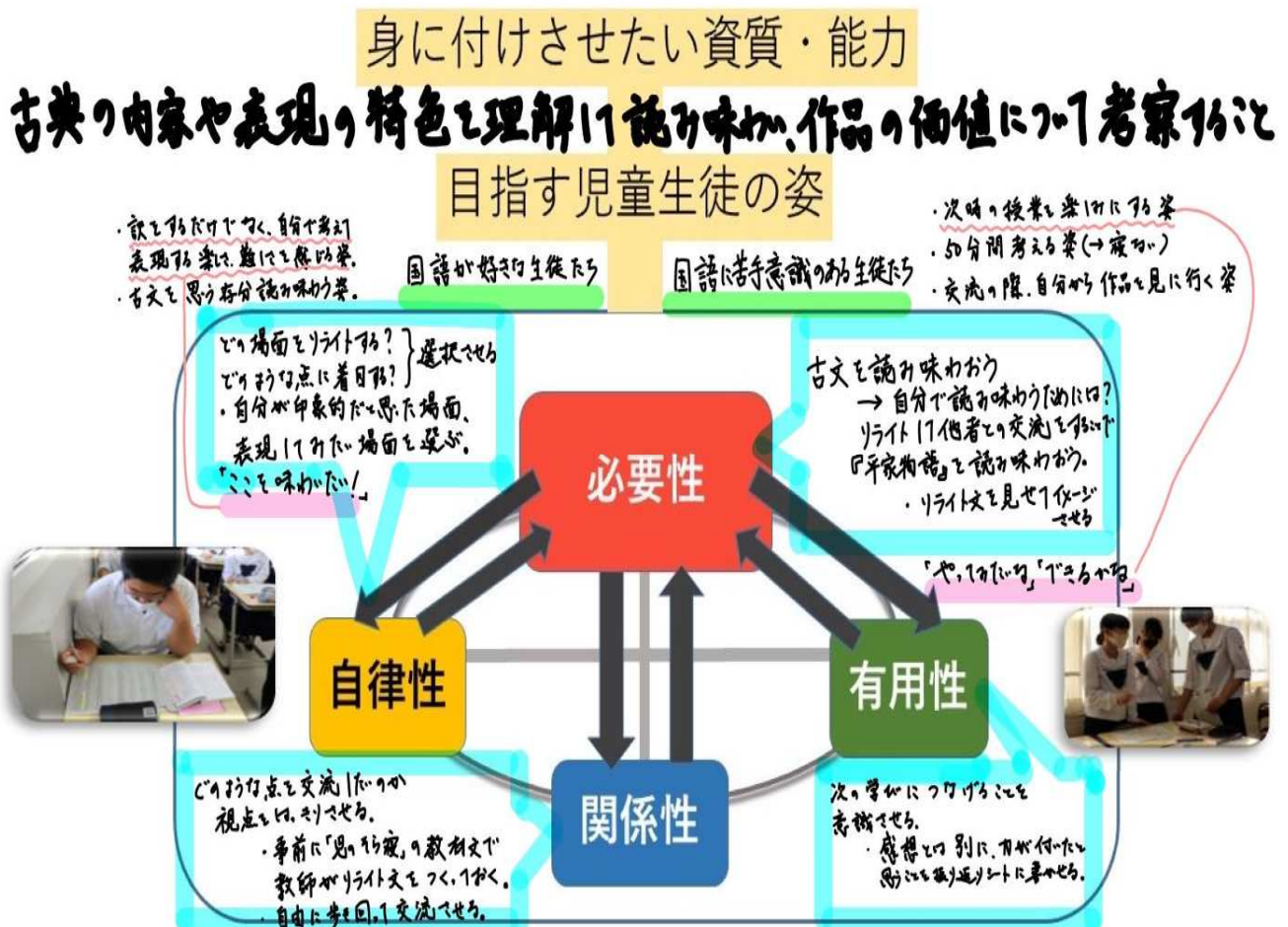
(2) 研究の実際（リライトによって『平家物語』を読み味わう「忠度の都落ち」古典B 東京書籍）

ア 本実践で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
本文に用いられている語句の意味や文法事項を理解し、古典を読むために必要な知識を身に付けること。	本文の内容や表現の特色を理解して、『平家物語』を自分なりに読み味わうこと。	内容や表現の特色に関して理解したことを他者と比較・交流することで、読み味わおうとすること。

イ 授業デザインに当たって

「学びに向かう力」を涵養するための四つの視点を踏まえた単元構想を行った。



過程(時間)	主な学習活動	教師の手立て
導入 (2)	1 単元の学習課題を理解し、学習の見通しをもつ。 「忠度の都落ち」とは、どんな話なのだろう。リライトすることで古文を楽しんで読めるようになりたいな。 リライトするためにまずはしっかり「忠度の都落ち」を読んであらすじを把握しよう。 2 教師が提示するリライト文を批評する。 3 他の学級から出された意見も含めて、批評の視点を得る。 4 「忠度の都落ち」の本文と現代語訳を読み、あらすじの確認をする。 ※ 本単元のリライトとは… ただ現代語訳するのではなく、古文独特の行間を自分の想像力や言葉による見方・考え方を働かせることでオリジナルの要素を付け加えて書くこと	○ この単元で何をどのように学び何ができるようになるのかを具体的に示し、実感させる。 必要性 ○ 他の教材で教師がリライトしたものに付箋で感想を付けさせて、着目する視点を共有させる。 古文の行間の省略に改めて気付いた。  関係性 ○ 平家物語の現代語訳と漫画を提示した後、内容に関わる簡単な問いを用意し、理解できたか確認させる。
展開 (2)	5 「忠度の都落ち」をリライトする。 自分は忠度の言葉が印象的だったこの場面をリライトしてみよう。 6 自分の作品を自分で振り返る。 7 付箋を用いて交流を行う。  「月の光に照らされた二人の姿」という表現から、神秘的で感慨深い様子がよく伝わってきた。 自分は「志賀の都は荒れにしを」を「廃れてしまった」としたが、Aさんは「かつての灯りは消えてしまった」としてこんな表現もあるんだと思った。	○ どの場面をリライトするか、自分で自由に選択させる。 ○ 自分が工夫した箇所や難しいと感じた箇所に付箋を付けて振り返らせる。  自律性 ○ 交流を通して、自分が着目した部分を級友がどのように表現しているかに注目させる。 関係性
終末 (1)	8 作品を用いて語句や文法事項の確認を行う。 9 級友から書いてもらった感想を基に自分がリライトした作品を振り返り、『平家物語』について考えたことをまとめる。 最初は、忠度たちに対して「たった歌だけでおおげさだ」と思っていたが、今では忠度の熱い気持ちに感動している。(学習内容) 今までは古文の表面的なものしか見ていなかったけど、リライトすることで古文が自分の中を通り抜ける感覚があった。(変容・一般化)	○ 話の大筋を掴んだ状態であれば、細部の確認もしやすいことを実感させる。 ○ この単元の学習前と学習後とを比べて思ったこと、考えたことをまとめさせる。 有用性 振り返りの視点 ① 分かったこと (学習内容) ② できるようになったこと (変容) ③ 今後に生かせること (一般化)

第3章 社会・地理歴史・公民科における研究

1 社会・地理歴史・公民科の授業で目指す児童生徒像及び授業像

社会・地理歴史・公民科（以下、社会科）は、社会的事象等の特色や意味を理解するとともに、よりよい社会を築くという観点から課題を見だし、その課題の解決に向けて事実を基に協働して考察、構想し、社会参画に向かう資質・能力を育成する教科である。

この資質・能力を育成するためには、児童生徒が「社会的な見方・考え方」を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動の一層の充実が求められる。課題を追究したり解決したりする活動とは、単元など内容や時間のまとまりを見通して学習課題を設定し、諸資料や調査活動などを通して調べたり、思考・判断・表現したりしながら、社会的事象等の特色や意味などを理解したり社会への関心を高めたりする学習などのことである。

このような活動を通して習得し、その過程で活用された知識は、生きて働く知識として習得されたり、一層深く理解されたりする。また、解決に向けて構想する中で、よりよい社会の実現を視野に、課題を主体的に解決しようとする態度が育まれ、学びに向かう力、人間性等が涵養される。そのため、「課題を追究したり解決したりする活動を通して」という文言が小学校・中学校・高等学校全ての学習指導要領の目標に位置付けられている。

しかし、ただ単に「課題を追究したり解決したりする活動」を行うだけで児童生徒が主体的に学びに向かい、資質・能力を身に付けることができるわけではない。大切なのは児童生徒が受動的に学ぶのではなく、学ぶ意味や価値を感じながら「自分事」として能動的に学びに向かうことである。

このような考え方を基に、社会科で目指す児童生徒像を『自分事』として能動的に課題を追究したり解決したりする中で、公民としての資質・能力を身に付ける児童生徒（資料3-1）とし、「児童生徒にとってのレリバンс（つながり）を重視し、社会科を学ぶ意味や価値を実感できる授業」を目指す授業像として設定した。そして、その実現に向けた手立てを必要性、自律性、関係性、有用性の四つの視点ごとに資料3-2のように整理した。

資料3-1 社会科で目指す児童生徒像

2 社会科で目指す児童生徒像及び授業像

「自分事」として能動的に課題を追究したり解決したりする中で、公民としての資質・能力を身に付ける児童生徒



必要性	自律性	関係性	有用性
社会的事象に対する気付きや疑問を基に、自ら問いを見いだす姿	見通しをもち、試行錯誤しながら追究する姿	対話を通して、自己の考えを広げ深める姿	社会科を学ぶ意味や価値を実感し、学び続けようとする姿

資料3-2 社会科で目指す授業像と手立て

2 社会科で目指す児童生徒像及び授業像

児童生徒にとってのレリバンс（つながり）を重視し、社会科を学ぶ意味や価値を実感できる授業



必要性	自律性	関係性	有用性
「考えてみたい。」「解決したい。」「と思う問いをもつための手立て	見通しをもち、自分事として学びを進めていくことができるための手立て	「人・もの・こと」がつながり、社会が分かる面白さに出合うための手立て	学んだことと現実社会がつながったり、新たな問いを見いだしたりするための手立て

2 社会・地理歴史・公民科における児童生徒に「学びに向かう力」をより涵養するための視点

(1) 四つの視点の基本的な考え方

レリバンсとは、「学習内容や学習活動のねらいと児童生徒の既習の学習や生活経験等との関連」と定義した。児童生徒が、「自分事」として学びに向かうためには、学習内容や学習活動が自分に

にとって意味があると児童生徒自身が実感することが求められる。教師は、学習内容や学習活動と児童生徒とのレリバンスを見いだした上で、四つの視点に基づき手立てを講じることが必要である。

四つの視点は、それぞれが社会科の本質に迫る授業を実現するために求められる視点でもあり、四つの視点で授業をデザインすることで、社会科で目指す児童生徒の姿に近付くことができる。また、児童生徒に「学びに向かう力」をより涵養するためには、この四つの視点で手立てを講じ授業を改善していくことが大切であるとも言える。

(2) 必要性

ア 目指す授業像に迫るための手立て

「考えてみたい。」「解決したい。」と思う問いをもつための手立て

児童生徒が「自分事」として能動的に学びに向かうことができるようにするためには、学習意欲を高める「問い」の設定が欠かせない。

人は既得の知識に反する事実や考え、資料等と出合うときに、認知のずれが生じ、「なぜ」と問うことができる。また、社会とのつながりが感じられるときに、「どうあるべきか。」と考えようとする。そこで、児童生徒がもっている知識に反する事実や考え、資料等を提示し、認知のずれを生み出すようにしたり、児童生徒の生活経験や現実社会の諸事象を取り上げるなど、社会とのつながりが感じられるようにしたりする。そして、児童生徒が「考えてみたい。」「解決したい。」と思う問いを見いだすことができれば、「自分事」として能動的に学びに向かうことができる。

イ 授業の例

高等学校第1学年「現代社会－政府の経済的役割と租税の意義－」の授業例を紹介する（資料3-3）。この授業は、生徒自身の問いを基にした課題を探究する過程として構成されている。提示された国の一般会計歳出の資料を読み取り、生徒が表現した問いを基に、「よりよい社会の実現のために、租税はどのように使われるべきだろうか。一般会計歳出の代替案を考えてみよう。」という学習課題を設定し、グループごとに歳出の代替案を構想し、プレゼンテーションを行う学習活動を展開した。ここでは、生徒自身が表現した問いを踏まえ、中学校社会科公民的分野で身に付けた資質・能力を活用しながら、歳出の代替案を構想する活動に取り組ませることで、自ら考え判断する機会が増える点で主体性が高まり、その結果として、「自分事」として能動的に活動に取り組むことができるように工夫している。また、現実社会との関連も踏まえながら考察、構想することを迫る学習課題を設定することで、教室を超えた社会とのつながりを実感させることも意図している。

資料3-3 学習の課題把握の場面の例



(3) 自律性

ア 目指す授業像に迫るための手立て

見通しをもち、自分事として学びを進めていくことができるための手立て

学習活動に見通しをもつ、すなわち、学習の手順や課題の解決法、学習活動のゴール（ねらい）

を考えることで、児童生徒は自分の取り組んでいる活動に自信をもち主体的に学んでいくことができる。また、学習内容や追究方法について、自ら選択・吟味できるようにすることで、自分事として学びを進めていくことができる。

そのためには、学習課題の設定や追究、解決などの学習過程を教師の都合のみに合わせるのではなく、児童生徒の「これを学びたい。」「この方法で追究してみたい。」という思いを大事にし、教師が個に応じた支援をし、児童生徒自身がそれぞれの目標を実現し達成することを意図した授業づくりが求められる。

イ 授業の例

中学校地理的分野第1学年「世界の諸地域 アフリカ州」の授業例を紹介する。主題は「アフリカ州をながめて」であり、単元の導入である。この授業では、「アフリカ州にはどのような特色があるだろうか。」と学習課題を設定し、教師がアフリカ州の「地形」、「気候帯・降水量」、「人口・人口密度」、「国の数・言語」、「国旗」、「GDP・国民総所得」というテーマを示すと生徒がそれぞれ追究したいテーマを選択した。生徒にとっては難しいテーマも設定されていたが、教師が事前にグループで話し合う項目を告知し、それぞれの資料から何を調べたらよいかについて生徒一人一人が明確に見通しをもつことができたため、アフリカ州の特色について調べたことに対する予想や分かったことを主体的にまとめていた（資料3-4）。

このように、教師が児童生徒の「この方法で追究したい。」という思いを大事にしつつ、明確に学習活動のゴールを告知し、児童生徒の個に応じたそれぞれの活動の見通しをもたせることで、児童生徒は自分事として主体的に学びに向かうことができる。

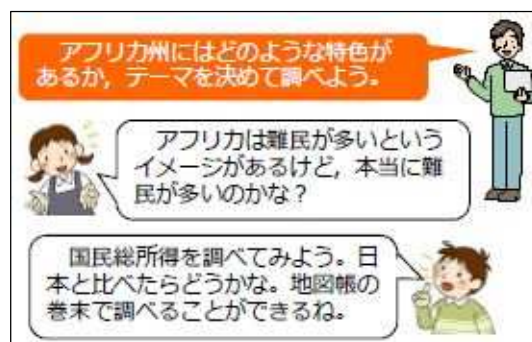
(4) 関係性

ア 目指す授業像に迫るための手立て

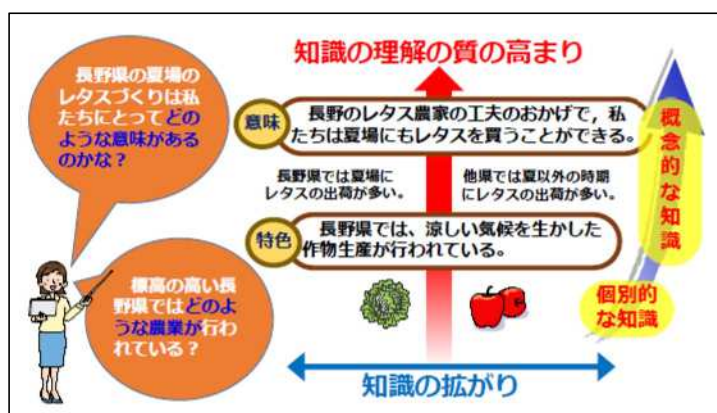
「人・もの・こと」がつながり、社会が分かる面白さに出合うための手立て

社会科を学ぶ目的の一つとして「社会を知る」ということが挙げられる。しかし、より重要なのは、その個別的な知識を既習の知識や生活経験、他者の考えなどに関連付けて社会的事象等の特色、意味や意義、法則等についての理解、すなわち、概念的な知識に高めることである。資料3-5は、個別的な知識を既習の知識と結び付けて概念的な知識に高めるイメージを示している。問いを基に、児童生徒が対話し、「人・もの・こと」がつながるような授業を実現することで、知識の理解の質が高まり、児童生徒は、「社会を知る」だけにとどまら

資料 3-4 生徒が見通しをもって、調べたいテーマを追究する場面の例



資料 3-5 個別的な知識から概念的な知識に高めるイメージ



ず、「社会が分かる」面白さに出会い、社会科を学ぶ価値を見いだすのである。

イ 授業の例

小学校第3学年「店ではたらく人」の授業例を紹介する。この授業では、前時までの学習を踏まえ「スーパーマーケットで行われている工夫が、他の店でもあるのだろうか。」という問いを設定した。次に教師がパン屋を訪問した際のVTRや写真などの資料を基に店の工夫を調べる活動を設定した。

資料 3-6 児童が概念的な知識に高める例

その中で、そのパン屋が衛生面に気を付けた服装をしていたり、国産の材料を使っていたり、専門店から材料を買っていたりする工夫をしていたと児童に気付かせていた。

また、このような工夫である個別的な知識は、教師からの問い掛けや児童同士の関わりの中で「お店はお客さんが安心して買えるために様々な工夫をしている。」という概念的な知識に高められた。さらに、児童は以前工場見学した際のことを思い出し、「かるかん工場で働く人と同じ服装をしている。」ということにも気が付いた。その結果、「食品を扱う仕事に携わる人たちは、お客さんに安心して食べてもらうために様々な工夫をしている。」という概念的知識に高めることができた（資料 3-6）。



(5) 有用性

ア 目指す授業像に迫るための手立て

学んだことと現実社会がつながったり、新たな問いを見いだしたりするための手立て

社会科における学習過程として「課題把握→課題追究→課題解決」といった活動が考えられる。それに加えて、学びを振り返る過程では、学びや変容を自覚する場面を設定し、そのことで自身が新たに問いを見いだすことができるようにする。このような学習過程を踏まえることで、児童生徒は学んだことと現実社会とのつながりを実感したり、新たな問いを見いだしたり追究したりしながら、社会科を学ぶ価値を見だし、学びに自ら向かうことができるようになる。

イ 授業の例

中学校歴史的分野1年「古代までの日本 古代国家の歩みと東アジア」の授業で、生徒は、「奈良時代に朝廷はどのようにして資金を集めていたのだろうか。」という学習課題1で追究活動に入った。生徒は各自の予想を立てた後、様々な資料から「租や調など苦しい税や労役で税金を納めさせていた。」というまどめに至った。次に「朝廷はどのようにして人々に税を納めさせたのだろうか。」という学習課題2を設定した。まとめは、「戸籍を作ったり、口分田を与えたり、里長を置いたりして税を確実に納めさせようとした。」となった。このように課題を追究したり解決したり

資料 3-7 学んだことと現実社会がつながり新たな問いを発見した実践例



する活動を取り入れたことで、生徒の税に対する関心が高まっていった。その後の振り返りの場面で、生徒の中には、「税を納められなくなった農民はどうしたのだろうか。」という新たな問いが生じる生徒もいた。また、授業後には、現在の日本の税制度について興味をもった生徒もいて、本時の学習を踏まえ現実の社会について考える機会を得たと言える（資料3-7）。

このように、振り返りの場面において学んだことを基に新たな問いを見だし、次の学習や現実社会との関わりに関心をもたせることで児童生徒は社会科を学ぶ価値を実感し、「学びに向かう力」を涵養することができるようになる。

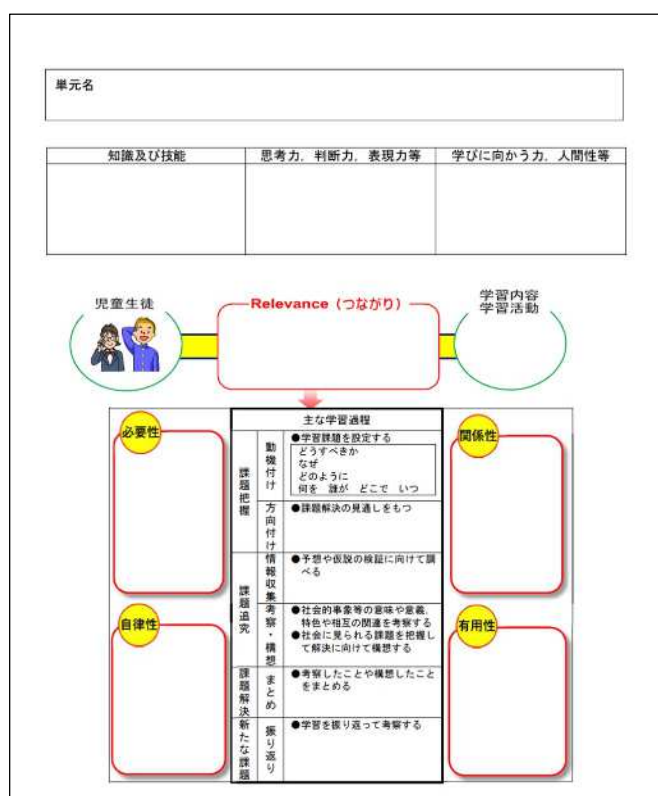
3 社会・地理歴史・公民科における学びの価値を見いだす授業デザイン

(1) 学びの価値を見いだす授業デザインの基本的な考え方

社会科における一般的な学習過程は、課題把握（動機付け、方向付け）、課題追究（情報収集、考察・構想）、課題解決（まとめ）、新たな課題（振り返り）と位置付けられる。授業はこの学習過程をイメージしながらそれぞれの学習活動を設定していくことになる。教師はそれぞれの学習活動のねらいを明確にして、更に四つの視点のどれに当てはまるのかを考えてみる。その際、児童生徒の反応や発言を想定し、手立てを考えてみる。学びの価値を見いだすのは児童生徒自身であるから、児童生徒が本当に学びたいと思えるような手立てを講じることができるかが重要になってくる。

授業デザインは、児童生徒が学ぶ意味や価値を感じつつ、「自分事」として能動的に学びに向かうことができるかということを常に念頭に置いてなされるべきものである。そのため、教師は児童生徒が学ぶ学習内容や学習活動と児童生徒のレリバンスを意識した手立てを講じるべきである（資料3-8）。

資料3-8 児童生徒が「自分事」として能動的に学びに向かうための授業デザイン



(2) 学習内容と児童生徒とのレリバンスを基に四つの視点を捉える

指導のねらいを明確にした上で、学習内容と学習者たる児童生徒とのレリバンスを明確にする。つまり、「児童生徒が求めていると考えられる知識は何か。」「児童生徒のこれからの学習や人生において必要となるものは何か。」を明確にするということである。それが、児童生徒にとって、切実で、教室を超えた社会とのつながりを感じられる学習課題の設定や手立ての工夫などにつながり得る。

(3) 授業デザインの作成について

実際に授業デザイン作成に当たっては、以下の手順で作成する。

- ① 授業(単元)の目標(ねらい)を明確にする。
- ② 児童生徒と学習内容・学習活動とのレリバンスを考える。
- ③ 四つの視点を踏まえて手立てを考える。
- ④ 児童生徒の姿を見取り、次の指導に生かす。

②のレリバンスを考える際は、以下の視点から考える。

- ・ 児童生徒の生活経験や学習経験，児童生徒を取り巻く地域の実態や学校の特色等
- ・ 児童生徒の実態から，現在の知的好奇心や内発的動機付けを高められると考えられるもの
- ・ 児童生徒の今後の生活や生き方等

児童生徒が「学びの価値を見いだす」べく，学習内容と児童生徒とのレリバンスを基にした四つの視点に立った手立てを，単元や1単位時間の授業の中で適切に位置付けることが大切である。その際の具体例は以下のとおりである。

四つの視点に立った手立ての基本的な捉え方や具体例

① 必要性：学習に動機を与え，必然をもたせる視点

- ・ 認識や予想と事実のずれを提示し，切実感のある問いを生じさせる。
- ・ 学習問題（課題）を児童生徒に立てさせたり，教師が児童生徒と一緒に考えて立てさせたりする。
- ・ 学ぶ内容や方法に価値を見いだせる活動を設定する。

② 自律性：学習内容・方法を自分の意志で決めさせられる視点

- ・ 課題追究に見通しをもち，自分の学びを選択できる場を設定する。
- ・ 自分の学びを振り返り，学びを軌道修正できる場を設定する。
- ・ 多様な学び方を考えさせ，友達と協働的に学ぶ場を設定する。

③ 関係性：知識同士を結び付け，自分の考えを広げさせたり深めさせたりする視点

- ・ 社会的事象等を比べたり，関連付けたりする場を設定する。
- ・ 社会的事象等を多面的・多角的に考察する場を設定する。
- ・ 知識同士を結び付け，概念的な知識へ高める場を設定する。

④ 有用性：学習に意味を見だし，自分の資質・能力に自信をもたせる視点

- ・ 自分の学びが解決できた成就感や達成感を味わう場を設定する。
- ・ 児童生徒が学習したことを社会生活に生かそうとする場を設定する。
- ・ 新たな問いを見いだす場を設定する。

4 小学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本実践は、未来の創り手に求められる資質・能力を育成するために、児童が学びの価値を見いだし、主体的な学習を行える授業づくりを目的として行うものである。

第3学年は、初めて社会科を学ぶ学年である。そこで、学びに向かう力の涵養を図るために、まずは児童が興味・関心をもって臨む授業づくりが必須であると考えた。また、社会科における学びの価値を実感させるためには、学習したことと自分の社会生活がつながることが大切である。

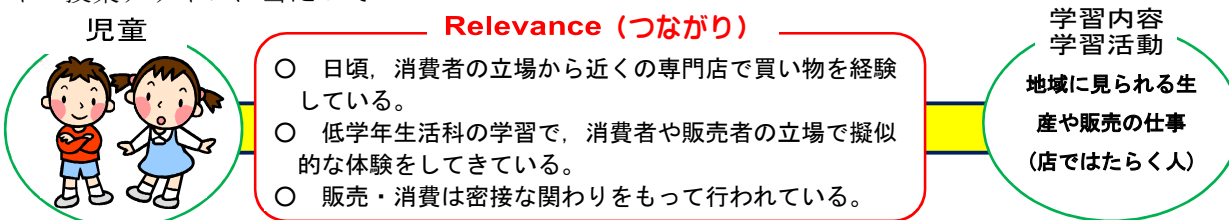
これらのことから、児童の生活により密接した教材を扱うことで、学習効果が上がると考えた。そこで、地域素材の教材化を図り、四つの視点を踏まえて授業デザインを作成し授業実践を行った。

(2) 研究の実践（第3学年『店ではたらく人』）

ア 授業で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
販売の仕事は、消費者の多様な願いを踏まえ売り上げを高めるよう、工夫して行われていることを理解することができる。	消費者の願い、販売の仕方、他地域や外国との関わりなどに着目して、販売に携わっている人々の仕事の様子を捉え、それらの仕事に見られる工夫を考え、表現することができる。	販売の仕事について、主体的に学習課題を解決しようとすることができる。 消費者の立場から、学習したことを社会生活に生かそうとすることができる。

イ 授業デザインに当たって



必要性	過程	主な学習過程の例		関係性
	課題把握	動機付け	●学習課題を設定する。 どうすべきか なぜ どのように 何を 誰が どこで いつ	
自律性	課題追究	方向付け	●課題解決の見通しをもつ。	有用性
		情報収集	●予想や仮説の検証に向けて調べる。	
	課題解決	考察・構想	●社会的現象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察する。 ●社会に見られる課題を把握して解決に向けて構想する。	
	新たな課題	まとめ	●考察したことや構想したことをまとめる。	
		振り返り	●学習を振り返って考察する。	

過程	主な学習活動	教師の手立て
課題把握	1 前時までの学習を想起し、本時の課題を把握する。 ・ スーパーマーケットには、たくさんの工夫があったね。他のお店でも、そういう工夫があるのかな。 スーパーマーケットのようなくふうが、ほかの店でもあるのだろうか。	必要性 ○ スーパーマーケットとの比較対象として地元の専門店を扱うことで、児童の「調べたい」という意欲を喚起する。
	2 スーパーマーケットの販売の工夫を振り返り、本時の調べる視点を確認する。 ・ スーパーマーケットの工夫と比べれば、他のお店の工夫も見付かりそうだ。 ・ スーパーマーケットには、お客さんがお店に来なくなる工夫や、安心して買うことができる工夫があったね。	○ スーパーマーケットの販売の工夫をまとめたカードを掲示しておき、振り返らせる。 自律性 ○ スーパーマーケットについて、どのような工夫を見付けたか想起させることで、比較する視点を確認させる。
課題追究	3 課題について各自で調べる。 <資料> VTR・写真・パン屋さんの話をまとめた資料 (1) 全員でVTRを視聴し、工夫を見付ける。 (2) 写真や話をまとめた資料から、工夫を見付ける。	○ 工夫がうまく見付けられない児童については、個別に声を掛け、工場やスーパーマーケットの工夫を想起させることで、工夫を見付けさせる。
	4 調べたことについて、グループで話し合ったり、全体で話し合ったりする。 ・ パンの並べ方を工夫しているね。 ・ 材料は国産の物を使っているんだね。 ・ 工場で働く人と同じ服装をしているよ。 ・ お客さんが「安心・安全」に買い物ができるようにしているよ。 ・ 機械を使ってたくさん作っているね。これは、工場と一緒だ。	関係性 ○ 資料から分かるパン屋の工夫と、スーパーマーケットの工夫を比較しながら考えさせる。 ○ 自分の考えと友達の考えを関係付け、考えを広げ、深めさせる。 ○ 調べたことを伝え合うだけでなく、見付けた工夫は、なぜそのような工夫を行っているのか話し合わせる。
課題解決	5 本時の学習についてまとめる。 ほかの店でも、お客さんに安心して来てもらい、商品をたくさん売るために、いろいろなくふうをしている。	○ 見付けた工夫を整理しながら、スーパーマーケットと同じような工夫があることにも気付かせる。また、地域の専門店独自の工夫から、消費者の多様な願いを踏まえて行っていることに気付かせる。
新たな課題	6 本時の学習について振り返る。 ・ 近所のパン屋でも、たくさんの工夫をしていることが分かった。 ・ これまでお店に行っても気付かなかったけれど、こんな工夫をしていたんだ。 ・ お店に行って、見てみたい。 ・ 他のお店の工夫も調べてみたい。	有用性 ○ 消費者の立場から、販売の工夫が分かり、買い物をするときの視野を広げられるようにする。 ○ 地元の商店の工夫を知ること、地元で販売の仕事に携わる人たちへの理解を深められるようにする。

5 中学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

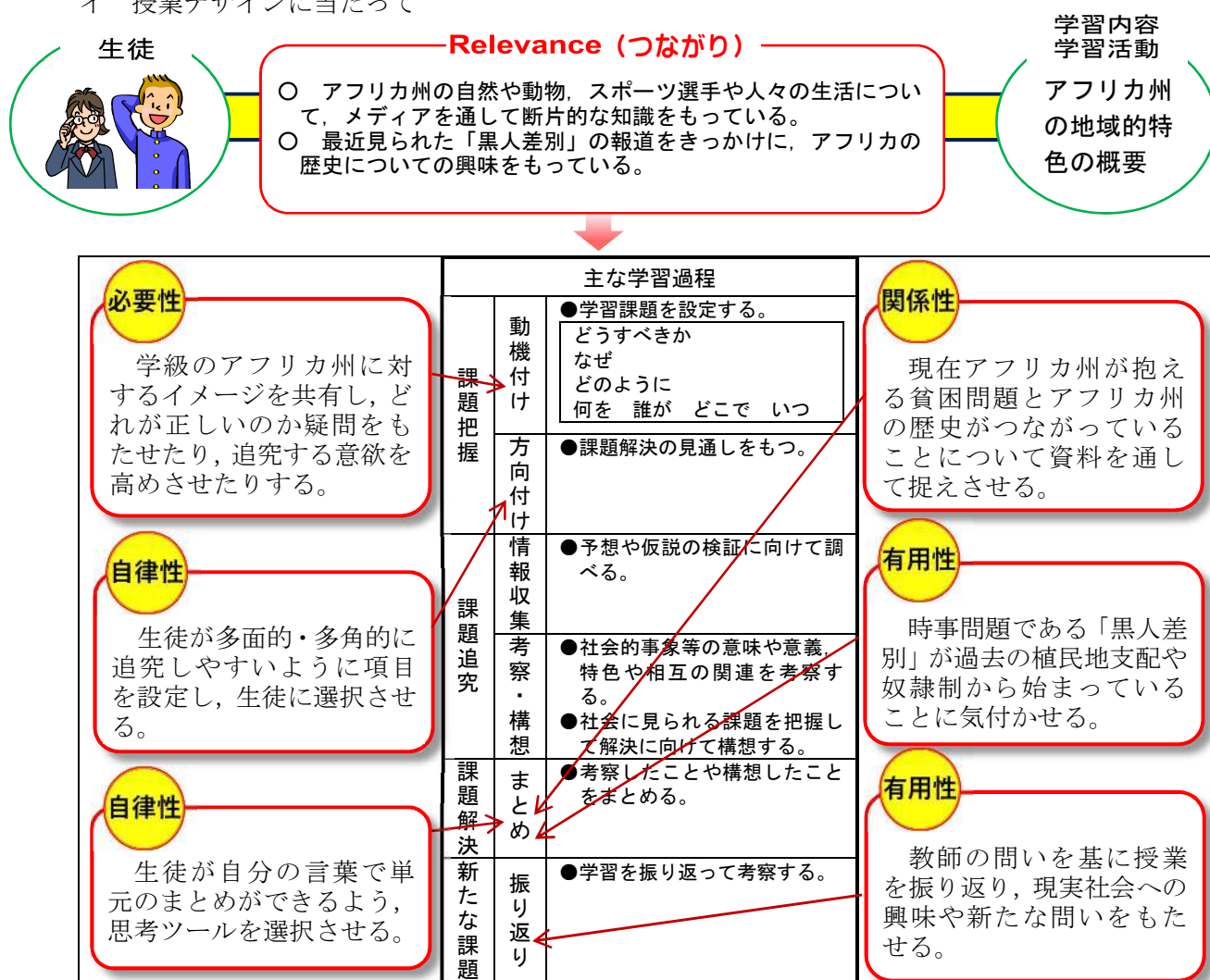
本実践は、アフリカ州の地域的特色を複数の項目から考察させることで多面的・多角的に捉えさせ、その中から貧困問題に着目させ、「アフリカ州はなぜ貧困問題を抱えているのか。」という単元のテーマを設定する。さらに、その後の授業で貧困問題の要因が一つではなく、複数の関連をもちながら存在していることを考察させ、生徒の社会的な見方・考え方を養うことを目的としている。本校の実態として、一つの社会的な事象を多面的・多角的に捉えたり、いくつかの社会的な事象を関連付けたりすることが苦手で、そこに視点をもてない生徒が多いと捉えている。このような授業設計が生徒の社会的な見方・考え方を育て、未来の作り手に求められる資質・能力を育成することにつながると考え、実践を進めた。

(2) 研究の実践（第1学年『世界の諸地域 アフリカ州』）

ア 授業で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
アフリカ州について、地形・気候・人口・言語・国旗・GDPの項目から、資料を基に他の州と比較して追究し、地域的特色の概要を理解することができる。	アフリカ州の地域的特色の概要を文章で表現し、それを基にアフリカ州の生活や様子について予想を立てることができる。	アフリカ州の歴史が現在どのような形で表れているかの理解を通して、課題である貧困問題について更に追究しようとするすることができる。

イ 授業デザインに当たって



過程	主な学習活動	教師の手立て
課題把握	1 特色を捉える見方・考え方として、「比較する」ことが効果的であることを知る。 2 本時の学習課題を確認する。 アフリカ州にはどのような特色があるだろうか。 ・ これまではこんなイメージだったけど、アフリカ州ってどんな州かな。 ・ アフリカ州の特色をどのようにして説明すればいいかな。	必要性 ○ アフリカ州について学級のイメージを確認し、どれが正しいのか疑問をもたせ、追究する意欲を高める。 ○ 二枚の写真でアフリカ州と他州を比較させ、多様性に気付かせるとともにアフリカのイメージをもたせる。
	3 アフリカ州の特色を追究するための見通しをもつ。 ・ アフリカ州のどの分野を調べようかな。 ・ 調べたことから、アフリカ州はどのような州と予想できるかな。	自律性 ○ 「地形」、「気候」、「人口」、「言語」、「国旗」、「GDP」の六つの項目に分け、グループごとに追究し、資料を基に特色と予想できることを発表するという学習の流れを確認させる。
課題追究	4 他の州と比較の視点を持ちながら、地域的特色について資料を基に調べる。	○ ワークシートに各項目を調べるためにどの資料を使うかを明記しておき、個人で調べる時間を確保する。
	5 グループで、地域的特色についてまとめ、アフリカ州の様子について予想を立てる。	○ グループで特色と予想について話し合わせる。
課題解決	6 代表者が発表し、アフリカ州の特色を理解する。 さまざまな角度から見ると、アフリカ州にはそれぞれ固有の特色がある。	
新たな課題	7 アフリカ州の貧困問題について新たな問いをもち、単元の学習課題を設定する。 アフリカ州はなぜ貧困問題を抱えているのだろうか。 ・ アフリカ州は貧困問題の理由は何かな。 ・ クラゲチャートを使って、いろいろな情報から思考の整理をしよう。 8 アフリカ州の歴史について知り、貧困問題の要因の一つであることを確認する。	自律性 ○ 単元まとめシートを配布し、単元の最後にアフリカ州の貧困問題の理由について文章で説明することを伝える。その際、学習内容を整理するため、思考ツール（クラゲチャート）を活用することを伝える。 ○ 次時以降、貧困問題について考えていくことを予告する。
	9 本時で学んだことを振り返り、今後追究したいことや疑問に思ったことを書く。 ・ アフリカ州の貧困問題は歴史的背景が関係あるんだな。 ・ 黒人差別は、アフリカ州の人々が奴隷にされていたことにつながりがあるんだな。 ・ 貧困で苦しむ人をどうやって助けることができるかな。 アフリカ州は過去における奴隷や植民地の歴史や教育の遅れ、産業の未発達、紛争や政治の不安定さ、モノカルチャー経済など様々なことが関係して貧困問題を抱えている。	関係性 ○ 奴隷制に関する動画を視聴させ、貧困問題の要因の一つに歴史的背景があることを理解させる。 有用性 ○ 現在報道される黒人差別も、アフリカの歴史の一つである奴隷制からつながっていることに気付かせる。 ○ 生徒に自分の言葉で、本時の学習で学んだことや新しい疑問を書かせる。 ○ 教師の問いを基に授業を振り返り、現実社会への興味や新たな問いをもたせる。

6 高等学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

選挙権年齢が18歳へと引き下げられたことで、高校生にとって政治や社会は一層身近なものになるとともに、積極的に社会の形成に参画する環境が整いつつある。学校教育には、生徒たちが社会の変化に積極的に向き合い、様々な情報を見極めた上で新たな価値につなげていくことが求められている。

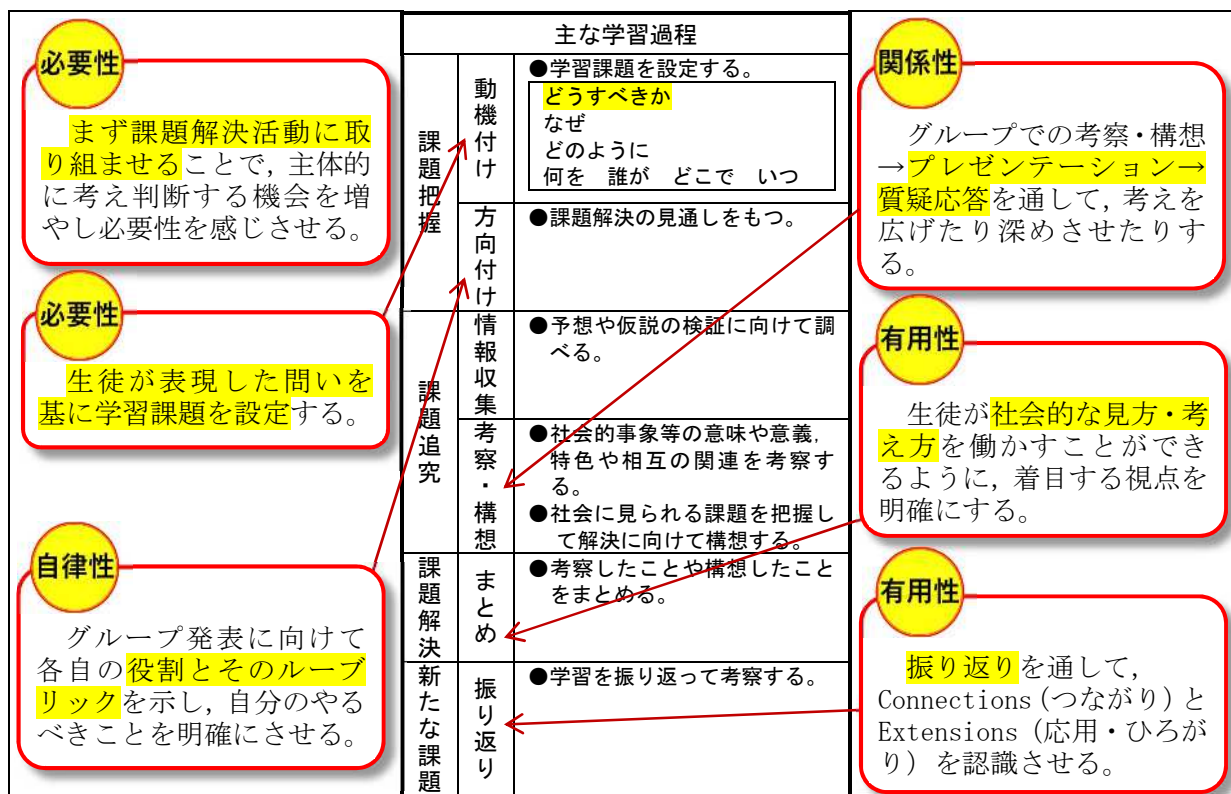
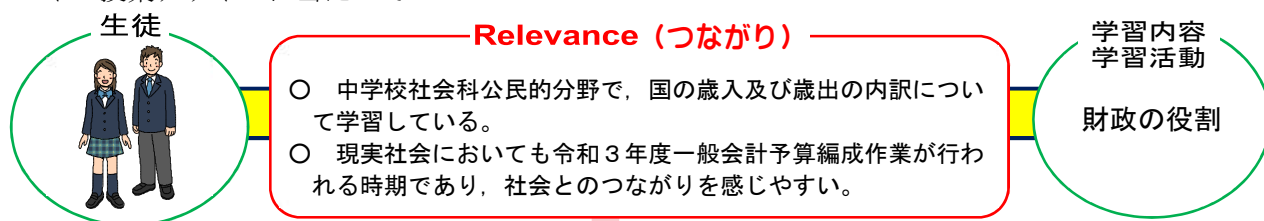
本実践においては、社会とのつながりという観点から、国の一般会計歳出を分析して代替案を構想する学習に取り組むとともに、この学習を通して、国民主権を担う公民として主体的に生き、他者と協働して諸課題の解決策を表現し、意見を取りまとめて合意を形成することができる資質・能力の育成を目指す。

(2) 研究の実践（第1学年『政府の経済的役割と租税の意義』）

ア 授業で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
歳出の見直し、国民生活や福祉の向上、経済活動の活性化などの観点から、社会の在り方に関わる情報を適切に調べ、まとめる技能を身に付けることができる。	社会の形成者として必要な選択・判断の基準となる考え方や財政に関する概念や理論などを活用して、客観的な判断基準を根拠に構想する力を養うことができる。	よりよい社会の実現のために多面的・多角的な考察や深い理解を通して、国民主権を担う公民として、より積極的な役割を果たそうとする自覚を深めることができる。

イ 授業デザインに当たって



過程		主な学習活動	教師の手立て
課題把握	動機付け	1 資料を基に問いを表現する。 (期待される生徒の反応) ・ コロナで医療現場が逼迫しているよね。 ・ 授業のオンライン対策は進んでいる。 ・ 防災体制の強化に取り組むのはなぜか。 よりよい社会の実現に向けて構想してみたい。 2 本時の学習課題を把握する。 【学習課題】 よりよい社会の実現を目指し、一般会計歳出の代替案を考える際に大切なことは何だろうか。	必要性 ○ まず課題解決活動に取り組ませることで、主体的に考え判断する機会を増やし必要性を感じさせる。 必要性 ○ 国の一般会計歳出を提示し、生徒が表現した問いを基に学習課題を設定する。
	方向付け	3 自分の役割を確認し、課題解決に向けた見通しをもつ。 私の役割は「アシスタント」だね。プレゼンターへの質問を工夫し、グループの考えを効果的に説明することができるようにしよう。	自律性 ○ グループ発表に向けて各自の役割とそのルーブリックを示し、自分のやるべきことを明確にさせる。
課題追究	情報収集	4 各グループで仮説を立てて、必要な情報を収集する。	
	考察・構想	5 情報を読み取り、解釈した上で代替案を作成する。 6 グループ発表（プレゼンテーション）に向けて自分たちの代替案を効果的に発表できるように工夫する。	関係性 ○ グループでの考察・構想→プレゼンテーション→質疑応答を通して、考えを広げたり深めさせたりする。
課題解決	まとめ	7 グループの代替案を発表し、質疑応答を行う。 各グループの代替案を発表しよう。その後、質疑応答を行います。その際、妥当性や効果、実現可能性、更なる改善が出来ないかなどの視点から質問してみよう。 (期待される生徒の反応) ・ なるほど、そのような代替案もあるな。根拠も明確で説得力があるな。 ・ Aグループの代替案の財源は何だろうか。 ・ Bグループの代替案は特定の人に大きな犠牲を強いるのでは。質問してみよう。 他グループの発表を聞いたり、質疑応答をしたりすることで、考えを広げ深めることができた。 妥当性や効果、実現可能性、更なる改善が出来ないかなど、これからの学習や人生にも役立つ大事な視点だね。 【課題解決案】 よりよい社会の実現のためには財政が重要な役割を担っている。その財政を支えているのは租税であり、その用途については、絶えず検討していくことが求められる。その際、妥当性や効果、実現可能性、更なる改善が出来ないかなどの多様な視点を踏まえることが大切である。	有用性 ○ 生徒が社会的な見方・考え方を働かすことができるように、着目する視点を明確にする。 【着目する視点の例】 妥当性や効果（幸福や公正）、実現可能性（希少性）、更なる改善など
			
新たな課題	振り返り	8 学習を振り返り、 (1) 学んだことを他分野でどう生かせるか、 (2) 学んだことを自分の進路実現にどう生かすか、 学びを活かして世界をどう幸せにするかについて記述する。	有用性 ○ 振り返りを通して、Connections（つながり）とExtensions（応用・ひろがり）を認識させる。

1 算数・数学科で目指す児童生徒像及び授業像

算数・数学科は、学習内容の系統性が強い教科であり、既習事項を用いて、新しい知識・技能や考え方を創り出していくという特性がある。学習指導要領（小・中学校は平成29年3月告示，高等学校は平成30年3月告示）においても「現行学習指導要領の成果と課題」という項では、TIMSS2015の調査結果から、「諸外国と比べて数学を学ぶ楽しさや、実社会との関連に対する肯定的な回答の割合が低い状態にあり、学習意欲面での差もあること」、さらに全国学力・学習状況調査等の結果から、「既習の知識に関連付けることの弱さや数学的な表現を用いた理由の説明が十分ではないこと」などが課題として指摘されている。また、問題の解決に当たっては、解決の見通しをもつとともに、その解決方法が正しいことを確かな根拠から論理的に考察する力も必要となる。そのため、これまで以上に、学習を自分のものとして、見通しをもって問題解決に意欲的に取り組ませ、数学的な表現を用いて他者と関わりながら解決しようとする経験を重ねさせる授業が必要となる。

そこで、算数・数学科では、授業改善を図るために、目指す児童生徒像を「日常や社会の事象等から算数・数学の問題を捉え、見通しをもって、自ら算数・数学や他者に働きかけながら問題解決に取り組み、学んだことを生活や学習に活用する児童生徒」とし、「学びに向かう力」をより涵養するための「必要性」、「自律性」、「関係性」、「有用性」の四つの視点から、その姿をそれぞれ示した（資料4-1）。

そして、その目指す児童生徒を育成するために、目指す授業像として「数学的な表現を用いて、一人一人が粘り強く解決を図ろうとし、様々な考え方を活用しながら、数学のよさや楽しさを味わうことができる授業」とし、四つの視点で授業を見直し、工夫・改善していくことが、目指す児童生徒像の実現につながると考えた（資料4-2）。具体的には、以下の項に述べる。

資料4-1 算数・数学科で目指す児童生徒像

日常や社会の事象等から算数・数学の問題を捉え、見通しをもって、自ら算数・数学や他者に働きかけながら問題解決に取り組み、学んだことを生活や学習に活用する児童生徒			
必要性	自律性	関係性	有用性
日常や社会の事象等から算数・数学の問題を捉え、解決しようとする姿	自ら算数・数学に働きかけ、解決に取り組む姿	他者と関わり、考えを上げたり、深めたりし、適切な解決方法を追究する姿	算数・数学で学んだことを生活や学習に活用する姿

資料4-2 算数・数学科で目指す授業像と手立て

数学的な表現を用いて、一人一人が粘り強く解決を図ろうとし、様々な考え方を活用しながら、数学のよさや楽しさを味わうことができる授業			
必要性	自律性	関係性	有用性
問題解決の必要感や意欲をもたせる手立て	見通しをもたせ、解決に向けて考えを進めさせる手立て	数学的な表現を用いて伝え合う活動の充実を図る手立て	自己の変容を自覚して、数学のよさを実感させる手立て

2 算数・数学科における児童生徒に「学びに向かう力」をより涵養するための視点

(1) 四つの視点の基本的な考え方

目指す児童生徒像の実現を図るために、教師は授業を設計する。その際、四つの視点「必要性」、「自律性」、「関係性」、「有用性」を基に、児童生徒の姿を想像することで手立てを見直し、よりよい授業へと改善することができる。また、授業後に授業デザインを修正する際にも役立てることができる。

一般的には、学習過程に沿って授業を設計する際、「必要性」、「自律性」、「関係性」、「有用性」の視点の順に手立てを考えることが多い。しかし、学習過程によっては、視点の順番が入れ替わったり、同じ視点による場面が複数回あったりする授業も考えられる。例えば、ある単元の導入の授業において、「有用性」、「必要性」、「自律性」、「関係性」、「有用性」という順で、視点を基に設計

することもある。他にも、1 単位時間の中で、四つの視点のうち数点に絞り、重点として設計することもある。また、「数と計算」、「数と式」のような単元においては、1 単位時間の中では、「有用性」を実感させやすく、単元を進めていく途中や単元末、あるいは複数の単元後に「有用性」を実感させることもある。

各視点を踏まえた具体的な留意点については、以下の項に述べる。

(2) 四つの視点について

ア 必要性 問題解決の必要感や意欲をもたせる手立て

児童生徒が学びを自分のものとして捉え、追究することで、学んだことがより確かなものになっていく。そのため、児童生徒に「挑戦してみたい」、「解決する必要がある」、「解決したい」という気持ちをもたせることが大切である。特に、1 単位時間や単元の導入の学習過程において、解決させる問題の設定や提示の仕方を工夫することが児童生徒の必要感や意欲の向上につながっていく。

そこで、算数・数学科においては、「必要性」の視点を踏まえた手立てを「問題解決の必要感や意欲をもたせる手立て」とし、主に問題の設定や提示において、その留意点を以下のように考えた。

- 必要感や意欲をもたせる問題の工夫、検討をする。
興味・関心をもたせるもの、数学的な面白さがあるもの、これまでの学習とつながるもの、挑戦する意欲をかき立てるもの、多様な解決方法をもつもの、今後の学習へつながるもの等
- 問題を設定するに当たり、参考になるものはないか検討する。
教科書における導入、活用問題、公式、学校生活や日常生活の中で見えるもの、体験する行事や出来事、新聞記事等身の回りの資料、数学史、パズル等
- 問題を捉えやすくするために、提示の仕方を工夫する。
ICT機器でスライド作成ソフトや動画、写真等を利用したり、実物、データの資料での配布、教科書、ワークシート等を用いて提示する。
- 問題を捉えさせる場面を設定する。
提示された問題に対して、理解しているか、取り組みそうかを確認するために、全体やペア等で活動の時間をとる。

このように、日常や社会の事象等から問題を検討し、児童生徒一人一人に問題解決の必要感や意欲をもたせる工夫をすることが大切である。また、一人一人の問題意識を表出させ、そこで生まれた問いを全体で共有することができれば、児童生徒の問いから学びが始まり、意欲もより高まっていくと考える。

イ 自律性 見通しをもたせ、解決に向けて考えを進めさせる手立て

児童生徒が主体的に学習していくためには、問題の解決方法を見いだし、解決に向かうことが理想である。その際には、児童生徒が、問題からこれまでの学習を想起し、既習事項や考え方を選択したり、活用したりすることが大切である。中学校学習指導要領解説数学編（平成29年7月）

においても、「問題については、教師が提示するものだけでなく、適切な場面を設け、生徒が既習の数学を基にするなどして問題を見いだしたり、その問題から導かれるであろう結果を予想したりする機会を設けることが大切である。また、それらの解決の過程では、問題を解決するために既習の何を用いてどのように表したり処理したりする必要があるのかについて生徒が構想する場面を設けることが重要である。」と示されている。小学校、高等学校においても同様に示されており、そのような機会を捉え、設定していくことが大切であると考え。

具体的には、問題が提示された後、これまで学習したことを活用できないか、言葉や数、式、図、表、グラフなどの数学的な表現で活用できそうなものはないかなどを全体で共有し、児童生徒一人一人が、見通しをもってから、自己追究に進むことが考えられる。

そこで、算数・数学科においては、自律性の視点を踏まえた手立てを「見通しをもたせ、解決に向けて考えを進めさせる手立て」とし、以下のようなことを留意点として考えた。

- 複数の解決方法から選択して、解決しようとする問題や場を設定する。
 - これまで学習したことを想起させたり、確認させたりすることで解決方法を検討させる。
 - 個で考えた解決方法や数学的な表現(言葉や数、式、図、表、グラフ等)、数学的な見方・考え方をペアや全体等で確認し、見通しをもたせ、自己追究へ進ませる。
 - 見通しがもてない児童生徒がいた場合に対し、補足や個別指導等における具体的な手立てを準備しておく。
- 〔 例： ノート等から既習の内容や考え方等を振り返らせること、算数・数学コーナー等の設営物の利用、ヒントの提示の工夫、他の児童生徒の考え方の一部の紹介等 〕

このような工夫を積み重ねていくことによって、最終的には、児童生徒が自ら問題を設定したり、その問題に対して自ら解決に向けて考えを進めたりしていけるようにしていきたい。

ウ 関係性 数学的な表現を用いて伝え合う活動の充実を図る手立て

問題に対して、自らの考えをもち、その考えが正しいのかどうか批判的に吟味するなど、自己内対話の過程は必要である。その過程は、他者とのコミュニケーションによって一層促進される。他者の考えを知ることで、一人では気付かなかった新しい視点に気付くことがある。仮に誤った考えでも、どのような誤解に基づいているのか、どこを改めれば正しい考えになるのか、などを考えることにより、児童生徒は、より深い理解に到達することもある。また、理由を考えることにより、根拠を明確にし、筋道立てて説明することにつながる。このような活動を繰り返すことで、より適切な数学的な表現を用いて、よりよく問題解決しようとする態度も育まれてくる。

そこで、算数・数学科においては、関係性の視点を踏まえた手立てを「数学的な表現を用いて伝え合う活動の充実を図る手立て」とし、主にペアやグループ等での他者との関わりを中心に留意点を以下のように考えた。

- 意見交換の視点について明確に示す。
- 意見交換においては、極力、数学的な表現を用いて説明させる。(意見交換につながる、自己追究の際の記述についても数学的な表現を用いるように、意識させておく。)

- よりよい考えや事柄の本質について話し合う場を設定する。
- グループの状況に応じて、具体的な対応を準備しておく。(例：行き詰まっている場合には、他のグループの用いた図や考え方の一部を紹介する。根拠が明確でないグループには、根拠を考えさせる。等)

このようなペアやグループ等での他者との関わりは意図をもって設定する必要がある。どのような問題で、学習過程のどの場面で設定するかについても十分検討しなければならない。その際、児童生徒の姿を事前に想定し、その状況に応じて、児童生徒一人一人が価値ある活動ができるようにしておく必要がある。

エ 有用性 自己の変容を自覚して、数学のよさを実感させる手立て

様々な事象の考察や問題解決に数学を活用しようとする態度を育成するためには、数学のよさを認識できるようにすることが大切である。数学のよさとは、例えば、「数量の関係を方程式で表すことができれば、形式的に変形して解を求めることができる」といった数学的な表現や処理のよさ、数量や図形などに関する基本的な概念や原理・法則のよさ、数学的な見方・考え方を働かせることのよさなどを意味する。また、数学が生活に役立つことや、数学が科学技術を支え相互に関わって発展してきていることなど、社会における数学の有用性や実用性も含まれる。

数学のよさを認識するためには、数学を学ぶ過程で、数学的な知識及び技能を用いることができるようになったり、思考力、判断力、表現力等を発揮して適切かつ能率的に物事を処理できるようになったり、事象を簡潔・明瞭に表現して的確に捉えることができるようになったりする成長の過程を適宜振り返るなどして、自覚することが大切である。

そこで、算数・数学科においては、有用性の視点を踏まえた手立てを「自己の変容を自覚して、数学のよさを実感させる手立て」とし、学習過程と成果を振り返る場面を中心に主な留意点を以下のように考えた。

- 今日の学習や単元の学習を振り返る場を設定する。(時間、方法の検討)
- 振り返りの内容を具体的に指示する。(自己の変容へつながるものとして、数項目を選択)
 - ・ 学習したことは何か。達成できたか。(適応問題による自己評価等)
 - ・ 自己追究やペア、グループ等での活動において、参考になった考えはなかったか。自分の考えと他者の考えを比較して、表現方法(記述や説明の仕方)で学ぶことはなかったか。他者との関わり方はどうだったか。今後の学習に向けて考えたことは何か。
- 学習したことが日常や社会につながっていることや、数学的な表現や数学的な見方・考え方について実感させるまとめや活動をする。

このように、問題を一旦解決し終えた後で、導いた結果やその価値を振り返って自覚化することは、問題解決の意義や数学のよさを実感する上で大切である。また、振り返りを行うことで、新たな課題を発見し、その解決を図る学習へとつながる機会にもなる。振り返りについては、単位時間や複数の時間後、単元末など、どのような振り返りを行うか効果的な場面や方法を十分検討して実施する必要がある。

3 算数・数学科における学びの価値を見いだす授業デザイン

(1) 学びの価値を見いだす授業デザインの基本的な考え方

授業設計の際、授業中、授業後で、四つの視点における目指す児童生徒の姿をよりよいものにしていくことを踏まえながら、学びをより高めていくことが大切である。そこで、算数・数学科においては、授業をデザインする際に教師の手立てを検討し、工夫・改善を図ることができたり、授業研究等において振り返り、改善したりするツールの例として、二つのツールを提案する。

(2) 児童生徒の学びの姿を意識した授業デザインツール

ア 授業構想・改善ツール

このツールは、学習指導案の形式に近く、これまで作成していたものに視点を盛り込んだものである。

授業設計に当たり、まず、目標を学習指導要領等で確認すること（資料4-3①）、そして、具体的に児童生徒は、何ができるようになればよいのか、あるいは、何がかめればよいのかを明確にしておくこと（資料4-3②）が大切である。つまり、授業のゴールイメージを教師が明確にもって設計することが大切である。①、②については、付箋を用いず、直接記入でもよい。

次に、学習活動（資料4-3③）の欄は、大まかな流れを記入したものをを用い、後で、付箋等で修正したり加筆したりする。教師の手立て及び留意点（資料4-3④）には、あらかじめ主な留意点を印刷してあるシートを用い、そのシートの空いた部分やその文字の上に付箋を貼っていき、手立ての確認をしながら設計する。

また、予想される児童生徒の反応（資料4-3⑤）を想定することは重要である。例えば、問題に対して、児童生徒の表情はどうか、問題の意味が理解できるか、見通しがもてるか、考えが浮かぶか、楽しそうかなど児童生徒の姿を想像することなどが考えられる。それが、授業のねらいを達成しない姿であれば、④の手立てを修正する必要がある。それに伴い⑤も変わるというように、関連付けていくことで、改善が図れると考える。また、このシートは、手立てのポイントや児童生徒の姿と関連付けて示してあるので、授業参観や授業研究等にも活用することができる。

【作成(記入)の手順】

①目標 ⇒ ②指導事項や考え方等の明確化(ゴールの意識) ⇒ ③学習活動
⇒ ④手立て・留意点 ⇔ ⑤児童生徒の反応

資料4-3 【授業構想、改善ツールの例】（一部）

題材 2章 平方根 平方根を含む式の加法・減法(数B.60) (第7時)	目標 - 平方根の加法や減法に関心をもち、その意味や計算の妙さを感じたり、計算しようとしている。(関・意・態) $\sqrt{a} + \sqrt{b}$ / $\sqrt{a} - \sqrt{b}$ とならないことを、近似値や面積図などを用いて説明することができる。(数学的な考え方) - 分配法則を用いて、根号を含む式の計算をすることができる。(数学的な技能)	何ができるようになればよいのか。 または、何がかめるといいのか。 ○ $\sqrt{8} + \sqrt{2} + \sqrt{10}$ を図や式を用いて説明できる。 ○ $\sqrt{3} + \sqrt{3}$ はこれ以上できないだろうか) ○ $\sqrt{2} + 2\sqrt{2} - 3\sqrt{2}$ であること	
③ 導入	学習活動 1. 学習課題(問題)を理解する。 2. 学習課題に取り組む(自己探究)	予想される生徒の反応(姿) ⑤ $\sqrt{8} + \sqrt{2}$ 加法からやりたい $\sqrt{8} - \sqrt{2}$ 乗法からやりたい $\sqrt{8} \times \sqrt{2}$ 多いものとして、まず加法を $\sqrt{8} + \sqrt{3} - \sqrt{10}$ の予想を用いる ア 表割または電卓 $\sqrt{8} + \sqrt{2}$ $\sqrt{10}$ 2.8 1.1 = 1.2 = 3.1 イ 面積図で比較 ウ 乗してみる $(\sqrt{8} + \sqrt{2})^2$ 10 $\frac{1}{2} \times \sqrt{8} \times \sqrt{2}$ 大きく違う	教師の手立て及び留意点 ④ ○ 学習問題(学習課題)の工夫 □ 興味・関心を持たせるものか □ 挑戦意欲が湧くものか 等 課題A $\sqrt{8} + \sqrt{2} = \square$ 予想 $\sqrt{8} + \sqrt{2} = \sqrt{8} + \sqrt{2} = \sqrt{10}$ 本当にそうか？ 違うとすればその理由を: × 課題B $\sqrt{8}$ と $\sqrt{2}$ の面積計算はどのような考えればよいだろうか。(今まで学習したことを使って調べよう。) ○ 提示の仕方の工夫は ワークシート(方眼紙や電卓を使うように) □ 機器を用いるか 何で提示するか ○ 個人差による手立ての必要はないか (見通し立つか。補足等が必要か) ○ 今迄に学習したこと 面積、面積図、乗法等となる特別な数、 2乗

イ 「学びの価値を見いだす授業デザイン」サイクルシート

このツールは、一つの視点について、「①〇〇性の視点から見た本時で目指す児童生徒の姿→②教師の手立て→③児童生徒の反応→④改善策→①…」と下の図のようなシートに記述し、改善していくことで、学びが高まっていくと考えたツールである。このツールを用いることで、教師の手立てによる反応をシミュレーションできるため、常に授業の中心である児童生徒の姿を想定して授業づくりができ、授業者の振り返りだけでなく、参観者も視点をもって授業を参観することで、授業研究にも活用できる。

授業設計に当たり、四つの視点のシートを準備し、まず、「各視点から見た本時で目指す児童生徒の姿」(資料4-4①)を記述する。

次に、その目指す児童生徒の姿を達成するために「教師の手立て」(資料4-4②)を考え、記述する。その際、付箋等を用いて検討しながら設計していくことも考えられる。また、手立てを考える際には、児童生徒の反応を予想しながら、それを踏まえ、手立てを検討し、修正を図り、授業に臨むことが大切である。

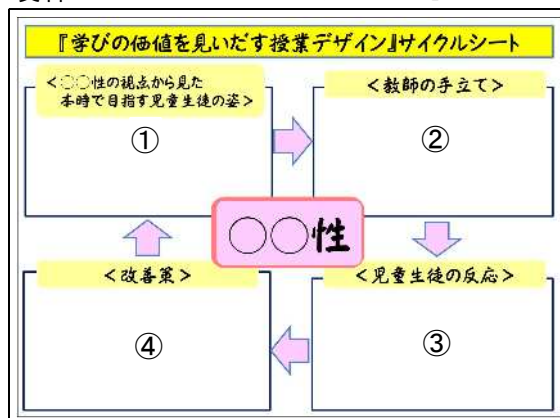
授業後においては、「児童生徒の反応」(資料4-4③)を振り返り、具体的に記述する。その際、児童生徒の実際の活動の状況や考え方で示せると、それに対応した手立ての改善策(資料4-4④)が見えてくる。

本シートは、授業参観や授業研究の際にも活用することができる。例えば、「〇〇性の視点から見た本時で目指す児童生徒の姿」(資料4-4①)、「教師の手立て」(資料4-4②)の欄を、参観前に学習指導案から見取り、記入してから授業に臨む。そして、参観中には、具体的に読み取れなかった「教師の手立て」(資料4-4②)、「児童生徒の反応」(資料4-4③)の欄について、付箋にメモをしておき、授業研究の際に、グループ等で模造紙等に貼っていき、「改善策」(資料4-4④)について検討を行うようにすることもできる。

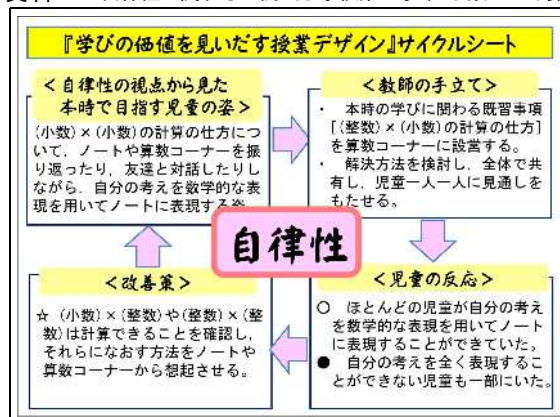
このように、このツールは、児童生徒の姿を明確にし、その反応を踏まえながら、手立てを見直していくことで、今後の授業改善につなげていくことができるものである。

以上の二つのツール以外にも、令和元年度に提案した、「手立て分類マトリクス」など、手法は多様にある。授業をデザインする際に大切なことは、学びに向かう児童生徒を育むために、教師の手立てに対して、児童生徒がどのように反応するのかという姿を想像しながら、最初に想定していた手立てを「必要性」、「自律性」、「関係性」、「有用性」の四つの視点で検討し、よりよいものへと工夫・改善を図っていくことであると考えられる。

資料4-4 「学びの価値を見いだす授業デザイン」サイクルシート



資料4-5 自律性に関する一例(小学校第5学年 小数のかけ算)



4 小学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

未来の創り手に求められる資質・能力の育成を目指し、「学びに向かう力」の涵養を強く意識した算数科の授業づくりについて研究を進めてきた。そのため、四つの視点（必要性・自律性・関係性・有用性）を踏まえた手立てを基に、授業デザインを行うことにした。

本実践は、検証授業で行った第1学年「ひきざん」における授業である。

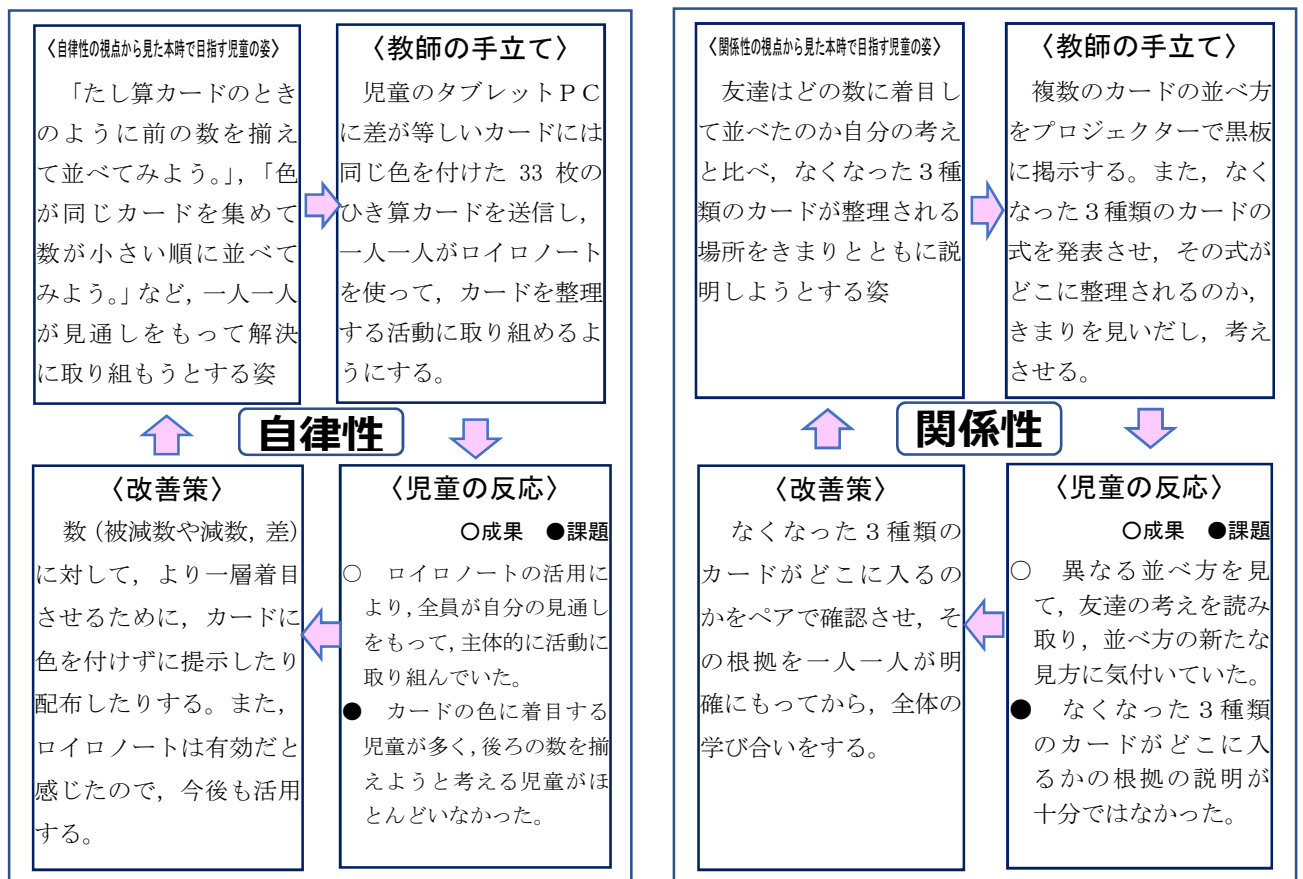
(2) 研究の実践（第1学年「ひきざん」7／11）

ア 授業で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
繰り下がりのある減法の計算が正しくでき、減数や被減数、差に着目して式を整理する技能	被減数や減数、差に着目し、ひき算カードを整理することで、被減数と減数、差に成り立つきまりに気付く力	被減数や減数、差に着目するとひき算カードを規則正しく並べられるというよさを感じながら、ひき算カードを並べて、なくなったカードを見付けだそうとする態度

イ 授業デザインに当たって

本実践では、「学びの価値を見いだす授業デザイン」サイクルシートを用いて、児童が主体的に学ぶための手立てを自律性・関係性の二つの視点で分析し明確にして授業を行った。また、授業分析を通して、改善策を見いだすことができた。



過程(分)	主な学習活動	教師の手立て
つかむ・見通す (10)	1 本時の学習課題を知る。 ひき算カードが何枚かなくなっていました。なくなったひき算カードは、どのような式でしょうか。 15-8 14-6 12-7 16-9 14-9 15-6 11-5 13-9 12-6 12-4 11-6 13-6 15-7 17-9 17-8 11-3 12-9 14-7 11-7 18-9 13-5 12-3 13-7 12-5 16-8 14-8 14-5 11-9 11-4 11-2 12-8 13-4 11-8 2 自分の問いをもつ。 - なくなったカードは、どのような式になっているのかな。 - どのようにカードを見付ければよいのかな。	○ 学習課題を提示した後、日常生活でカードがなくなるという場面を問うことで、児童にとって身近な事象であることに気付くようにする。その後、36種類の繰り下がりのある(十何)-(1位数)の式から「13-8」,「15-9」,「16-7」の3枚のカード以外を不規則に提示することで、どのカードがなくなったのかを明らかにしたいという「自分の問い」をもつことができるようにする。
	3 学習問題を確認する。 なくなったひき算カードは、どのようにすれば見付かるかな。 4 問題解決の見通しをもつ。 どのようにすればよさそうですか。 - たし算カードのように、前の数を揃えて並べよう。 - ひき算の答えを揃えてみよう。	○ たし算カードを使った学習の時は、どのような活動をしたか算数コーナーで振り返ったり、働かせたい数学的な見方・考え方を想起したりすることで、問題解決の見通しをもつことができるようにする。
	5 問題解決に取り組む。 ㊦ 色(答え)が同じ式を揃えて並べてみよう。 ㊩ 前の数が同じ式を揃えて並べてみよう。 11-2 11-3 11-4 11-5 11-6 11-7 11-8 11-9 12-2 12-3 12-4 12-5 12-6 12-7 12-8 12-9 13-2 13-3 13-4 13-5 13-6 13-7 13-8 13-9 14-2 14-3 14-4 14-5 14-6 14-7 14-8 14-9 15-2 15-3 15-4 15-5 15-6 15-7 15-8 15-9 16-2 16-3 16-4 16-5 16-6 16-7 16-8 16-9 17-2 17-3 17-4 17-5 17-6 17-7 17-8 17-9 18-2 18-3 18-4 18-5 18-6 18-7 18-8 18-9	○ 児童のタブレットPCに差が等しいカードには同じ色を付けた33枚のひき算カードを送信することで、一人一人が見通しをもってロイロノートを使ってカードを整理する活動に主体的に取り組めるようにする。
調べる (15)	6 全体での学び合いを行う。 友達は、どのようにカードを並べたのでしょうか。 ㊦は、色(差が同じ)を縦に揃えているよ。 ㊩は、色(差が同じ)を横に揃えているよ。前の数を同じに揃えて並べているとも言えるよ。 これらの並べ方に共通していることはありますか。 縦と横は違うけどどちらも色で揃えているよ。 どちらも答えが9, 8, 7...と並んでいるよ。 どのように考えてなくなったカードを見付けましたか。 (㊦では、)式を縦に見ると、前の数は増えていて、後ろの数は減っていくから式が分かったよ。	自律性
	7 本時の学習について振り返り、まとめをする。 今日の学習で分かったことは何ですか。 なくなったカードを見付けるには、たし算カードを揃えて並べたときと同じように、前や後ろの数、答えが揃うように並べたらよいことが分かったよ。 どのように考えたら分かりましたか。 並べたカードの式の前や後ろの数が、どのように変わっていくかきまりを見付けました。 なくなったカードを見付けるには、前や後ろ、答えの数を揃えて並べてきまりを見付けるとよいね。	関係性 ○ 全体での学び合いでは、まず、異なる並べ方をしている解決方法をプロジェクターで黒板に提示することで、友達がどの数に着目して並べたのか読み取ることができるようにする。次に、これらの並べ方に共通点がないか問い掛けることで、どの並べ方も等しい数字を集めたり、色を揃えて並べたりしていることに気付くことができるようにする。そして、なくなった3種類のカードの式を発表させ、その式がそれぞれどこに整理されるのか考えさせることで、根拠を明確にして説明できるようにする。
まとめ (5)		○ どのように考えたら問題解決できたのかを振り返ることで、数量の関係を見るときは、「変わり方のきまりを見付ける」という数学的な見方・考え方や既得の知識及び技能であるたし算カードのきまりと関連付けて考えたことなどを想起できるようにする。また、学びの価値を見いだしている児童の発言を価値付ける。

5 中学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本校では、生徒が数学的な見方・考え方を働かせて数学的活動に取り組み、主体的に問題解決を図るために提示する問題の工夫に取り組んできた。また、自分の考えを伝えながら他者の考えにも触れ、対話を通じた学び合い学習にも取り組んできた。しかし、生徒自身が学びたい、知りたいと感じられる授業は思うようにできていない現状もある。また、自ら問いを見いだして問題解決に取り組もうとする生徒や、学んだことを他の学習や日常生活の場面で活用しようとする生徒は多いとは言えない。

そこで、未来の創り手に求められる資質・能力を育成するために、「学びに向かう力」の涵養を特に意識し、「授業構想・改善ツール」を用い、手立てを検討し、授業改善を図ることにした。

本実践は、検証授業で行った第2学年「一次関数」における授業である。

(2) 研究の実際（第2学年「一次関数」15／16）

ア 授業で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
事象の中から一次関数として捉えられるものがあることの数 関数関係の理解 問題を読み、意味を把握し、数量の 関係をつかむ技能	一次関数を利用して、具体的な事象を捉え説明したり、問題を解決したりする力	具体的な事象についての問題を、言葉や式、表、グラフなどの数学的な表現を用いて、論理的に考え、説明しようとする態度

イ 授業デザインに当たって

「授業構想・改善ツール」を用い、生徒の姿を予想しながら、手立てを検討した。まず目標と具体的に生徒は何ができるようになればよいのかを記入し、目指すゴールを明確にした。次に、付箋を用いて、「必要性」、「自律性」、「関係性」、「有用性」の視点における留意点を参考に授業を検討した。

資料 4-6 授業構想・改善ツールの実際（一部抜粋）

<必要性> 問題解決の必要感や意欲をもたせる手立て

日常や社会の事象等からの問題である携帯電話について、三つのプランを示し、最適なものを検討させる問題を提示する。

<自律性> 見通しをもたせ、解決に向けて考えを進めさせる手立て

まず、問題から結果を予想させる。解決の過程では、これまで学習したことを活用できないか、言葉や式、表、グラフなどの数学的な表現を意識させ、解決を図らせる。

<関係性> 数学的な表現を用いて伝え合う活動の充実を図る手立て

自らの考えをもち、数学的な表現を用い、根拠を明確にし、論理的に説明させる。ペアやグループ等を効果的に活用しながら授業を進めていく。

<有用性> 自己の変容を自覚して、数学のよさを実感させる手立て

数学のよさを認識できるように、学習過程と成果を振り返る場面を設定する。具体的には、「数学日記」で本時を振り返らせる。授業の最初の予想と最後の自分の説明を比較させ、自分の考えがどのように変わったか（変容）を確認させる。



<考察>

授業のゴールイメージを基に、生徒の反応をイメージして、その都度付箋に貼っていくことで、生徒が主体的に学ぶための手立てを考えることができた。

生徒のつまずきの部分をもっと細かくイメージして、その場合にどのような手立てをしていくのかを、より具体的に準備していく必要があった。

過程(分)	主な学習活動	教師の手立て
つかむ・見通す (10)	1 本時の学習問題を知る。 携帯電話を購入しようとしている。条件からどのプランが最適か、アドバイスしてほしい。 2 見通しをもつ。 どのプランが最適か予想を立てる。 総費用と使用時間の関係に着目したらどうか。どのように考えたらいいかな。 3 学習課題を設定する。 携帯電話の総費用と通話時間には、どのような関係があり、どのようにアドバイスをすればよいのだろうか。	日常や社会の事象から生徒の興味・関心を高める解決の必要感のある問題を提示する。 必要性 問題から導かれるであろう結果を予想させる。 ともなって変わる二つの数量に着目させる。 問題を把握させ、解決の糸口を見付け見通しをもたせる。 自律性
調べる (20)	4 学習問題Ⅰ（共有問題）に取り組む。 共有①通話時間が20分のときのBプランの総費用を求めてみよう。 共有②通話時間が90分のときでは、どのプランが一番安いかな。 共有③x分間使用したときの総費用をy円として、それぞれのプランについて表、グラフ、式で表してみよう。 - 具体的な数字を入れてx, yを求めていく。 - グループ内でかいたものを基に説明する。	既習事項を基に、ともなって変わる二つの数量に着目させ、関数について想起させながら学習課題を設定する。 - 自力解決から対話を通した学び合い学習へつなげていく。 - 表や式やグラフそれぞれについて全体で視覚的に確認する。
深める (10)	5 学習問題Ⅱ（ジャンプ問題）に取り組む。 「何分間使用したら、Bプランが一番安くなるか。」 ・ 表や式やグラフを活用して求めたらどうか。 → 一番安くなる時の数字を読み取ればいいのか。 - 求めたものを基にグループ内で意見交換する。 - 他の考え方がないかフリーに移動して共有する。 自分と同じ考え方や異なる考え方(表、式、グラフ)の交流を深め、一次関数のよさを見付け合う。	自らの考えを、根拠を明確にし、論理的に説明させる。 ペアやグループ等で他者と関わらせながら意見交換を行い、練り上げていく。 ① 活用問題 共有問題で作成したものを更に深め活用する。 ② 数学的な表現を用いて説明する場を設定する。 関係性
まとめる・振り返る (10)	6 本時の学習についてまとめる。 携帯電話の総費用と使用時間には関数の関係があり、表や式やグラフを使ってアドバイスをすることができる。 7 本時の学習を振り返り、学びを自覚する。 学習の振り返りを行う。 - 表や式やグラフを活用したら課題を解決することが分かった。 - 友達に解き方を教えることができ自分のためになった。もっと説明がうまくできるようになりたい。 - 一次関数を使って、どのプランがお得になるか調べられた。これから生活でも関数を利用したい。	本時を振り返り、生徒の言葉を取り入れながらまとめる。 本時の学習を振り返り、学習過程と成果を振り返らせ自分の言葉で記述させる。 ① 数学日記(ワ・ガ・ト・モ)の振り返りの視点を示す。 ② 板書やICT機器で学習を振り返らせる。 ③ 次時に本時の学習を確認し今後の学習につなぐ。 有用性

6 高等学校における研究実践例

(1) 授業研究実践の目的

生徒は数学的な見方・考え方を働かせながら、自ら問題と向き合い解決しようとする。そこで出た考えを確認したい、疑問を解決したいという必要感をもち、他の生徒と学び合う。こうして問題を解決することで得られる達成感や自分の成長の実感により、次の学びへと進む「学びに向かう力」の涵養を、育成する資質・能力の中でも特に意識している。

そこで、「学びに向かう力」の涵養に向けて、自律性の視点から見た生徒の姿をイメージし、既習事項を振り返らせる手立て、必要感をもって学び合いを活性化させるための手立ての有効性を検証することとした。本実践は、第2学年「三角関数」における授業である。

(2) 研究の実践（第2学年「三角関数」17／26）

ア 授業で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
正接と直線の傾きの関係、2直線のなす角、三角関数の加法定理についての理解	三角関数の加法定理と2直線のなす角との関係に着目し、問題を解決したり、考察したりする力	既習事項を統合して考察し、粘り強く問題に取り組もうとする態度 数学のよさを認識し積極的に数学を活用しようとする態度

イ 授業デザインに当たって

本時で目指す自律性の視点から見た生徒の姿をイメージし、①授業計画→②（予想される）生徒の姿→③教師の手立てを考える。授業の中で生徒の理解度に応じ、スモールステップで考えさせながら、②→③→②→③→…と進めることで、生徒が自分のステップアップしていく姿を実感し、問題解決による達成感を得ることができる。それにより、次の問題に取り組もうとする「学びに向かう力」が涵養され、目指す生徒像の実現につながる。以下はそのイメージである。

【本時で目指す自律性の視点から見た生徒の姿】

- ・ 2直線のなす角をイメージし、見通しをもって解決しようとする姿
- ・ 既習事項を統合して考察し、粘り強く問題を解こうとする姿

① 授業計画

- ・ 前時までの既習事項を確認させる。
- ・ 直線 $y = ax$ の傾きは、 $a = \tan \theta$ であることを確認させる。
- ・ 直線と x 軸の正の部分とのなす角について理解させる。
- ・ 2直線のなす角を理解させる。



② （予想される）生徒の姿

- ・ 既習事項が定着できていない。
- ・ 直線 $y = ax$ の傾きは、 $a = \tan \theta$ であることが理解できていない。
- ・ 直線と x 軸の正の部分や2直線のなす角のイメージが湧かない。

③ 教師の手立て

- ・ 単元の既習事項を図でイメージしながら確認させる。
- ・ 直線 $y = ax$ のグラフと直角三角形を比較させて $a = \tan \theta$ であることを確認させる。
- ・ 身近なものを活用してなす角をイメージさせる。

学びに向かう力の涵養



② 生徒の姿

③ 教師の手立て

② 生徒の姿

③ 教師の手立て

② 生徒の姿

③ 教師の手立て



過程(分)	主な学習活動	教師の手立て
導入 (15)	1 既習事項の確認をする。 - 三角関数の定義について - 単位円での三角関数について - 弧度法について $\tan \theta$ の加法定理について 2 直線と x 軸の正の部分とのなす角について考える。 (1) $y = -x$ (2) $y = -2x$ (3) $y = 3x$ 各自で図示したものをみて、どのように考えてなす角を求めたかグループで確認する。	○ 本単元の授業の始めには、毎回、既習事項を確認させる。 必要性 ○ x 軸の正の部分から直線 $y = ax$ まで測った角を θ とすると、$a = \tan \theta$ であることを確認しながら、例題 5 につなげさせる。
展開 (30)	3 身近な例として時計の短針と長針のなす角を考え、2 直線のなす角について関心を持ち、例題 5 について各自で考える。 例題 5 2 直線 $y = -2x$, $y = 3x$ のなす角 θ を求めよ。ただし、$0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ とする。  時計の針のイメージだと、なす角はこの部分だね。  直線の傾きから考えると、答えは $\frac{\pi}{4}$ くらいかな。  もしかして、加法定理が使えるんじゃない。 例題 5 で出てきた考えや疑問を、該当の既習事項と照らし合わせながらグループで確認する。 4 練習 27 で本時を振り返りながら演習する。 練習 27 2 直線 $y = 2x$, $y = \frac{1}{3}x$ のなす角 θ を求めよ。ただし、$0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ とする。 練習 27 が早く終わった生徒は類題に取り組む。 類題 直線 $y = -3x + 2$, $y = 2x - 3$ のなす角 θ を求めよ。ただし、$0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ とする。	自律性 ○ 問題解決のための見通しをもたせるために、既習事項を確認させたり、統合させたりする。 ○ なす角について、$0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ の範囲で考えることを確認させる。 関係性 ○ 出てきた考えや疑問をグループで共有し、数学的な表現を用いてグループ内で解決しようとさせる。 ○ 各自で考えて、グループで確認させる。 ○ グループで確認した考えを共有させる。 ○ 類題については、次時に確認する。
まとめ (5)	5 本時の学習についてまとめる。 2 直線のなす角 θ と正接の加法定理の関係を数学的に表現し振り返る。	有用性 ○ 2 直線のなす角 θ が正接の加法定理で求められることを振り返らせる。

1 理科の授業で目指す児童生徒像及び授業像

(1) 本県の状況と考察

平成30年度に実施された全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙の結果によると、鹿児島県では、小学校、中学校ともに、「観察、実験を週1時間以上行った。」「観察、実験を行うことは好きだ。」の項目に対して、肯定的な回答をしている児童生徒の割合が全国より大幅に高い。しかし、「観察や実験の結果から、どのようなことが分かったか考えている。」「観察や実験の進め方や考え方が間違っていないかを振り返って考えている。」の項目に対しては、全国より肯定的な回答が低くなっている（資料5-1）。このことから、本県の理科の授業は観察、実験を行わせることが目的となってしまうことが多いのではないかと考えられる。そこで、「自然の事物・現象」（以下、自然事象）から「問題（課題）」（以下、課題）を見いだし、結論を導出するまでの一連の「問題解決（探究）の過程」（以下、探究の過程）に主体的に関わらせ、課題を解決する喜びを実感させる授業を行っていく必要がある。

(2) 目指す児童生徒像と授業像

理科の学びの特質は、自然事象に対する気付き、課題の設定、予想や仮説の設定、検証計画の立案、観察、実験の実施、結果の処理、考察、結論の導出といった探究の過程を通して学ぶことである。このことを踏まえ、理科では資料5-2のような児童生徒の育成を目指している。

一連の探究の過程を主体的に遂行できる児童生徒を育成することは、児童生徒が学びの達成感を得ることができ、理科の面白さを感じたり有用性を認識したりするとともに、知的好奇心をもって身の回りの自然事象に働き掛けることにつながると考える。

児童生徒自身が主体的に課題を解決していくためには、自然事象をどのような視点で捉えるかという「理科の見方（量的・関係的、質的・実体的、共通性・多様性、時間的・空間的）」や探究の過程において、どのような考え方で思考していくかという「理科の考え方（比較する、関係付ける、条件を制御する、多面的に考える）」を自在に働かせることが必要となる。そこで、資料5-3のような授業を目指し、教師が授業をデザインする際の手立てを四つの視点で整理した。

資料5-1 H30全国学力・学習状況調査の結果

児童生徒質問紙の結果から				
【肯定的な回答（高）】				
質問の内容		鹿児島	全国	差
理科室で観察や実験を週1回以上行った。	小学校	48.9	41.2	7.7
	中学校	59.5	40.7	18.8
観察や実験を行うことは好きだ。	小学校	92.5	89.8	2.7
	中学校	87.7	82.1	5.6
【肯定的な回答（低）】				
質問の内容		鹿児島	全国	差
観察や実験の結果から、どのようなことが分かったか考えている。	小学校	81.2	81.8	-0.6
	中学校	69.7	72.3	-2.6
観察や実験の進め方や考え方が間違っていないかを振り返って考えている。	小学校	67.6	68.1	-0.5
	中学校	56.1	59.0	-2.9

資料5-2 理科で目指す児童生徒像

自ら進んで自然の事物・現象から問題（課題）を見いだし、見通しをもって観察、実験などを行い、解決する児童生徒 			
必要性	自律性	関係性	有用性
自然事象に進んで関わり、問題を見いだす姿	自分が立てた予想や仮説を振り返りながら観察、実験などを行う姿	既習内容や生活経験、観察、実験の結果などを関係付ける姿	学んだことが、日常生活や社会、学習に生かされていることに気付く姿

資料5-3 理科で目指す授業像と手立て

「理科の見方・考え方」を働かせながら問題解決（探究）の過程を通して学ぶ授業 			
必要性	自律性	関係性	有用性
自然事象を提示し、気付きを生ませる手立て	自己選択し、見通しをもって観察、実験などを行わせる手立て	既習内容や生活経験、観察、実験の結果などを結び付けさせる手立て	学んだことを生活に橋渡しさせたり、探究の過程を振り返らせたりする手立て

2 理科における児童生徒に「学びに向かう力」をより涵養するための視点

(1) 四つの視点の基本的な考え方

探究の過程において、課題の把握（発見）の過程では主に必要性の視点、課題の追究（探究）の過程では主に自律性の視点、課題の解決の過程では主に有用性の視点で手立てを考えることが多い。知識を関係付けながら課題解決し、概念を形成していく理科の特質から、関係性の視点においては、一連の探究の過程全体を通して手立てを考えたり、それぞれの過程において、他の視点に関係性の視点を加えながら手立てを考えたりすることで、一層「問題解決の（探究する）活動」（以下、探究する活動）が充実すると考える（資料5-4）。

ただし、観察、実験を行う中で、新たな疑問を見いだし必要性をもたせることなども考えられる。よって、探究の過程全体において、必要性、自律性、有用性の視点で考えられる手立てを検討する必要がある。

(2) 四つの視点について

ア 必要性 自然事象を提示し、気付きを生まれさせる手立て

児童生徒が「理科が面白い」と感じる要因として、探究の過程を通して、新たな概念を見いだしたり、自分がもっていた概念を修正したりすることなどが挙げられる。これらの活動の出発点は、自然事象から、驚きや発見、疑問などの気付きを見いだすことである。気付きは、複数の自然事象を比較して共通点や相違点を見いだしたときや自然事象を今までもっていた知識や概念やこれまでの経験と比較し、関係付けたときなどに生まれる（資料5-5）。つまり、自然事象同士を比較したり、自然事象と既習内容や生活経験とを比較、関係付けたりすることで気付きを見いだす機会を意図的に設定すれば、児童生徒にとって学習の必要性が生まれる。さらに、問題意識をもつことは、その後の探究する活動の原動力となる。

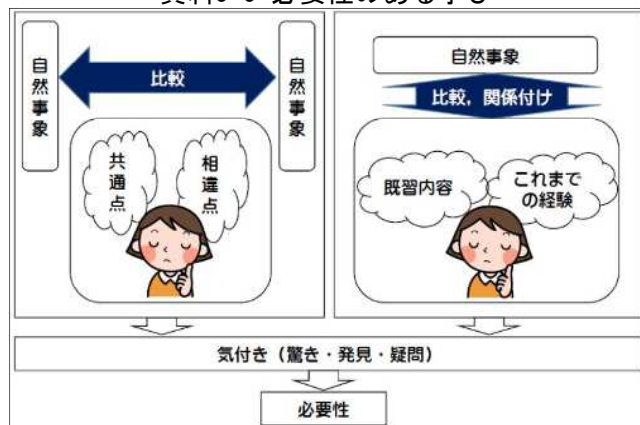
<留意点>

- 児童生徒の既習内容や生活経験を明確に把握し、どのような自然事象を提示するか考える。
- 児童生徒が、共通点や相違点からどのような気付きをもち、どのような学習課題を設定するかを、明確に予想しておく。
- 探究する活動を通して、新たに見いだした疑問をその都度ノート等に記入させ、以降の学習に役立てられるようにする。

資料5-4 探究の過程における四つの視点



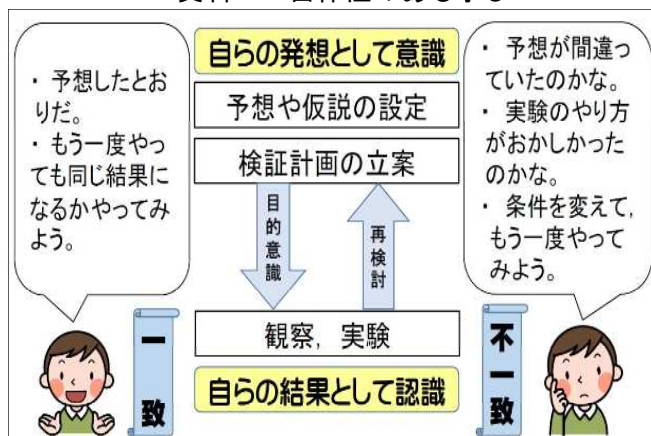
資料5-5 必要性のある学び



イ 自律性 自己選択し、見通しをもって観察、実験などを行わせる手立て

探究する活動を行う上で、設定した予想や仮説が観察、実験結果と一致しなかったり、立案した観察、実験方法では予想した観察、実験結果が得られなかったり、観察、実験を行う度に結果が違ったりすることがある。このような場合、自分の予想や仮説、検証計画に立ち返って考えてみたり、再度観察、実験を行ったりするなど、繰り返し自然事象に関わることで納得した答えを見いだすことができる（資料5-6）。このよう

資料5-6 自律性のある学び



に、児童生徒が一連の探究の過程において、自らの学びを調整しながら、粘り強く探究する活動を遂行するためには、課題に対する予想や仮説、予想や仮説の検証計画を自ら考え、その後、児童生徒同士で検討する中で自己選択して観察、実験に臨むことが重要となる。さらに、検証計画に対する結果を想定することで見通しが確かなものとなり、観察、実験後の考察や自分なりのまとめにもつながると考えられる。

<留意点>

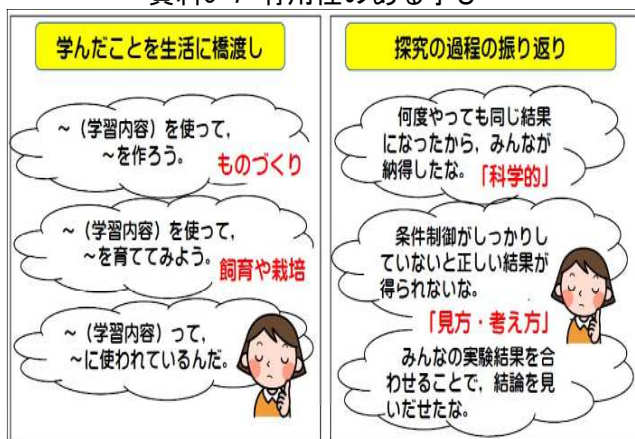
- 児童生徒が、どのような根拠から予想や仮説を発想するか、どのような観察、実験方法を計画するか想定し、観察、実験器具を準備しておく。
- 児童生徒が発想した予想や仮説、観察、実験を児童生徒相互に検討する場を設定し、自分の考えを確かなものにしたり、修正したりするような場面を設定する。
- お互いの観察、実験の結果について、情報交換する場を設けることで、自分の予想や観察、実験の方法を振り返らせるようにする。
- 教師が観察、実験を提案するような授業でも、観察、実験で明らかにすることや結果の予想、条件制御などを十分に考えさせる。

ウ 有用性 学んだことを生活に橋渡しさせたり、探究の過程を振り返らせたりする手立て

児童生徒は、理科で学んだことを日常生活との関わりの中で捉え直したり、学習した内容を活用してものづくり、飼育や栽培を行ったりすることで、理科を学ぶ意義や有用性を実感する。そのためには、学習内容が日常生活や社会、新たな疑問とつながるような授業を行う必要がある。

さらに、実証性、再現性、客観性といった条件を満たした「科学的」な課題解決であったか、「理科の見方・考え方」をどのよう

資料5-7 有用性のある学び



ように活用して解決したのかといった視点で探究の過程を振り返ることで、主体的に課題解決することのよさを実感し、次の探究する活動を充実させることができると考える（資料5-7）。

<留意点>

- 学習内容と日常生活や社会とのつながりを理解できるような事象を提示する。
- 学習内容と日常生活や社会とのつながり、学習内容と新たな疑問とのつながりを考えるために、学習の振り返りができる手立てを考える。
- 習得した知識だけでなく、探究の過程を振り返る場を設定する。
- 学習内容を踏まえた発展的な探究をする活動やものづくり、飼育や栽培などを計画する。
- ものづくりの際は、児童生徒が明確な目的を設定して行い、設定した目的を達成できているかを振り返り、修正するといった学習を行う。

エ 関係性 既習学習内容や生活経験、観察、実験の結果などを結び付けさせる手立て

探究の過程において、児童生徒は、自然事象同士を比較、関係付けて問題を見いだしたり、これまでの経験や既習内容と関係付けて予想や仮説を発想し、観察、実験の計画を立てたり、複数の観察、実験の結果を関係付けて考察を考えたり、学習したことを日常生活の事象と関係付けたりする。このことから、課題を解決していくためには、探究の過程を通して関係付けるといった理科の考え方を働かせることが欠かせない。

自然事象同士や生活経験、児童生徒相互の考え、観察、実験の結果等を結び付けながら探究できるように手立てを講じることで、自分の思考を明確にしたり、広げたり深めたりすることとなり、主体的な課題解決の活動につながる（資料5-8）。

資料5-8 関係性のある学び



<留意点>

- 教師が、既習内容の結び付きや児童生徒の実態を把握しておく。
- 児童生徒が、既習内容をすぐに引き出せるような手立てを考えておく。
- 知識及び技能の系統的な結び付きを意識して、年間指導計画や単元の指導計画を作成する。
- 児童生徒が経験したことがなかったり、知識及び技能の定着が図られていなかったりする場合は、事前に試行の場や知識及び技能を振り返る場を設定する。

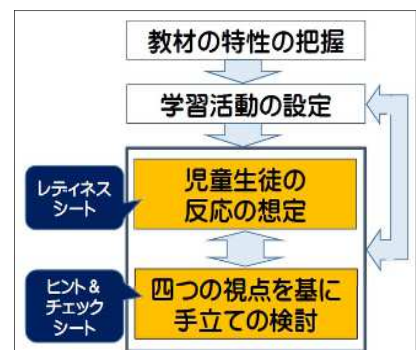
3 理科における学びの価値を見いだす授業デザイン

(1) 学びの価値を見いだす授業デザインの基本的な考え方

理科の学習では、探究の過程を通して自然事象についての問題を科学的に解決する資質・能力を育成する。よって、教師は、探究の過程の中で既習内容や生活経験と関係付け、試行錯誤しながら繰り返し自然事象に関わり、追究していくことができるような授業をデザインしていく必要がある。

そのためには、教材の特性を踏まえた上で、探究する学習活動を設定する。その際、児童生徒が自然事象をどのような既習内容や経験と関係付けるか、関係付ける知識や技能、体験があるのかも含めて児童生徒の反応を想定しておくことが必要である。そして、児童生徒の実態に応じて、四つの視点を基に手立てを検討す

資料5-9 授業デザインの手順



ることで学びの価値を見いだす授業デザインにつなげたいと考える（資料5-9）。そこで、以下の(2)で、児童生徒の反応を想定するための「探究活動のレディネスシート」（以下「レディネスシート」）と四つの視点を基に手立てを検討するための「授業デザインのヒント&チェックシート」（以下「ヒント&チェックシート」）の二つのシートを紹介する。

(2) 二つのシートについて

ア 「レディネスシート」

児童生徒は、探究する活動を自ら行う中で、自然事象を既習内容や生活経験と関係付けながら進めていく。よって、教師は、探究する活動において児童生徒がどのような学習内容、生活経験と関係付けるのか想定し、既習内容の定着の具合、生活経験の有無を把握しておく必要がある。そうすることで、以下のようなメリットが考えられる。

- 本時の内容に関わる既習内容、生活経験との関連が明確となる。
- 学習活動における児童生徒の反応が明確となり、考えさせる場面と教える場面が明確となる。
- 重点化する学習過程が明確となり、問題解決（探究）の達成感を獲得させられる。

そこで、探究の過程において児童生徒が関係付けると考えられる既習内容や概念、生活経験を資料5-10のような「レディネスシート」に記入（下線部分：小学校第4学年 単元「水のすがた」と温度」の例示）することで、どのような教師の手立てが必要か検討するための材料とする。

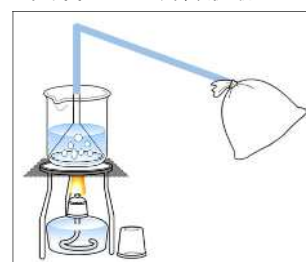
ここでは、「沸騰したときに出てくる泡は何であるか。」を探究の過程を通して解決していく例で説明する。「①事象と出会い、学習課題設定」の過程では、水が沸騰している事象に出会ったとき、日常生活で沸騰した水から泡が出てくる現象を何度も見た経験があれば、その現象から気付きや疑問は生まれにくい。その場合、「この泡って、何だろう。」と教師が問い掛けたり、沸騰して出ている泡とエアープンプから出ている泡と比較させるなどの手立てをとつ

資料5-10 「レディネスシート」

学習過程	学習活動	既習内容 経験、概念	未習内容 未経験、誤概念
①事象との出会い 学習課題設定	水を熱した時に出てくるあわは何だろう。	沸騰させると泡が出る。	
②予想や仮説	予想し、発表する。	水蒸気 （沸騰すると水が減） （自然蒸発→空気中）	空気 （ジャグジー） （エアポンプ）
③検証計画	実験方法を考え、発表する。		泡を集める。
④結果の予想	予想したときの結果を考え、発表する。	空気…膨らむ。 水蒸気…凝り水。	
⑤観察、実験	観察、実験を行う。	加熱器具の使い方。	袋が熱くなる。
⑥結果の整理・考察	結果を図で表し、話し合う。	（結果） 袋が膨らむ→凝む 水がたまる	水の状態変化と体積 液体→気体（大きく） 気体→液体（小さく）
⑦結論（まとめ）	あわは、空気ではなくて水蒸気だ。		

たりすることで、児童生徒は気付きを見だし、自ら学習課題を設定することとなる。「②予想や仮説」の過程では、第4学年の自然蒸発で学習した内容や生活経験を根拠に、水蒸気、空気といった対立する予想や仮説を発想することができれば、児童の課題解決に対する意欲も高まると考えられる。「③検証計画」の過程では、児童がこの学習活動に関する既習内容や経験、概念をもっていないため、沸騰する泡を集める方法を発想することが難しいと想定される。その場合、教師から資料5-11のような観察、実験を提示し、「④結果の予想」の過程で結果の予想を考えさせた上で、見通しをもって観察、実験に臨ませる必要がある。「⑤観察、実験」の過程では、加熱器具の扱いは学習しているものの袋が熱くなっていることまで予知できないと想定されるので、安全指導を行う。「⑥結果の整理、考察」の過程では、水が液体から気体に状態変化するときに体積が増え、気体から液体に状態変化するときに体積が減ることを学習していないことを踏まえた上で、観察、実験結果からいえることを考えさせる手立てを行い「⑦結論（まとめ）」の過程へつなげる必要がある。

資料5-11 観察、実験の提示



イ 「ヒント&チェックシート」

学びの価値を見いだす授業をデザインするために、具体的な手立てを考える際のヒントを四つの視点で整理した（資料5-12）。

(ア) 活用のメリット

- 具体的な手立てを幅広い視点で考えることができ、児童生徒が「理科の見方・考え方」を働かせ、科学的に課題を解決できる。
- 単元を通して、授業に取り入れたヒントをチェックしていくことで、教師自身の指導の在り方を振り返るきっかけとなる。
- 研究授業や授業研究等で、どの視点の手立てが見られたか、視点を明らかにして協議することができる。

(イ) 活用の方法

- ① 新単元に入る前に、毎時間の授業で主にどのヒントを使うか計画する。
 - ② 授業前にどのヒントを使うか確認し、再度その項目に基づいた具体的な手立てを立案する。
 - ③ 授業後に以下の視点で授業を振り返る。
 - ・ 計画した手立てを実際に使えたか。
 - ・ 使った手立ては適切であったか。
 - ・ 計画外で使った手立てはなかったか。
 - ④ ③を基に、次時の授業計画を立案する。
 - ⑤ 単元終了後、ヒントをどの程度使ったか集計し、以下の視点で単元を振り返る。
 - ・ ヒントの偏りはなかったか。
 - ・ この単元の特徴となるヒントはなかったか。
- ※ あるヒントを使った回数が多い場合、その単元の特徴となっている可能性がある。

なお、立案した手立てが「ヒント&チェックシート」のヒントの項目に当てはまらない場合は、項目を追加するなどして、自校化してほしい。

資料5-12 「ヒント&チェックシート」(例)

授業デザインのヒント		時数	
		1	2
ア 必 要 性	【 自然事象を提示し、気付きを生まれさせるヒント 】		
	A	既習内容や生活経験と自然事象との関係に着目させる。	
	B	同時に複数の事物・現象を比較させる。	
	C	時間的な前後で比較させる。	
イ 自 律 性	【 自己選択し、見通しをもって観察、実験などを行わせるヒント 】		
	A	課題を解決するための観察、実験などに必要な操作やまとめ方の技能などを身に付けさせる。	
	B	根拠を基に、課題の予想や仮説を考えさせる。	
	C	課題を解決するための観察、実験などの方法を考えさせる。	
ウ 有 用 性	【 学んだことを日常生活や社会に橋渡しさせるヒント 】		
	A	得られた知識及び技能を日常生活や社会で見られる自然事象に反映させる。	
	B	科学を学ぶ楽しさや有用性を実感しながら、自らの力で知識を体系化させる。	
	C	「理科の見方・考え方」を日常生活などにおける疑問の発見や解決の場面で働かせるようにする。	
エ 関 係 性	【 既習内容や生活経験、観察、実験の結果などを結び付けさせるヒント 】		
	A	既習内容や生活経験について想起させ、結び付けさせる。	
	B	他の人の知識や考えを確認させ、自分の知識や考えと比較させる。	
	C	観察、実験の結果と自分の予想や仮説との関係について考えさせる。	
	D	変化とそれに関わる要因について考え、結び付けさせる。	
	E	異なる観察、実験などから得た結果を比較し、それを基に考察させる。	
	F	各班の観察、実験などから得た結果を比較し、それを基に考察させる。	
	G	得られた知識及び技能を基に、次の課題を発見させたり、新たな視点で自然の事物・現象を把握させたりする。	

◎ 授業で特に重視 ○ 授業で実施

4 小学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

第3学年から理科の学習が始まり、観察、実験を経験することになるので、それを楽しみにしている児童が多い。しかし、何を解決するためにやっているのか十分に見通しをもたず、途中で目的を見失ったり、観察、実験で得られた結果と結論を結び付けられなかったりして十分に考察できずに学習を終えてしまう児童がいる。また、予想された観察、実験の結果が得られなかったときに、その原因についてグループで話し合ってから再検討したり、修正したりしようとするグループも少ない。

そこで、未来の創り手に求められる資質・能力を育成するために、「学びに向かう力」の涵養に特に目を向け、「レディネスシート」と「ヒント&チェックシート」を活用した授業デザインの有効性を検証することにした。

(2) 研究の実践

ア 授業で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
○ 物から音が出たり伝わったりするとき、物は震えていること。また、音の大きさが変わるとき、物の震え方が変わることの理解 ○ 音の性質について、器具や機器を正しく扱いながら調べ、それらの過程や得られた結果を分かりやすく記録する技能	○ 音の性質について、差異点や共通点を基に、問題を見だし、表現する力 ○ 音の性質について、実験などを行い、得られた事実を基に考察し、表現する力	○ 音の性質についての事物・現象に進んで関わり、他者と関わりながら問題解決しようとする態度 ○ 音の性質について学んだことを学習や生活に生かそうとする態度

イ 授業デザインに当たって

(ア) 探究活動のレディネス

学習過程	学習活動	既習内容、経験、概念	○ 未習内容、未経験 □ 誤概念
①事象との出会い、学習問題設定	学習問題「音は、どのように伝わるのだろうか。」	・ 物が震えて音が出る。 ・ 物の震えを止めると音が出ない。	○ 糸電話 ○ 物が震えて音が伝わる。
②予想や仮説	予想や仮説を考え、発表する。	・ 音が出るものは震えている。	○ 物の震えで音が伝わる。 □ 糸の中を音が通る。
③検証計画	観察・実験方法を考え、発表する。	・ 指で糸に触れる。 ・ 糸をつまんだり、放したりする。 ・ 糸に物を付ける。	○ 糸をたるませたときと、張ったときの聞こえ方を比べる。
④結果の予想	観察、実験の結果を予想し、発表する。	・ 糸に触れると震える。 ・ 糸をつまむと音が止まる。	○ たるむと糸が震えない。 □ 糸がたるんでも聞こえる。
⑤観察、実験	観察、実験を行う。		○ 物を強くたたきすぎない。
⑥結果の整理・考察	結果を表で表し、話し合う。	・ 触れる→震える。 ・ つまむ→聞こえない。 ・ たるむ→聞こえない。	○ 糸がたるむと糸が震えない。
⑦結論（まとめ）	まとめ「糸がふるえることで、音は伝わる。」		

(イ) 使用する授業デザインのヒント

視点	授業デザインのヒント
ア 必要性	B 同時に複数の事物・現象を比較させる。
イ 自律性	B 根拠を基に、問題の予想や仮説を考えさせる。 D 予想が正しかったときの観察、実験などの結果を考えさせる。
エ 関係性	F 各班の観察、実験などから得た結果を比較し、それを基に考察させる。

ウ 授業の実際

過程	時間	学習活動・内容	指導上の留意点
導入	10分	1 糸の片方に紙コップ、もう片方にスプーンを付け、スプーンを棒でたたいたとき、音がよく伝わる体験をする。 ・ 糸があるとよく聞こえた。	ア 必要性－B 糸が付いてないスプーンと糸が付いたスプーンをたたいて、音の大きさを比べる体験をさせることで、問題の焦点化を図る。
		2 学習問題を設定する。 音は、どのように伝わるのだろうか。	 
展開	25分	3 予想や仮説を考え話し合う。 ・ 糸が震えるから。 ・ 糸の中を音が通るから。	イ 自律性－B 音はどのように伝わっているのか、予想や仮説を絵や文で書かせ、観察や実験の視点をもたせる。
		4 実験方法について話し合う。 ・ 糸を触って、震えているかを調べる。 ・ 糸をつまみ、音が伝わるか調べる。	
展開	25分	5 観察、実験の結果を予想し、話し合う。 ・ 糸を触ったら、震えを感じるのではないかな。 ・ 糸が震えていれば、つまむと音が止まると思う。 ・ 糸がたるんでも、糸の中を音が通るから聞こえると思う。	イ 自律性－D 糸の中を音が通ると予想した児童に対して、糸がたるんでいたときの音の大きさを予想させることで、観察、実験の見通しをもたせる。
		6 観察の視点をもって実験する。	 
終末	10分	7 観察、実験の結果を書き込み、学習問題について話し合う。 ・ 糸を触ったら、震えているように感じた。 ・ つまむと聞こえなくなったのは、糸の震えが止まったからだ。 ・ 糸をたるませると聞こえなかったから、音が糸の中を通るわけではない。	エ 関係性－F 結果を絵や文で整理し、結果や傾向が分かるようにし、糸があるとなぜ音が大きく聞こえるのか説明できるようにする。
		8 話し合ったことについてまとめる。 糸がふるえることで、音は伝わる。 9 次時の予告をする。	  エ 関係性－F 結果を絵や文で整理し、結果や傾向が分かるようにし、糸があるとなぜ音が大きく聞こえるのか説明できるようにする。

5 中学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

諸調査の結果から、本県の生徒は、理科の観察、実験に興味をもち、意欲的に取り組んでいると考えられる。しかし、そこから得られた知識などを既習内容や生活経験と関係付けて理解したり、活用したりすることが課題となっている。本校の生徒の実態も同様であり、観察、実験の結果をグラフなどに表すことや、理科の見方・考え方を日常生活の疑問に関係付けたり、活用したりすること、学習内容から新たな疑問を見付けるといふことには、主体的に取り組んでいない姿がよく見られた。

そこで、未来の創り手に求められる資質・能力を育成するために、「学びに向かう力」の涵養に特に目を向け、「レディネスシート」や「ヒント&チェックシート」を活用した授業デザインの有効性を検証することにした。

(2) 研究の実際

ア 単元全体で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
○ 気象観測や天気の変化に関する事物・現象についての理解 ○ 気象観測や天気の変化に関する事物・現象について科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する基本的な技能	○ 気象観測と天気の変化に関する事物・現象に関わり、科学的に探究する活動を通して、規則性を見いだしたり、課題を解決したりする力	○ 気象観測と天気の変化に関する事物・現象について進んで関わり、観察、実験などを行い、科学的に探究しようとする態度

イ 授業デザインに当たって（対象：第1章第6時：検証授業）

(ア) 探究活動のレディネス

学習過程	学習活動	既習内容、経験、概念	○ 未習内容、未経験 □ 誤概念
①事象との出会い、学習課題設定	学習課題「水蒸気が水滴に変化するの、どのようなときだろうか。」	・ 蒸発や結露 ・ 状態変化	○ 露点、湿度 □ 雲や湯気、霧は水蒸気
②予想や仮説	予想や仮説を考え、発表する。	・ 気体を冷やすと液体へ変化	□ 露点は常に一定
③検証計画	観察、実験方法を考え、発表する。	・ 凝結現象の再現 ・ 金属の熱伝導性の利用	
④結果の予想	観察、実験の結果を予想し、発表する。		○ ステンレスコップの取扱い
⑤観察、実験	観察、実験を行う。	・ 温度計の使い方	
⑥結果の整理・考察	結果を共有し、話し合う。他の条件での結果を基に考察する。		
⑦結論（まとめ）	まとめ「水蒸気は露点に達すると水滴に変化する。」		○ 結露や霧の仕組み

(イ) 使用する授業デザインのヒント

視点	授業デザインのヒント
ア 必要性	A 既習内容や生活経験を想起させ、自然事象との関係に着目させる。
イ 自律性	C 課題を解決するための観察、実験などの方法を考えさせる。
ウ 有用性	A 得られた知識及び技能を日常生活や社会で見られる自然事象に反映させる。
エ 関係性	E 異なる観察、実験などから得た結果を比較し、それを基に考察させる。

ウ 単元について

(ア) 単元計画についての考え方

- ・ 郷土でみられる「川内川あらし」を扱うことで、郷土の自然事象を身近に感じられるようにするとともに、単元の最初に必要性を、単元の最後に有用性を感じられるようにした。
- ・ 学習内容を「川内川あらし」で起こる現象と関係付けられる、生徒の実態と学習内容、学習内容同士についての関係性を意識して計画を立てた。

(イ) 単元の実際

a 第1章「気象観測と雲のでき方」

※ 気象観測を行うことを通して、様々な気象現象の中に規則性があることに気付かせた。観測方法や記録の仕方を身に付けさせ、気象要素の変化の関係を見いださせた。露点の測定実験などを行い、水蒸気の凝結現象について理解させ、減圧実験などにより水蒸気が水滴に変化することを体験から捉えさせた。

○ 第6時（検証授業）

学習活動・内容	指導上の留意点
水蒸気の変化 ・ 空気中の水蒸気を取り出す方法を考え、実験を行う。 ・ 水蒸気が水滴に変化する時の条件について考える。 	ア 必要性－A ○ 既習内容や生活経験から、気象条件と郷土の自然事象「川内川あらし」との関係に着目させる。 イ 自律性－C ○ 水蒸気を水滴にして取り出す方法について既習内容を基に実験企画をさせる。 エ 関係性－E ○ 湿度による「露点」の違いに気付かせる。 ウ 有用性－A ○ 窓の結露が起こるときの外気温と室温について考えさせる。  

b 第2章「前線とそのまわりの天気の変化」

※ 前線通過の際の気象要素の変化などの観測結果に基づいて、前線の通過を寒気と暖気の動きに関係付けて捉えさせた。また、前線の構造について、観測結果や実際の降雨の様子、気温や風向の変化などの経験に関係付けて捉えさせ、いくつかの種類があることを理解させた。授業デザインのヒント：アーC、イーB、エーDなどを基に授業をデザインした。

c 第3章「大気の動きと日本の天気」

※ 日本の天気の特徴を、天気図や気象衛星の画像の変化から、日本周辺の気団や偏西風と関係付けて考察させた。また、日本の天気は大陸や海洋の影響を受けていることを理解させるとともに、太陽のエネルギーが大気を動かしていることも理解させた。さらに、天気を予測する方法や災害による被害を少なくする方法を考察させた。

○ 第9時（単元の最終授業）

学習活動・内容	指導上の留意点
郷土の気象現象 ・ 既習内容（海陸風、日本の天気の特徴など）を基に「川内川あらしのメカニズム」についてまとめ、発表する。	ウ 有用性－A ○ 学習した雲や霧の発生のしくみを身近な郷土の自然事象に反映させる。 ウ 有用性－C ○ 「川内川あらし」発生の仕組みについてまとめ、理科の見方・考え方をを用いて日常生活における疑問の解決につなげさせる。 

6 高等学校における研究実践例①

(1) 研究実践の目的

授業を行った総合学科3年環境緑地系列の12人の生徒は、授業に臨む姿勢が良好であり、問題演習に自ら取り組み、疑問があれば友人と協力しながら正解を導こうと努力する。観察、実験においても、役割分担をして協力しながら取り組んでいる。専門教科で実習等を行っていることが影響していると考えられる。一方で、考察する際に発言が少なくなる生徒もおり、科学的な思考や「理科の見方・考え方」を意識していない生徒も少なくない。そこで、未来の創り手に求められる資質・能力を育成するために、「学びに向かう力」の涵養に特に目を向け、「レディネスシート」や「ヒント&チェックシート」を活用した授業デザインの有効性を検証することにした。

(2) 研究の実際

ア 授業で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力, 判断力, 表現力等	学びに向かう力, 人間性等
☐ 注目する物体にはたらく力より、つり合いの式が立てられることの理解 ☐ アルキメデスの原理についての理解	☐ 浮力の大きさを決定する要素について、観察、実験の結果を基に考え、科学的に判断し、表現する力	☐ 観察、実験を粘り強く、繰り返し行い、アルキメデスの原理について理解し、日常生活との関連も含めて説明できるよう、意欲的に探究しようとする態度

イ 授業デザインに当たって

(ア) 探究活動のレディネス

学習過程	学習活動	既習内容, 経験, 概念	☐ 未習内容, 未経験 ☐ 誤概念
①事象との出会い, 学習課題設定	学習課題「浮力を決定する要素は何か。」	・ 水圧の定義	
②予想や仮説	予想し仮説を立てる。	・ 浮力を決定する要素には体積がある。	☐ 重さや形状に関係があるのではないかな。
③検証計画	実験方法を考え発表する。	・ ばねはかりによる浮力の測定方法	☐ 流体の密度が要素の一つである。
④結果の予想	予想したときの結果を考える。		☐ 重いほど浮力は大きいのではないかな。
⑤観察, 実験	観察, 実験を行う。		☐ 密度の異なる流体での浮力の測定
⑥結果の整理・考察	結果を整理し, 話し合う。	・ 浮力の大きさは, 体積に比例する。	☐ 浮力の大きさは流体の密度に比例する。
⑦結論 (まとめ)	まとめ「浮力を決定する要素は, 物体の体積と流体の密度である。」		☐ アルキメデスの原理

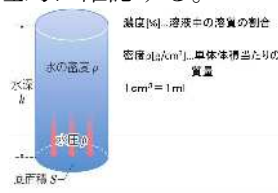
(イ) 使用する授業デザインのヒント

(13/14, 14/14)

視点	授業デザインのヒント
ア 必要性	A 既習内容や生活経験を想起させ、自然現象との関係に着目させる。
イ 自律性	B 根拠を基に、課題の予想や仮説を考えさせる。
ウ 有用性	B 科学を学ぶ楽しさや有用性を実感しながら、自らの力で知識を体系化させる。
	C 「理科の見方・考え方」を日常生活などにおける疑問の発見や解決の場面で働かせるようにする。
エ 関係性	B 他の人の知識や考えを確認させ、自分の知識や考えと比較させる。
	F 各班の観察、実験などから得た結果を比較し、それを基に考察させる。

ウ 授業の実際

(13/14)

過程	時間	学習活動・内容	指導上の留意点
導入	5分	1 既習内容の確認と前時の復習 中学校の学習内容を想起し、水圧について復習する。 2 課題設定 浮力の大きさは何（要素）によって決定するのだろうか。	○ 水圧は水の重さによって生じることを、既習内容を基に、論理的に確認する。 - 重さは、質量と重力加速度の積により決まる。 - 質量は、密度と体積の積により決まる。 
	30分	3 観察、実験及び予想 浮力の大きさを決定する要素を、観察、実験を通して予想する。 - 個人で立てた予想について、水に浮かぶ物体と沈む物体の観察により検証する。  - 異なる流体中での物体の様子を確認する。 	ア 必要性－A ○ 物体が水に浮くという事象についての生活経験や簡単な観察、実験を基に、浮力の大きさを決定する要素を予想させる。 ○ 個人で予想を立てさせる際、簡単な観察、実験をしながら、思考させる。  ○ 浮力の大きさと流体の関係について考察させる。 【流体に着目させるための手立て】 - 物体の運動状態の変化を確認させ、水と食塩水の違いについて思考させる。 - 空気中に浮いている風船を見せることで、液体以外の流体に気付かせる。
展開	15分	4 仮説 浮力の大きさを決定する要素は何か仮説を立てる。 	イー自律性B, ウー有用性C ○ 検証すべき要素を含んでおり、根拠を踏まえた仮説、科学的な仮説となるよう指導する。 (次時の検証計画へ続く。) ○ 沈める物体と沈めさせる流体の二つに着目させ、検証すべき要素をそれぞれ考えさせる。

(14/14)

過程	時間	学習活動・内容	指導上の留意点
展開	35分	1 検証計画 仮説を基にした検証計画を立てる。 ① 各班が、仮説を基に立てた検証計画を発表し、互いに確認し、助言をする。 ② 検証計画を改善・修正する。 2 検証実験 各班の検証計画に基づき実験を行う。ただし、適宜修正しながら行う。 	○ 実施可能な実験であるか、仮説を確かめるための内容が含まれているかなど、適宜助言する。 エー関係性B ○ 他班の検証計画と比較させ、自身の班の計画に反映させる。
終末	15分	3 結果の整理・考察・まとめ 検証実験の結果を基に、浮力を決定する要素についての考察を行う。そして、アルキメデスの原理を日常生活と関連してまとめる。	ウー有用性B, エー関係性F ○ 浮力を決定する要素を、既習内容や各班の観察、実験の結果と結び付けて、論理的に考察させる。そして、生徒自身の力で浮力に関する知識を体系化させる。

7 高等学校における研究実践②

(1) 研究実践の目的

3年生化学基礎選択者 23 人のクラスである。授業には落ち着いて取り組んでおり、問題演習などでも友人や教師に対して積極的に質問する。一方で「理科の見方・考え方」を働かせて思考することが苦手な生徒が多く、物質や現象を粒子レベルで考えることが難しい生徒もいる。そこで、未来の創り手に求められる資質・能力を育成するために、「学びに向かう力」の涵養に特に目を向け、「レディネスシート」や「ヒント&チェックシート」を活用した授業デザインの有効性を検証することにした。

(2) 研究の実際

ア 授業で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力, 判断力, 表現力等	学びに向かう力, 人間性等
○ 酸・塩基の定義の理解 ○ 中和反応の量的関係の理解 ○ 中和滴定を行うために必要な実験に関する基本的な技能 ○ 酸や塩基の濃度の求め方の理解	○ 酸・塩基の観察, 実験を通して, 性質を科学的に探究して考察し, 自身の考えを的確に表現する力	○ 酸と塩基や中和反応に関心をもち, それらを日常生活に関係付けて意欲的に探究しようとする態度

イ 授業デザインに当たって

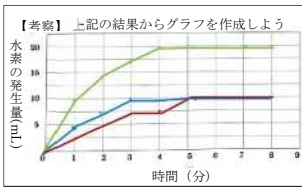
(ア) 探究活動のレディネス

学習過程	学習活動	既習内容, 経験, 概念	○ 未習内容, 未経験 □ 誤概念
①事象との出会い, 学習課題設定	学習課題「3種類の酸を金属と反応させ, 反応の違いからその特徴を考える。」	・ 酸の性質 ・ 酸の定義	○ 酸の価数 ○ 酸の強弱
②予想や仮説	予想し, 発表する。	・ 金属と酸の反応で水素が発生する。	○ 水素の発生量に差がある。 ○ 反応の激しさに差がある。
③検証計画	実験方法を確認する。	・ 器具の名称	
④結果の予想	予想したときの結果を考える。		□ 水素の発生量はどれも同じではないか。
⑤観察, 実験	観察, 実験を行う。	・ 器具の使い方	○ 二股試験管が熱くなる。
⑥結果の整理・考察	結果をグラフで表し, 話し合う。		○ 水素の発生量が異なる。
⑦結論(まとめ)	まとめ「酸には価数という考え方がある。」		○ 酸の価数 ○ 酸の強弱

(イ) 使用する授業デザインのヒント

視点	授業デザインのヒント
ア 必要性	B 同時に複数の事物・現象を比較させる。
イ 自律性	A 課題を解決するための観察, 実験などに必要な操作やまとめ方の技能などを身に付けさせる。
エ 関係性	D 変化とそれに関わる要因について考え, 結び付けさせる。

ウ 授業の実際 (3/12)

過程	主な学習活動	指導上の留意点
導入 5分	1 【前時の復習】 - 酸・塩基の性質と主な物質について確認する。 2 【課題設定】 3種類の酸と金属は、どのような反応をするだろうか。 - 本時の内容目標と授業の流れを把握する。 3 【予想】 - 実験結果を予想する。	1 酸性・塩基性の性質について復習させる。主な酸・塩基に関しては、化学式も示す。 2 塩酸、硫酸、酢酸をマグネシウムと反応させ、それぞれの酸の特徴について考えることを説明する。また、授業の流れも説明する。 エ 関係性－D 反応の激しさや発生する気体の種類や量などに着目させ、結果を予想させる。
展開 I 30分	4 【実験】 - 実験内容を確認し、理解する。 - 同じ濃度・体積の塩酸、硫酸、酢酸を過剰なマグネシウムリボンと反応させ、発生する気体の体積を時間ごとに測定する。 5 【考察】 - 実験データを生徒に発表させ確認する。 - 実験データから反応時間と発生する気体の量の関係について、反応する酸の種類ごとに折れ線グラフを作成する。 - 個人で考えた後、ペアで共有・確認をする。 - 実験の様子、結果、グラフから三つの酸の特徴について考察する。気付いたことをレポートに記入し、その理由について考え、発表する。  	ア 必要性－B 酸の性質と反応の違いを比較させる。 イ 自律性－A - 代表生徒にデータを読み取らせ、全員が記録を取るようにする。 - グラフを作成させることで思考を促す。 ア 必要性－B 教師が作成したグラフをスクリーンに映し、生徒自身が作成したものと比較させる。 - 個人で考える時間を十分にとる。 エ 関係性－D - 生徒同士で確認させる。 - 水素の発生量に着目させる。 - 反応の激しさに関する気付きについては、酸の強弱に関係し、このことについては次時に説明をすることを伝える。 - 数人を指名し、考察を発表させる。他者の考えを朱書きでまとめさせる。
展開 II 10分	6 【講義】 酸の価数についての説明を聞く。 	エ 関係性－D 中和反応と価数の関係を考えさせ、価数への理解を深めさせる。
まとめ 5分	7 【まとめと次時への課題の提示】 - 自己評価を行い、本時を振り返る。 - 次時の説明を聞く。	- 自己評価をさせて本時を振り返り、理解を深めさせる。 - 酸には強弱があることを再度説明し、次回は塩酸と酢酸の反応の違いについて、考えさせることを説明する。

第6章 外国語活動・外国語科における研究

1 外国語活動・外国語科の授業で目指す児童生徒像及び将来像

外国語活動・外国語科については、平成30年度、平成31年度に例示された新学習指導要領では小学校から高等学校まで共通して、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、コミュニケーションを図る資質・能力を養う」教科とされている。

そこで、上記の資質・能力の育成のために、小学校から高等学校までの授業において、児童生徒が楽しみながら外国語によるコミュニケーションに積極的に取り組むことと、コミュニケーションを図る相手に、自分が言いたいことを伝えられるよう配慮しながら言語活動に取り組むことの2点が必要だと考え、目指す児童生徒像を「他者に配慮しながら自ら進んで外国語でコミュニケーションを楽しむ児童生徒」と設定した（資料6-1）。

このような児童生徒を育成するために、授業においては、外国語を積極的に使う機会を増やしたい。そのため、目指す授業像を「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、外国語で理解したり表現したり伝え合ったりする力の育成を目指した授業」とし、四つの視点ごとに資料6-2のように手立てを整理した。

資料6-1 外国語活動・外国語科で目指す児童生徒像

他者に配慮しながら自ら進んで外国語でコミュニケーションを楽しむ児童生徒			
必要性 外国語を使って、コミュニケーションを取りたいという意欲	自律性 目標の達成に向けて、言語活動に粘り強く取り組む姿勢	関係性 他者を尊重し、相互理解しながらコミュニケーションを行い、互いに高め合う姿勢	有用性 外国語によるコミュニケーションの価値に気づき、外国語を学ぶ意義を感じる姿勢

資料6-2 外国語活動・外国語科で目指す授業像

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、外国語で理解したり表現したり伝え合ったりする力の育成を目指した授業			
必要性 コミュニケーションの目的や場面・状況を理解し、外国語を使う気持ちを高める手立て	自律性 目標の達成に向けて、言語活動に取り組む方略を自ら具体的に考えさせる手立て	関係性 他者の意見を参考にしたり、新出・既習事項を関連させたりして、学習を充実させる手立て	有用性 自分の思いや考えを外に発信する場面・状況を設定し、成功体験をさせる手立て

2 外国語活動・外国語科における児童生徒に「学びに向かう力」をより涵養するための視点

(1) 四つの視点の基本的な考え方

平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況（国立教育政策研究所，2020）で、鹿児島県公立中学校3年生約13,300人の英語に関する調査結果が示されている。まず約85%の生徒が「英語の勉強は大切だ」と考えている。しかし、「英語の授業はよく分かる」と思っている生徒は約64%であり、「英語の勉強は好き」と考えている生徒は約54%と半数強に過ぎない。つまり、英語を学ぶ意義は感じていても、授業が分からず、また学ぶことも好きではない生徒が多いことが分かる。児童生徒が英語を好きになると「学びに向かう力」がより涵養されることを考えると、大きな問題である。

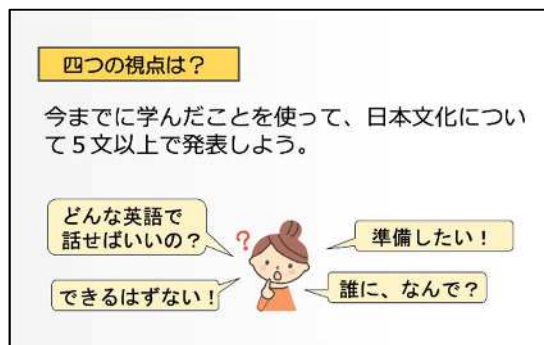
児童生徒がいきいきと学んでいる授業を参観すると、四つの視点と関連のある共通点があることに気付く。そのような授業では、言語活動において、児童生徒は①自然と外国語を使うことに興味を抱き、外国語で伝えたくなくなったり（必要性）、②どうすればうまく外国語でコミュニケーションを図るか考えたり、計画を立てたり（自律性）、③既に学んだことと新しく学んでいることを結び付けながら学んだり、他者の意見を参考にしたり、互いに助け合いながら学んでいる（関係性）。そして、④学習後に振り返って、外国語が伝わる喜びや、外国語を使う楽しさを実感して（有用性）、「学びに向かう力」を高めている。この四つの視点を取り入れることで、授業において児童生徒のいきいきとした学びが生まれ、英語を好きになることにつながっていき、最終的には「学びに向かう力」

の涵養へ結び付くと考えられる。

なお、外国語活動・外国語科の小学校から高等学校までの学習指導要領の目標には、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ」、「言語活動を通して」、「コミュニケーションを図る資質・能力を育成する」という文言が共通して含まれている。外国語学習における「学びに向かう力」を涵養するためには、本研究の四つの視点をいかに言語活動に組み込むかということが重要となる。

資料 6-3 は、「日本文化の紹介」に関して中学校教科書に記載されている指示と児童生徒の反応の図である。このまま生徒に学習に取り組ませてもよいが、ひと工夫して言語活動に取り組ませたい。具体的には、以下に述べる。

資料 6-3 教科書の指示と児童生徒の反応



(2) 必要性 コミュニケーションの目的や場面・状況を理解し、外国語を使う気持ちを高める手立て

外国語を使ったコミュニケーションに対する動機を高めると、児童生徒は積極的に言語活動に取り組む。このような手立ては単元や授業の導入の際などに取り入れると効果的である。具体的には、言語活動が「活動の目的が明確で、実際に役に立つ。」、「難易度が学習者に合っており、やりがいがある。」などの条件を満たすとよい (Dornyei 他, 1998)。

(1)に示した資料 6-3 の教科書の指示「今までに学んだことを使って、日本文化について5文以上で発表しよう。」を必要性の視点からみると、コミュニケーションの目的や場面、状況が明確ではないことが分かる。改善案としては、例えば「あなたは台湾の学校とオンラインで交流します。台湾の生徒は、日本の文化について関心を示しています。台湾の生徒に対して日本文化について発表しよう。」などが考えられる。そうすれば、コミュニケーション上、重要となる話す対象や相手、英語を使う必然性がより明確になり、生徒も自然と学習に取り組みやすくなる。

資料 6-4, 6-5 は、「好きな色を聞く」という小学校外国語科の単元の導入場面である。資料 6-4 は、活動の目的がなく、児童が言語活動に積極的に取り組む気持ちになりにくい。一方、資料 6-5 では、活動の目的に必要性が含まれるため児童が ALT に質問したくなり、言語活動に積極的に取り組もうとする。このように必要性の視点からの手立てを導入することにより、児童生徒の外国語を使いたい気持ちを高めて、より積極的に外国語でコミュニケーションを図る授業ができる。

資料 6-4 必要性の視点に欠く導入の例



資料 6-5 必要性の視点を取り入れた導入の例



(3) 自律性 目標の達成に向けて、言語活動に取り組む方略を自ら具体的に考えさせる手立て

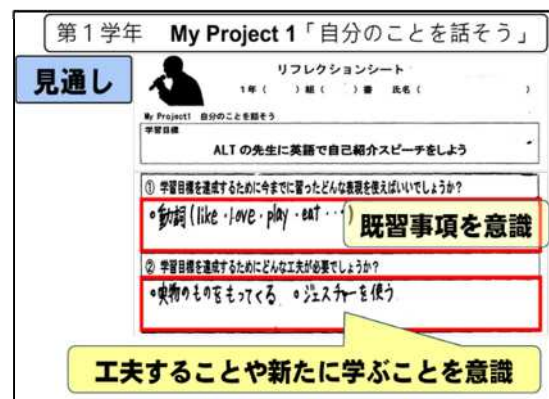
授業の目標の達成に向けて、児童生徒が自ら計画を立てたり、手順を考えたりするなどして、見通しをもって、言語活動を行うと、粘り強く学びに取り組む。授業では、児童生徒が自分で学習計画を立てたり、学習の進度に沿って進み具合を確認したりすることが考えられる。自律性とは、自ら学習について選択したり、自己調整したりすることを意味しており、楽しさ・やりがいにつながる重要な項目だと言える（デシ&フラスト，1999）。

資料 6-3 の教科書の指示「今までに学んだことを使って、日本文化について 5 文以上で発表しよう。」を自律性の観点から、発表の日程を明確にするという手立てを講じることで、生徒が見通しをもって計画的に活動に取り組むことができる。例えば「2 週間後に、今までに学んだことを使って、日本文化について 5 文以上で発表しよう。」とすれば、生徒は 2 週間後の発表に向けて計画し、途中で自己調整して粘り強く学びに向かう。つまり、生徒が学習を「自分事」として捉え、学習に対するやる気を出しやすくなる。資料 6-6 は、小学校で児童が目標や自らの進捗状況を確認しながら、活動に取り組ませた例である。資料 6-7 は、中学校で生徒が単元の導入の際、既習事項を振り返りつつ、新出事項をどう既習事項と結び付けて学ぶべきか考える機会を与えた手立ての例である。児童生徒が既習の知識や既に習得した技能を活用して、目標達成に向けて粘り強く、自律的に学ぶ手助けとなる。

資料 6-6 自律性の視点がある手立て①



資料 6-7 自律性の視点がある手立て②



なお、高等学校段階では学ぶ内容が広範囲で深くなるため、言語活動を充実するために授業内外を通して外国語学習に取り組む必要がある。例えば、プレゼンテーションやディベート、ディスカッションなどを上手に行うには、生徒は授業外でも時間をかけて調べたり、練習したりすることが多い。そのため、高等学校段階では、授業での言語活動を充実させるための努力を授業外でも続けようとする自律性を促すことが、更に必要となることに留意したい。

(4) 関係性 他者の意見を参考にしたり、新出・既習事項を関連させたりして、学習を充実させる手立て

外国語を使ったコミュニケーション活動に積極的に取り組む児童生徒を育成する際に重要なのは、今まで習ったことと新しく習うことの関連付けである。外国語を学ぶ際には、習得した知識や技能を、実際にコミュニケーションの目的や場面、状況を設定した中で使用して試みる必要がある。言い換えれば、それまでに習ったことと新しく学ぶことを関連付けたり比較したりしながら外国語によるコミュニケーション活動を行えば、新出・既出事項の理解が深まったり、外国語に関する見方・考え方を働かせるようになっていたりする機会を多く得ることにつながる。同時に、既習事項は比

較的うまく扱えることが多いので、慣れ親しんだ既習事項と併せて新出事項を扱うよう工夫すれば、児童生徒ができた実感をもちやすい。

資料 6-3 の教科書の指示にある「今までに学んだことを使って、日本文化について 5 文以上で発表しよう。」については、関係性の視点から、「今までに学んだこと」を明確化すると、生徒が更に活動に取り組みやすくなる。例えば中学校で現在完了形を学ぶ単元であれば、「自分の経験を交えながら、日本文化について 5 文以上で発表しよう。」と指示することにより、自分の経験については過去形や現在完了形を用いるが、日本文化の説明については現在形を用いることを学び、新出事項と既習事項を比較・対照する機会とすることができる。

また、学習を充実させるために、他者と協働した学びも考慮に入れたい。資料 6-8 は中学校や高等学校で協働して行うタスク活動の図である。例えば、「自分の住んでいるところをグループで外国人に紹介しよう。」という単元のタスク活動では、生徒は社会科で学んだ歴史や地理の知識を用いて、過去から現在までの歴史や、住んでいる地域と外国人の出身国の共通点や相違点について説明できる。また生徒が実際に外国語を使う中で、新出事項と既習事項を比較・対照する機会を得る。具体的には、現在形や過去形、現在完了形、比較級などの文法事項について理解を深めると同時に、相手と相互理解するために自分が抱く考えや思いをどのように外国語で表現すべきか、他の人の発言から学ぶ機会をも得ることができる。

このように、関係性を考慮しつつ言語活動を設定することで、文法等の言語の働きについての理解を深めたり、実際に使う経験を得たりするとともに、外国語を用いてコミュニケーションをしたいと感じたり（必要性）、自分の思いや考えを伝えられた時の嬉しさを感じたり（有用性）することができる。関係性の視点をもって言語活動を行うことは、外国語学習にとって大事なことであると言える。

資料 6-8 協働して行うタスク活動



(5) 有用性 自分の思いや考えを外に発信する場面・状況を設定し、成功体験をさせる手立て

児童生徒が言語活動の中で自分の思いや考えを発信する場面で、単元での学習を振り返って自己の成長を実感し、他者からの良い評価を得れば、自信を深めて、学習意欲を高めることができる。言い換えれば、成功体験をすることができれば、児童生徒が外国語によるコミュニケーションの価値に気付くとともに、その楽しさを感じ、外国語を学ぶ意義を感じて「学びに向かう力」が涵養されると考えられる。

資料 6-3 の教科書の指示にある「今までに学んだことを使って、日本文化について 5 文以上で発表しよう。」を有用性の視点から、発表の場面や状況を具体化すると、生徒が有用性を感じやすくなる。必要性の項目で述べたように「日本に関心がある台湾の児童生徒に、自分の経験を交えながら、日本文化について 5 文以上で発表しよう。」を実現すれば、実際に台湾の児童生徒に英語を用いてコミュニケーションを図る場면을体験し、相手が頷いたり笑ったりしてくれることで、自分の英語が通用したという実感を得て、有用性を感じる機会が生まれる。

資料 6-9 は、有用性に関連した、大学等のミニットペーパーと呼ばれる実践を、高等学校用に作り直した授業の振り返りシートの例である。生徒は授業のねらいを自ら書き込んだ上で、達成度の自己評価を 5 段階で行い、授業のどの場面が英語力の向上に関係していたかを振り返っている。生徒はこの授業のリスニング活動を通して、自己紹介のやり方が分かったことを書いている。このよ

うに生徒ができるようになったことを実感させることによって、次回以降の授業でも、リスニングに熱心に生徒が取り組む態度が期待できる。また、小学校や中学校でも、振り返りシートに「できるようになったこと」、「工夫したこと」を記入する例も多い。

また外国語活動・外国語科では、自分の思いや考えを発信する場面・状況を設定すれば、児童生徒は外国語を学ぶことの有用性を感じることに繋がりがやすく、「学びに向かう力」を涵養する機会の一つとなる。例えば、教科書や新聞などで環境等の社会的話題について学ぶ単位では、資料 6-10 のように内容の学習後に、その話題に関する自分の思いや考えを他者に発信し、教室の内外からフィードバックを得る場面を設定するなどの手立てを取ることができる。この手立てにより、児童生徒の、外国語で表現した思いや考えが通じる体験や、内容について様々な人々から評価を得ることで自己効力感を高め、英語を学ぶ有用性を実感する機会へとつながる。特に外国語学習については、ICT 機器を使えば、外国や国内の遠隔地の学校の児童生徒とつながったり、時間を選ばずに ALT に動画で伝えることができたりして、実際にコミュニケーションの手段として外国語を使う楽しさや評価を得る機会となりやすい。外国語で伝わったという自己効力感や楽しさを感じやすくなる手段として、ICT 機器を活用した、外国語を用いる目的や場面、状況のある言語活動を、積極的に授業に導入したい。

資料 6-9 高校の振り返りシートの例

授業振り返りシート

() 年 () 組 () 番 氏名 ()

① 今日の授業はどのくらい理解できましたか (5 が最高で、1 が最低。以下同じ)。
(5) - 4 - 3 - 2 - 1)

② 今日の授業のねらいは、(英語で自己紹介する) でした。どの程度達成できましたか。
(5 - 4) - 3 - 2 - 1)

③ 上記②の結果には、授業中のどの部分の自分の学びが関係していたと思いますか。
リスニング活動
例) Word List で小テスト、文法演習、教師によるモデル演習、リスニング活動 など

④ 今日の授業において、重要だと思った点や印象に残った点を簡単にまとめてください。
基本的な自己紹介をしっかりと学べた。
例) 語彙と文法の理解、英語での表現活動、リスニング活動、本文を読んで学んだ など

資料 6-10 有用性の視点がある手立て



3 外国語活動・外国語科における学びの価値を見いだす授業デザイン

(1) 学びの価値を見いだす授業デザインの基本的な考え方

外国語活動・外国語科の学習指導要領では、言語活動が重視されている。外国語では、授業デザイン＝言語活動のデザインとして考え、四つの視点を取り入れた言語活動の手立てを授業に設定することが大事である。まず、①必要性については、目的や場面、状況等を明確に設定した言語活動をデザインすることが大事である。②自律性については、計画を立て自己調整できるような手立て

資料 6-11 四つの視点を取り入れた言語活動

四つの視点を取り入れる。

今までに学んだことを使って、日本文化について 5 文以上で発表しよう。

↓ + 目的や場面、状況

あなたは、夏休みの海外語学研修で英語学校に通っています。クラスメートたちは、日本の中学生の生活について関心を示しています。そこであなたは、日本の学校の文化祭について話してあげることになりました。文化祭がどのような行事なのか説明してください。準備時間は 2 分、話す時間は 1 分です。

資料 6-12 四つの視点を用いた分析

日本文化の紹介

必要性	なぜ、この活動をするのかな？ ・台湾の生徒との交流だ！
自律性	いつまでに、何をしよう？ ・2週間後に向けて、計画資料！
関係性	これまでに習った、何をえばいいかな？ ・説明は現在形で、経験は現在完了形で！
有用性	うまくできたかな？ 通じた！？ ・向こうの生徒が、聞いてくれた！

が有効となる。また、③関係性については、既習事項と新出事項を組み合わせることで学ぶ機会を与えることがよいことを述べた。さらに、④有用性については、学んだことを体験できる場面を提供することで、児童生徒は外国語でコミュニケーションができることの嬉しさや学びの価値を感じ、更に学びたいことを説明した。

資料 6-11 は「今までに学んだことを使って、日本文化について 5 文以上で発表しよう。」という言語活動について、資料 6-12 にあるように四つの視点から分析し、改善した言語活動の具体例である。四つの視点を取り入れることによって、自然と生徒は学びたいような活動になっていることが分かる。このように四つの視点を取り入れれば、「学びに向かう力」を涵養する言語活動になる。

(2) 授業デザインのヒント&チェック

以上のことをまとめて、児童生徒が「学びに向かう力」を涵養するために、四つの視点を取り入れて言語活動をデザインする際のヒントを整理した（資料 6-13）。一つの言語活動でこれらの項目を全て使う必要はないが、授業で児童生徒が「学びに向かう力」を涵養するための言語材料のデザインのヒントとして活用可能である。なお、児童生徒の状況に応じることが大事であるので、項目の文言を改善したり、項目を増やしたりして、自校化して活用いただければと思う。

資料 6-13 四つの視点からの授業デザインのヒント

	授業デザインのヒント	Check
必要性	ア 目的をはっきりさせた言語活動の設定（誰に対して、なぜ？）	☐
	イ 場面・状況をはっきりさせた言語活動の設定（いつ、どこで、どのように？）	☐
	ウ やってみたいくなる、あと少しで自分でもできそうな言語活動の設定	☐
自律性	ア 言語活動のゴールまでの学習計画を考える時間の設定（粘り強さ）	☐
	イ 言語活動で用いる言語材料を意識する機会の設定（単語や文法等の見立て）	☐
	ウ 途中でゴールまでの見通し（今から何をすべきか）の機会の設定	☐
関係性	ア 既習の語彙や文法等とのつながりを意識する手立て（言語材料）	☐
	イ ペア・グループ活動で他の児童生徒の知識や考えに触れる時間の設定	☐
	ウ 他の教科・科目で習ったこと（知識や技能）を活用する機会の設定	☐
有用性	ア 言語活動を成功させるための明確な支援の導入（教室掲示、練習の機会の充実）	☐
	イ 児童生徒の学習状況にあった言語活動にするための工夫（プリント等）	☐
	ウ 考えの深まりや英語面の充実、自分の成長を実感する振り返りの機会の設定	☐
	エ 学んだことが実生活・実社会でも生かせることを実感する機会の設定	☐

【引用文献】

エドワード・デシ、リチャード・フラスト著 「人を伸ばす力」（桜井茂男（監訳）） 1999 年 新曜社
 Dornyei, Z. 他 著 “Ten Commandments for motivating language learners: results of an empirical study” in *Language Teaching Research* 1998 年 Hodder Arnold

4 小学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本校では令和元年度から、「未来の創り手に求められる資質・能力を育成する授業づくり」を研究主題に掲げ、実践研究に取り組んできた。これまでの研究を通して、本校の児童は慣れ親しんだ表現を使って自分の考えや気持ちは伝え合うことはできるが、相手の反応に応じてやり取りしたり、目的をもって粘り強く会話を続けようとしたりすることに課題があることが分かった。

そこで本年度は、コミュニケーションの目的や見通しを明確にし、「自分の問い（めあて）」を立てて活動に取り組むことが、試行錯誤しながら粘り強く会話を続けようとする姿につながると考え、未来の創り手に求められる資質・能力を育成するために、『必要性』を高める教師の手立て、『自律性』を高める教師の手立て、『関係性』を高める教師の手立て、『有用性』を実感させる教師の手立ての視点から授業改善を行うこととした。

(2) 研究の実践（第4学年「ミッション！好きな曜日をリサーチせよ！」

Let's Try! 2 Unit 3 “I like Mondays.” ～好きな曜日は何かな？～

ア 授業で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
曜日の言い方や、“What day is it?”, “I like ～.” の表現を使い、曜日を尋ねたり答えたりする表現を理解している。	自分のことをよく知ってもらったり、相手のことをよく知ったりするために自分や相手の好きな曜日について簡単な語句や基本的な表現を用いてお互いの考えや気持ちなどを伝え合っている。	自分のことをよく知ってもらったり、相手のことをよく知ったりするために自分や相手の好きな曜日について簡単な語句や基本的な表現を用いてお互いの考えや気持ちなどを伝え合おうとしている。

イ 使用した授業デザインのヒント&チェック

児童が「学びに向かう力」を涵養するために、四つの視点を取り入れて言語活動をデザインする際のヒントを整理した。一つの言語活動でこれらの項目を全て使う必要はないが、授業で児童が「学びに向かう力」を涵養するための言語材料のデザインのヒントとして活用可能である。なお、児童の状況に応じることが大事であるので、項目の文言を改善したり、項目を増やしたりして、自校化することも大切である（太字は自校化した項目）。

	授業デザインのヒント	Check
必要性	ア 目的をはっきりさせた言語活動の設定（誰に対して、なぜ？）	☐
	イ 場面・状況をはっきりさせた言語活動の設定（いつ、どこで、どのように？）	☐
	ウ 自分が発表したい内容を考えさせる機会の設定	☐
自律性	ア 言語活動のゴールまでの学習計画を考える時間の設定（粘り強さ）	☐
	イ どんな学習の仕方でゴールを目指すか児童に選ばせる時間の設定	☐
	ウ 途中でゴールまでの見通し（今から何をすべきか）の機会の設定	☐
関係性	ア 既習の語彙や文法等とのつながりを意識する手立て（言語材料）	☐
	イ ペア・グループ活動で他の児童生徒の知識や考えに触れる時間の設定	☐
	ウ 他の教科・科目等で習ったこと（知識や技能）を活用する機会の設定	☐
有用性	ア 言語活動を成功させるための明確な支援の導入（教室掲示、練習の機会の充実）	☐
	イ 生徒の学習状況にあった言語活動にするための工夫（プリント等）	☐
	ウ 考えの深まりや英語面の充実、自分の成長を実感する振り返りの機会の設定	☐
	エ 学んだことが実生活・実社会でも生かせることを実感する機会の設定	☐

過程(分)	主な学習活動	教師の手立て
意欲をもつ (7)	1 HRT と AEA のモデルスキットを見て活動の目的を知り、「自分の問い(めあて)」を立てる。 モデルスキットを見せた結果 今日はいよいよ「インタビュークイズ」だ。誰のスケジュール帳か当てるのは楽しそうだな。 今日は、相手の目を見てインタビューすることに気を付けてがんばろう。 質問を工夫して、スケジュール帳の持ち主を探そう。	○ スケジュール帳に書かれた内容から持ち主を探すモデルスキットを見せることで、本時の活動の見通しをもたせ、「自分の問い(めあて)」を立てさせる。  必要性アウ 自律性ウ
楽しむ (31)	2 本時の活動で使えるような表現について考える。 これまでに学習した表現で、どのような表現がインタビューで使えるのでしょうか。 好きな曜日を尋ねる時に、「What day do you like?」が使えるのだよ。 「Do you like ~?」で好きなものを探ねてもよさそうだよ。 3 「Word Adventure Time」を行う。 インタビューの前に、どのような活動をしたいですか。 ぼくは、タブレットで曜日の言い方をもう一度確認したい。 4 コミュニケーションのポイントを確認し、チャレンジタイム①を行う。 アイコンタクトに気を付けて、たくさんインタビューしよう。 友達が聞き取りやすいように、大きな声で英語を話したいな。 5 「1-up time」を行う。 (1) やり取りの中で生じた課題や友達のよいところを共有する。 友達のインタビューのよいところはどのようなところですか。また、困ったことはありましたか。 目を見て話すとよく伝わっている感じがしたよ。 (2) 「1-up chants」で反応の確認をする。 聞き取れなかった時は「Once more, please.」を使えばいいんだね。 6 チャレンジタイム②を行う。	○ モデルスキットで聞こえた表現や、スケジュール帳の持ち主を探すために使えるような表現を想起させる。 ○ 「Word Adventure Time」では、自信をもって「チャレンジタイム①」を行うために、タブレットPCのコンテンツ、AEA や友達との会話から自分に適した活動を選択して行うことができるようにする。 自律性ア ○ 「1-up time」では、「チャレンジタイム①」のやり取りを通して生じた課題や友達が使っていたよい表現を全体で共有することで、後半のコミュニケーション活動で活用することができるようにする。   関係性イ ○ 「1-up time」を生かしてチャレンジタイム②を行うようにする。
振り返る (7)	7 学習について「My Goal」カードで振り返る。 今日の学習でどんなことができるようになりましたか。また、そのためにどのような工夫をしましたか。 たくさん話したから「What day do you like?」や「I like ~.」が前より上手に言えるようになったよ。 友達の目を見て、大きな声で好きな曜日とその理由を尋ねることができたよ。 反応する言葉を使って、友達と楽しくインタビューすることができたよ。	○ 「My Goal カード」にできるようになったことや頑張ったことを記入させ、その理由を問い掛けることで、これまでに学習した言葉の有用性に気付かせたり、言葉を工夫することで自分の思いや考えを自由に表現することができるという楽しさに気付かせたりする。 有用性ウ

5 中学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

ア 単元目標に向かう毎時間の帯活動の工夫

「学びに向かう力」を涵養させるために、毎時間の帯活動を単元目標に関連させることによって、単元目標に向けた活動がよりスムーズになると考えた。多くの生徒はペア活動を通してお互いのコミュニケーション力を向上させようと意欲的に授業に参加している。そのため、帯活動に意味付けをすることで、単元目標と関連性のない単発的な帯活動よりも言語材料の定着が期待され、単元目標につながるのではないかと考えた。

イ 展開活動の工夫

日頃からペア活動やグループ活動において、男女とも協力しながら活動しているため、将来の夢についてのスピーチ作成に向けて、どんな職業に適正があるかをペアで協働しながら見付けていく方法がより効果的だと考えた。職業診断シートを使いながら、普段の様子や 3 minutes writing の過去の夢なども読みながら、英語でアドバイスできると考えた。

(2) 研究の実践（第2学年「単元 Program 6 A Work Experience Program (SUNSHINE)」）

ア 授業で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
○ 不定詞の意味・用法の意味や働きを理解している。 ○ 日常的な話題（将来の夢）について考えたことや感じたことを不定詞や助動詞などを用いて伝え合う技能を身に付けている。	友達の意見等を踏まえた自分の将来の夢についての自分なりの考えをもつために、日常的な話題（将来の夢）について自分の考えやその理由などを伝え合っている。	友達の意見等を踏まえた自分の将来の夢についての自分なりの考えをもつために、日常的な話題（将来の夢）について自分の考えやその理由などを伝え合おうとしている。

イ 使用した授業デザインのヒント&チェック

生徒が「学びに向かう力」を涵養するために、四つの視点を取り入れて言語活動をデザインする際のヒントを整理した。一つの言語活動でこれらの項目を全て使う必要はないが、授業で生徒が「学びに向かう力」を涵養するための言語材料のデザインのヒントとして活用可能である。なお、生徒の状況に応じることが大事であるので、項目の文言を改善したり、項目を増やしたりして、自校化することも大切である。

	授業デザインのヒント	Check
必要性	ア 目的をはっきりさせた言語活動の設定（誰に対して、なぜ？）	☐
	イ 場面・状況をはっきりさせた言語活動の設定（いつ、どこで、どのように？）	☐
	ウ やってみたいくなる、あと少しで自分でもできそうな言語活動の設定	☐
自律性	ア 言語活動のゴールまでの学習計画を考える時間の設定（粘り強さ）	☐
	イ 言語活動で用いる言語材料を意識する機会の設定（単語や文法等の見立て）	☐
	ウ 途中でゴールまでの見通し（今から何をすべきか）の機会の設定	☐
関係性	ア 既習の語彙や文法等とのつながりを意識する手立て（言語材料）	☐
	イ ペア・グループ活動で他の生徒の知識や考えに触れる時間の設定	☐
	ウ 他の教科・科目等で習ったこと（知識や技能）を活用する機会の設定	☐
有用性	ア 言語活動を成功させるための明確な支援の導入（教室掲示、練習の機会の充実）	☐
	イ 生徒の学習状況にあった言語活動にするための工夫（プリント等）	☐
	ウ 考えの深まりや英語面の充実、自分の成長を実感する振り返りの機会の設定	☐
	エ 学んだことが実生活・実社会でも生かせることを実感する機会の設定	☐

過程(分)	主な学習活動	教師の手立て
導入 (10)	1 ペアで帯活動①(Q and A)に取り組む。 自分の将来の職業の発表についてつながるよう質問文を事前に考えておく。 自分の興味・関心は何にあるのか気付く。 2 ペアで帯活動② 1 minute talking and 3 minutes writing (My History) に取り組む。	○ 単元目標を意識した質問文を事前に準備しておくことによって、毎時間の Q and A につながりをもたせる。 自律性イ, ウ ○ 自分史を書かせることにより、過去の自分を見つめるさせたり、自分事として単元目標に取り組ませる。 必要性ウ
展開 (37)	3 本時の目標を自己評価カードに書く。 Let's find our jobs! 4 Sec. 2 本文の内容を復習する。 (本文 CD 同時読み, 計測, 暗唱, リテリング) 前時の自分の音読・暗唱を更に上達していく。 えーと、次なんて言えればいいのかな? (リテリングの場面) あなたが職場体験でしたこと あ! I played with children. 5 職業診断シートで友達の職業を見付ける。 6 お互いの結果を参考に、ぴったりの職業を理由も付けて書く。 7 完成した英文をお互い伝え合う。 You should be a writer because you like to read books. Thank you for your advice. 8 友達のアドバイスを参考に、自分の夢について理由まで付けて書く。 I want to be an English teacher because I am good at English. 9 自分の夢について発表し、シェアリングする。 10 本時のまとめをする。	○ 見通しをもって学習に取り組めるよう、学習の過程を確認する。 自律性ウ ○ ナチュラルスピードの音読についていけるよう少し高め目標を与える。 必要性ウ ○ 暗唱では、ペアになりどこまで暗唱できるか、ヒントを出し合いながら取り組ませる。  関係性イ ○ 帯活動で書いている My History の英文や日頃の行動も参考にさせる。 関係性イ ○ 最初に I will advise you. と付け加えてから、アドバイスさせる。アドバイスしてもらったら、Thank you for your advice.とお礼を言うように指示する。 関係性イ ○ 友達からのアドバイスから、自分自身の新たな一面に気付かせる。 関係性イ 有用性アウ ○ 書き終えた生徒には次の質問を与える。 (例) “What will you do to be an English teacher?”  有用性ア ○ 自己評価カードに自分の夢やしたいことを書かせ、単元目標到達に向けて活用につなげる。 有用性ウ
終末 (3)		

6 高等学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本研究の実証授業を行った高校では、教科の垣根を越えてアクティブラーニング型の授業を実践しており学校全体に互いに教え合い、高め合う雰囲気のある中、生徒は安心して言語活動に取り組んでいる。

1年次から習熟度別授業を実施し、生徒は様々な言語活動に意欲的に取り組んだり、毎年のインタビューテストや実用英語技能検定の受検などスモールステップを経験したりしながら、4技能をバランスよく高めてきた。しかしながら、自分の意見を論理立てて説明することを苦手としており「自分の考えを英語で表現する力」の育成に関する課題が挙げられる。そこで、場面を英語のまま把握したり、即興で表現したりする機会を多く設定し、英語で考えて即興で応答する力を高めることを本研究の目的とした。

(2) 研究の実際（第3学年 単元「Lesson 10 “The Poorest President in the world”」）

Landmark Fit English Communication III 啓林館

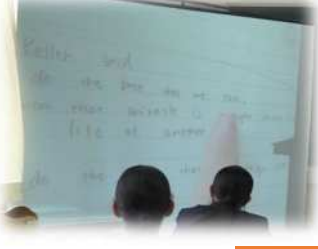
ア 授業で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
本文に出てくる語彙や表現を理解している。また、本文の内容を、適切な抑揚やリズムで伝える技能を身に付けている。	本文を理解し、内容について互いに伝え合っている。また、本文に関連して、自分の考えを英語で表現している。	本文を理解し、内容について互いに伝え合おうとしている。また、本文に関連して、自分の考えを英語で表現しようとしている。

イ 使用した授業デザインのヒント&チェック

生徒が「学びに向かう力」を涵養するために、四つの視点を取り入れて言語活動をデザインする際のヒントを整理した。一つの言語活動でこれらの項目を全て使う必要はないが、授業で生徒が「学びに向かう力」を涵養するための言語材料のデザインのヒントとして活用可能である。なお、生徒の状況に応じることが大事であるので、項目の文言を改善したり、項目を増やしたりして、自校化することも大切である。

	授業デザインのヒント	Check
必要性	ア 目的をはっきりさせた言語活動の設定（誰に対して、なぜ？）	☐
	イ 場面・状況をはっきりさせた言語活動の設定（いつ、どこで、どのように？）	☐
	ウ やってみたいくなる、あと少しでも自分でもできそうな言語活動の設定	☐
自律性	ア 言語活動のゴールまでの学習計画を考える時間の設定（粘り強さ）	☐
	イ 言語活動で用いる言語材料を意識する機会の設定（単語や文法等の見立て）	☐
	ウ 途中でゴールまでの見通し（今から何をすべきか）の機会の設定	☐
関係性	ア 既習の語彙や文法等とのつながりを意識する手立て（言語材料）	☐
	イ ペア・グループ活動で他の生徒の知識や考えに触れる時間の設定	☐
	ウ 他の教科・科目等で習ったこと（知識や技能）を活用する機会の設定	☐
有用性	ア 言語活動を成功させるための明確な支援の導入（教室掲示、練習の機会の充実）	☐
	イ 生徒の学習状況にあった言語活動にするための工夫（プリント等）	☐
	ウ 考えの深まりや英語面の充実、自分の成長を実感する振り返りの機会の設定	☐
	エ 学んだことが実生活・実社会でも生かせることを実感する機会の設定	☐

過程 (分)	主な学習活動	教師の手立て
Warm-up(10)	○ 単語の音読	
Comprehension (Textbook) Reading(10)	○ 要点を把握する。 “Happiness comes first.” ○ リテリング活動。  ペアでやるので、 がんばらなくては！	○ 黒板に要点をまとめる。以前聞いたスピーチの内容と関連させる。 ○ リテリングをする際に、次の表現活動への意欲を高めさせる。 必要性 ウ
Activity 1 Sharing ideas in pairs/groups (20)	○ 英語で考える下準備として recitation をする。 ○ Happiness について、ペアで発表する。 【質問項目】 --- “What makes you happy?” --- “When you work in the future, what change do you want to make?”  どんな風に言ったら、説得力をもたせられるかな？ ○ 相手の意見に対し、You said~, so in that case, what about...? など理解を深める質問をする。  相手の意見をしっかり聞こう！	○ 教師や生徒のモデルを見た後に、自分の考えを確認させる。  自律性 ウ ○ ペア・グループで発表し、理解を深めるような質問を促す。 
Activity 2 Sharing ideas in the class (8)	○ 数名が発表し、全体で共有する。 自分で書いた英文をみんなの前で発表した。緊張して足が震えたが質問もしてくれてよかった。	○ 発表を聞いて、自分の意見に付け加えるなど内容の充実を促す。 関係性 イ
Closing (2)	○ 本時の授業を振り返る。 発展講座で物語の暗唱もした。物語を全部覚えることができてとても達成感があった。 ○ 挨拶	○ 近くの生徒と一緒に振り返りを行い、成長を実感させる。  有用性 ウ

おわりに

私たち教師は、日々、授業計画を立て、授業づくりを当たり前のように行っている。しかし、それは時に無自覚的であり、必ずしも児童生徒の実態に最適化した学びを促すことに貢献しているとは言いがたいということはないだろうか。さらに、私たち教師は、これまで自分たちが授業をスムーズに行う上で都合のよい手立てを並べ、児童生徒の思いを十分汲み取らない、いわゆる教師主導の授業づくりをしてこなかっただろうか。

学びの価値を見いだす授業デザインを行うということは、児童生徒に「学びに向かう力」を涵養する授業づくりによりよく向かうことにつながると同時に、自分のこれまでの授業づくりを振り返る機会や視点の獲得が期待できると考える。いわば、学びの価値を見いだす授業をデザインするということは、自分の指導観、ひいては児童生徒観、教育観をも振り返ることができる機会を得たと捉えることができるのではないだろうか。

私たち教師が授業で対面している児童生徒は、将来訪れるであろう予測困難な時代を生き抜くために、身に付けた知識や技能を基に考えたり表現したりすることができる力を育成しなくてはならないと言われて久しい。そのためには、考え続け、学び続けていくための「学びに向かう力」を、どんな環境や時代においても常にもち続けながら生きていってほしいと考える。児童生徒のために私たち教師が今できることは、目の前の児童生徒の資質・能力の三つの柱をバランスよく育成することに努め、児童生徒一人一人の実態を踏まえた最適な授業をデザインしていくことだ。

児童生徒同様に、私たち教師も一人の学び手として、授業改善に対して真摯に向き合い続けることを切に願う。

【主な引用・参考文献】

- 中央教育審議会 『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援 平成 28 年
学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等
について（答申）』
- 文部科学省 『小・中学校学習指導要領解説』総則編，各教科等 平成 29 年
編
- 文部科学省 『高等学校学習指導要領解説』総則編，各教科等編 平成 30 年

- 藤岡 完治 他 『成長する教師——教師学への誘い』 平成 10 年 金子書房
- エドワード・L・デシ，『人を伸ばす力 内発と自律のすすめ』 平成 11 年 新曜社
リチャード・フラスト
- ダニエル・ピンク 『モチベーション 3.0』 平成 22 年 講談社
- 大島 純，『主体的・対話的で深い学びに導く学習科学ガイド 平成 31 年 北大路書房
千代西尾 祐司 ブック』
- 稲垣 忠 『教育の方法と技術 主体的・対話的で深い学びを 平成 31 年 北大路書房
つくるインストラクショナルデザイン』